HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	手続き的意味による談話標識「なんか」と「怎么说」の分析
Author(s)	楊, 雯淇
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13630号
Issue Date	2019-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k13630
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74401
Type	theses (doctoral)
File Information	Yang_Wenqi.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 30 年度博士論文

手続き的意味による談話標識「なんか」と「怎么说」の分析

北海道大学大学院国際広報メディア観光学院
国際広報メディア専攻

楊雯淇

目次

第 1 章 はじめに 1
1.1 「なんか」と「怎么说」 1
1. 2 談話標識の研究 2
1.2.1 談話標識の概念の捉え方 2
1.2.2 談話標識研究のアプローチ 3
1.2.3 関連性理論的アプローチ 3
1.3 本研究の枠組み 4
1.4 本研究の構成 5

第 2 章 理論的枠組み 6
2.1 関連性理論 6
2.2 手続き的意味の提案 7
2.3 手続き的意味の発展 8
2.3.1 発展の 4 つの段階 8
2.3.2 手続き的意味の捉え方 11
2.3.2.1 「制約」に基づく手続き的意味の概念 11
2.3.2.2 「活性化」に基づく手続き的意味の概念 13
2.4「活性化」の概念を用いた Wharton の枠組み 13
2.4.1 間投詞の手続き的意味 13
2.4.2 表出表現への拡張 16
2.4.3 非言語的表現への拡張 17
2.4.3.1 顔の表情 17
2.4.3.2 韻律 19
2.5 広範囲モジュール性 20
2.6 まとめ 22

第 3 章 「なんか」の先行研究 24
3.1 はじめに 24
3.2「なんか」の多様な機能 24
3.2.1 婉曲 25

3.2.2 責任回避 25
3.2.3 発話権に関わる機能 26
3.2.4 話題に関わる機能 28
3.3「意味論的機能」からの由来 29
3.4 認知的観点からの研究 32
3.5 先行研究の問題点 33

第 4 章　手続き的意味による談話標識「なんか」の分析—制約の観点から 35
4.1 談話話標識「なんか」の性質 35
4.1.1 非真理条件性 35
4.1.2 非概念性 36
4.2「なんか」と高次表意の制約 40
4.3「どうも」との比較 46
4.4 「制約」に基づく分析の限界 50

第 5 章　手続き的意味による談話標識「なんか」の分析—活性化の観点から 53
5.1 表出表現と「なんか」 53
5.2「なんか」と認識的警戒の活性化 55
5.3「なんか」の不明瞭性 57
5.4「なんか」と他の談話標識との共起 59
5.4.1「ただし」と推論的理解の活性化 59
5.4.2「どうも」と共感の活性化 61
5.4.3 手続き的意味の非合成性 62
5.4.4 活性化の優先順位の仮説 63
5.5「なんか」の韻律 67
5.5.1「なんか」の多様な韻律 67
5.5.2「なんか」の韻律の手続き的意味 70
5.6 まとめ 73

第 6 章　手続き的意味による談話標識「怎么说」の分析 74
6.1 談話話標識「怎么说」の先行研究 74
6.1.1 「怎么说」の多様な意味・用法 74

6.1.2 談話話標識「怎么说」の多様な機能 75
6.1.3 先行研究の問題点 78
6.2 談話話標識「怎么说」の性質 79
6.2.1 非真理条件性 79
6.2.2 非概念性 80
6.3「怎么说」の手続き的意味 82
6.3.1 「怎么说」と高次表意の制約 82
6.3.2 「怎么说」と認識的警戒の活性化 83
6.4 まとめ 87

第 7 章　まとめと今後の課題 88
7.1 まとめ 88
7.2 今後の課題 90
7.2.1 モジュールの階層構造の精緻化 90
7.2.2 「なんか」と「怎么说」の比較 90

参考文献 92
謝辞 99

第 1 章 はじめに

本研究は、一般に「談話標識 (discourse marker) 」と呼ばれている日本語の「なんか」を、関連性理論の枠組みで提案された「手続き的意味」を用いて分析し、さらにその分析を、「なんか」にほぼ対応する中国語の談話標識「怎么说」にも応用することを目的とする。

手続き的意味の概念は、Blakemore (1987) によって提案されて以来、それを用いた経験的な研究の増加とともに、その概念的特徴づけや理論的枠組みの研究も活発に行われ、現在も発展しつつある。特に、Blakemore (1987, 2002) が提案した「制約 (constraint)」に基づく手続き的意味に代わるものとして、Wharton (2003, 2009) が「活性化 (activation)」に基づく手続き的意味の概念を提案したことは、画期的な発展と考えられている。しかし、この 2 つの手続き的意味の概念の経験的な違いは十分に明確にされてはいない。

本研究では、手続き的意味の概念を用いた日本語の談話標識「なんか」の分析を通して、制約に基づく手続き的意味と活性化に基づく手続き的意味を比較し、「制約」より「活性化」に基づく手続き的意味の方が経験的に優れていることを示すことも目的とする。その上で、活性化に基づく手続き的意味を用いて中国語の「怎么说」の分析も行う。

本章の構成は以下の通りである。まず、1.1 節で、本研究が対象とする 2 つの表現について簡単に説明する。次に、1.2 節では、これまでの談話標識の研究、特に談話標識の概念と従来の研究のアプローチについて概観する。1.3 節では、本研究の枠組みを簡単に説明する。最後に、1.4 節では、本研究の構成を説明する。

1.1「なんか」と「怎么说」

まず、本研究が対象とする 2 つの表現「なんか」と「怎么说」について簡単に説明する。『現代副詞用法辞典』は、「『なんか』は『なにか』のくだけた表現で、日常会話ではよく用いられる」表現であると特徴づけている。同様に、中国語の「怎么说」という表現は、本来は「怎么 (どのように)」と「说 (言う)」を組み合わせた動詞句であり、日常会話では、本来の意味でも使用されているが、日本語の「なんというか」あるいは「なんか」とほぼ対応した用法も多く見られる。

本研究は、日常会話でよく使われる談話標識としての「なんか」と「怎么说」を対象とする。2 つの表現とも、ほぼ無意識に頻繁に使用されており、コミュニケーションを円滑にする機能を持つと考えられてきた。「談話標識」や「フィラー」などとも呼ばれており、近年特に研究が盛んになりつつある。

1.2 談話標識の研究

1.2.1 談話標識の概念の捉え方

前節では、上述した 2 つの表現を談話標識と呼んだが、本節では、談話標識の概念について簡単に説明する。談話標識の定義は研究の目的や方法によって異なっており、多くの議論がある。Schourup (1999: 242) は、典型的な談話標識は、「統語的に任意 (syntactically optional)」であり、「非真理条件的 (non-truth conditional)」な「連結表現 (connective expressions)」であると述べている。この特徴づけに基づくと、Lohmann & Koops (2016: 420) が指摘したように、たとえば、英語の *and, but, so* などの表現は、「発話の冒頭に使用されている時には、上述の 3 つ基準を満たしており、典型的な談話標識と考えられる」のである。一方、*yes* や *okay* のような表現は、「統語的に任意であり、関連する発話の真理条件に影響しないという Schourup の 2 つの基準を満たしているが、先行する発話に関連付けることによって次の発話を導入しているようには思われないという点で、典型的な談話標識とは明らかに異なる」のである。間投詞 (interjections) も同様に、「明確な接続機能の欠如」という問題を抱えているため、たとえば、Schiffrin (1987) が談話標識として位置付けた *oh* を Fraser (1999) は談話標識の範疇から除外するというような、分類の相違がしばしば生じるのである (Lohmann & Koops 2016: 420)。このように、談話標識の定義の難しさのために、その領域の境界を明確に決めることが難しく、間投詞やフィラーなどの領域との関係も不明瞭である。しかし、その領域をはっきりさせるため、「あまりにも限定された定義を採用すると、興味深い言語的現象の一般化を見逃す危険を冒すことになる」のである (Lohmann & Koops 2016: 420)。順序の一般化はその 1 つの例である。Lohmann & Koops (2016: 420)は、「順序 (sequencing) の観点から見ると、周辺的な談話標識もかなり興味深い」研究対象であると指摘した。また、Lohmann & Koops (2016) が指摘しているように、「Schiffrin (1987, 2001) のより包括的な定義を採用することで、*oh* と他の 10 個の談話標識のどれかを繋げて使用する時、*oh* がそれらのすべての談話標識より先行するという傾向が観察された」のである。

実際に、本研究で取り上げる「なんか」も、先行研究の中では、「談話標識」に加えて、「フィラー」、「心的操作標識」、「前置き表現」などとも呼ばれている。日常会話で使用される「なんか」は、使用される場面ごとに特徴が異なり、先行研究はそれぞれ関心のある特徴を持つ「なんか」に焦点を当てていることが 1 つの理由だと考えられるが、このように様々な名称で呼ばれているのは、「なんか」が連続体をなしており、連続体の中に点在する性質の異なる「なんか」のすべてを 1 つの名称で表すことが難しいのが理由と考えられるかもしれない。しかしながら、これらの「なんか」は全て手続き的意味を持つという共通性がある。そこで、本研究では、「なんか」が所属しうるカテゴリーの名称の定義や射程を検討する議論は行わず、むしろ

「なんか」が手続き的意味を持つという側面に注目し、多様性や変異を含む広い意味での談話標識としての性質を明らかにすることを目的とする。同様に、第 5 章において、順序に関わる議論の中で取り上げる、「ただし」「どうも」、及び、第 6 章で取り上げる、対応する中国語の表現の「怎么说」もすべて談話標識と呼び、それぞれの表現の手続き的意味の側面の分析に主眼を置く。

1.2.2 談話標識研究のアプローチ

松尾・廣瀬・西川 (2015) は英語の談話標識のこれまでの研究を 4 つのアプローチ、すなわち、「テクスト分析的アプローチ」「会話分析的アプローチ」「コーパス言語学的アプローチ」「語用論的アプローチ」に分類し、その発展を概観した。松尾・廣瀬・西川 (2015) によると、Halliday & Hasan (1976) に代表されるテクスト分析的アプローチと Schourup (1985)、Schiffrin (1987) に代表される会話分析的アプローチは、談話の構築に重点を置いており、談話標識がどのように、様々な角度から談話の構築に貢献するのかを考えるアプローチである。次に、コーパス言語学的アプローチは、「本物 (authentic) の資料に基づく分析」を重視するアプローチである。また、語用論的アプローチでは、談話標識は「従来の語用論において中心的な課題として取り上げらなかった」が、「慣習的含意を担う要素」Grice (1975/1989) や「談話的ダイクシスを担う要素」(Levinson 1983) として位置付けられている。より新しいアプローチとして、松尾・廣瀬・西川 (2015) は、「関連性理論的アプローチ」[1]「Fraser のアプローチ」「歴史語用論と文法化・主観化・間主観化に関するアプローチ」を取り上げて紹介した。Fraser (1990, 1996, 2009) は広範囲の「語用論標識 (pragmatic marker)」を細かく分類している点で他のアプローチと区別される。また、「歴史語用論と文法化・主観化・間主観化に関するアプローチ」は、通時的な観点を取っており、時間が経つのに連れて、対象表現の意味と用法が変化する過程を記述することを主な目的とするアプローチである。第 3 章と第 6 で紹介するが、これまでの日本語の「なんか」と中国語の「怎么说」についての研究では、会話分析や文法化のアプローチが用いられており、さらに、一部の研究は、純粋にコーパス言語学の研究ではないが、データとしてはコーパスの資料を使用している。しかし、関連性理論的アプローチは、これまでこの 2 つの談話標識の研究には用いられていない。

1.2.3 関連性理論的アプローチ

関連性理論のアプローチは、人間の脳内の認知プロセスを重視する認知的アプローチであ

[1] 松尾・廣瀬・西川 (2015) は「関連性理論と談話標識」という名称で取り上げていたが、本稿では、「関連性理論的アプローチ」と呼ぶ。

るという点に特徴があり、他の多くのアプローチから区別される。このアプローチでは、Blakemore (1987) による「手続き的意味」の提案に基づき、ほとんどの談話標識は手続き的意味を持ち、聞き手の推論に制約をかけ、発話解釈を方向付ける働きをすると考えられている。

日本語の談話標識の研究において、関連性理論を用いた談話標識の研究として、武内 (2015) が挙げられる。武内 (2015) では、「どうせ」「しょせん」「どうも」「やはり・やっぱり」「それで」などの一連の「談話連結語」が持つ手続き的意味を分析している。これらの研究は、Blakemore に従い、手続き的「制約」という観点から、対象表現が持つ手続き的意味がどのように、聞き手の発話の解釈に「制約」を課し、どのように発話の推意や高次表意の構築に貢献するかを考察した[2]。制約に基づく手続き的意味は、ある程度談話標識の意味・用法を統一的に説明できるのだが、いくつかの問題点が残っている。この問題については、第 4 章と第 5 章で論じるが、たとえば、「弱いコミュニケーション」における使用や、2 つの談話標識の共起などの現象について、十分な説明力を持つとは言えない。

最後に、第 2 章で詳しく説明するように、最近では、同じ関連性理論の枠組みで、Wharton (2003, 2009) と Wilson (2011, 2016) によって発展させられた「モジュールの活性化」という考え方が、「制約」に代わる概念として用いられ始めている。「モジュールの活性化」は、「制約」に基づくこれまでの談話標識の研究で残された課題を解決するための新たな糸口を提供することが期待できる。しかしながら、「活性化」を用いた談話標識の分析はまだ数が多くなく、「活性化」と「制約」との経験的な違いも十分に論じられていない。

1.3 本研究の枠組み

本研究では、関連性理論の枠組みで、活性化に基づく手続き的意味を用いた、談話標識「なんか」と「怎么说」の分析を提案する。この 2 つの表現の従来の分析とは異なり、主に聞き手の発話解釈の観点から、「なんか」と「怎么说」の意味・機能を分析し、さらに先行研究でほとんど論じられていなかった談話標識の順序の問題と談話標識に伴う韻律の問題の統一的な分析も試みる。また、この「なんか」の事例研究を通して、「制約」の概念と「活性化」の概念に基づいた手続き的意味を比較し、後者が経験的により優れていることを明確にすることによって、手続き的意味の研究の発展に貢献することも目的とする。

本研究では、先行研究で挙げられている例文を再検討するのと同時に、作例及びドラマ、テレビ番組の発話例も使用する。作例は、日本語の母語話者による容認度判断を行なっている。

---

[2] 武内 (2015) は、「から」「ので」「ば」「れば」「たら」「なら」などが「概念と手続きの双方を記号化している」と述べている。

1.4　本研究の構成

本研究の構成は次の通りである。まず、第 2 章では、本研究が行う分析の理論的枠組み、すなわち関連性理論及び手続き的意味の概念を中心に説明する。第 3 章では、日本語談話標識「なんか」の先行研究を概観し、問題点を整理する。第 4 章では、制約に基づく手続き的意味を用いた「なんか」の分析を提案し、さらにこのアプローチではうまく説明できない問題を指摘する。第 5 章では、活性化に基づく手続き的意味を用いて、「なんか」を再分析し、活性化を用いた分析の利点を示す。第 6 章では、中国語談話標識「怎么说」の手続き的意味の分析を行う。最後に、第 7 章はまとめと今後の課題である。

第 2 章　理論的枠組み

本章では、本研究の理論的枠組みである関連性理論の枠組みとその中心的な概念の 1 つである「手続き的意味 (procedural meaning)」を説明する。

本章の構成は次の通りである。まず、2.1 では関連性理論を概観する。次に、2.2 節では、Blakemore (1987) によって提案された、関連性理論の中心的な概念の 1 つである「手続き的意味」を紹介する。2.3 節では、「手続き的意味」の研究の史的変遷を紹介する。Carston (2016) に基づいて、まず、手続き的意味を持つと思われる対象表現の範囲の変化について説明し、次に、手続き的意味そのものの性質の捉え方の発展、すなわち、「制約 (constraint)」に基づく手続き的意味から「活性化 (activation)」に基づく手続き的意味への発展について説明する。次に、2.4 節では、「活性化」を用いた間投詞や表出表現の事例研究ないし非言語的表現への拡張を紹介する。最後に、2.5 節では、Wilson (2011, 2016) が手続き的意味の研究の展望の中で示した「広範囲モジュール性 (massive modularity)」の仮説を紹介する。

2.1 関連性理論

Sperber & Wilson (1986/1995) が提唱した関連性理論は、「意図明示推論的コミュニケーション (ostensive-inferential communication)」を対象とし、聞き手は、どのような発話解釈の過程を通して、発話が表現している意味、ないし「話し手の意味」に到達するかを明らかにすることを目的としている。ある与えられた発話に対して、発話解釈を行う過程の中で、聞き手が潜在的に構築し得る解釈は多くある。しかし、多くの場合、聞き手は最終的に、話し手の意図した解釈とほぼ一致した方向に解釈を構築できる。これは、関連性理論の中心になっている 2 つの原理に導かれた結果と考えられている。

まず、第一原理は、「認知原理 (cognitive principle)」と呼ばれ、「人間の認知は、関連性を最大にするように働いている」ということを主張する原理である (Sperber & Wilson 1995: 260)。関連性 (relevance) とは、処理プロセスを受ける入力の特徴であり(Sperber & Wilson 1995: 260)[3]、(入力が聞き手にもたらす)「認知効果 (cognitive effects)」[4]と(その認知効果を得るための)「処理労力 (processing effort)」という 2 つの要因によって決められる。同じ条件のもとでは、認知効果が大きいほど関連性が大きく、処理労力が大きいほど関連性が小さくなると考えられている。人間の認知が「関連性指向」にできているため、コミュニケーションの中で与えられる発

[3] 入力とされるのは「発話」のほか、「知覚」できるものなどの「外的刺激」、さらにたとえば「思考」や「記憶」などの「内的な表示」も含む。(Sperber & Wilson 1995: 261, ウィルソン・ウォートン(今井邦彦編、井門亮他訳) 2009: 59 を参照)。

[4] Sperber & Wilson (1995: 83-117)は、認知効果は、文脈含意を加える効果、既存の想定を強化する効果、既存の想定を削除する効果の 3 つの種類があると仮定している。

話には、処理するのに値する関連性があることを期待するのである。言い換えると、話し手が発話すること自体が、自動的にその発話は関連性があるものだと聞き手に期待させるのである[5]。これは、「伝達原理 (communicative principle)」と呼ばれている関連性理論の第二の原理につながる。すなわち、「あらゆる意図明示的伝達行為は、最適な関連性の見込みを伝達する」のである (Sperber & Wilson 1995: 260)。最適の関連性の見込み (Presumption of Optimal Relevance) とは、「意図明示的刺激は、(1)受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある、(2)伝達者の能力 (abilities) と優先事項 (preferences) に合致するものの中で、もっとも関連性のあるものである」ということである (Sperber & Wilson 1995: 270)[6]。すなわち、聞き手は、発話は最適の関連性が達成されているかのように、解釈を進めるのである。この解釈の過程の中では、聞き手は発話の言語的意味をもとに、推論を用いて解釈を構築する。
関連性理論では解釈の手順を次のように考える。

関連性理論による解釈の手順

a. 処理コストが最小である道を辿りながら認知効果を計算する。接近可能な順序で解釈(一義化、文脈的想定、推意など)を考える。
b. 関連性の期待が満たされたら処理を止める。

(Wilson 2005: 1140)

後述するように、この解釈の過程は発話の「表意 (explicature)」と「推意 (implicature)」どちらの構築にも当てはまる。また、言語的情報の解釈だけではなく、発話に伴う非言語的情報の解釈においても、聞き手の関連性に導かれた推論が終始関与していると考えられている。

2.2 手続き的意味の提案

この関連性指向の推論を重視する関連性理論の枠組みでは、発話解釈における「表示 (representation)」に加えて、「計算 (computation)」という側面が注目されている。Blakemore (1987: 18) は、「発話が表す命題を決めるのに役に立たない」一連の談話連結語 (discourse connective) は、「命題の関連性を確立するための聞き手の推論的計算に制約を課す」ものとして分析すべきであると述べている[7]。ここでは、Wilson (2016) に挙げられた次の(1) - (3)の例を見てみよう。

---

[5] ウィルソン・ウォートン (今井邦彦編、井門亮他訳) (2009: 73-74)の説明に基づく。
[6] 本稿では、東森・吉村 (2003)、内田 (2011) などに従い、「Presumption of Optimal Relevance」の訳語に「最適な関連性の見込み」を使用している。今井 (2015) などでは、「最適の関連性の当然視」とも訳されている。
[7] Blakemore (1987) は、当初考察した手続き的表現を「談話連結語 (discourse connective)」と呼んでいたが、その後「談話標識(discourse marker)」という名称も使用した。第 1 章で述べたように、本研究では「談話標識」を使用する。なお、談話標識全体が手続き的意味を持つわけではない。たとえば Blakemore (1996)

(1) Lisa is French, *so* she doesn't need a passport to travel to Germany.

(2) Joe's argument is unoriginal. *Moreover,* it's invalid.

(3) The sun is shining, *but* here are clouds on the horizon.

(Wilson 2016: 7)

Wilson は Blakemore (1987) に従って、上の例の 3 つの談話標識を説明している。(1)では、*so* は、「Lisa はドイツに旅行に行くためにパスポートがいらないという命題が、(他の背景的想定と共に) 彼女はフランス人であるという命題の結論であることを示している」と説明できる。(2) では、*moreover* は、「先行する発話が表す命題も後続する発話が表す命題も、ある同一の結論に対する証拠を提供していることを示している」と分析できる。また、(3)では、*but* は、「それに後続する発話が表す命題が先行する発話から潜在的に得られる結論の構築を抑制することを示している」と分析できる。すなわち、これらの表現は、命題の表示に貢献せず、命題の関連性を確立するために行う推論に「指示 (instructions)」を出しているものである。Blakemore (1987: 144) は、このような「計算自体、すなわち心的過程に関わる」ものを、「計算の対象になる命題的表示の構成素に関わるもの」とは区別して、「手続き的 (procedural)」と「概念的 (conceptual)」という区別として提案している。Blakemore によると、これらの談話標識は「概念的意味」ではなく、「手続き的意味」をコード化しているものなのである。

2.3 手続き的意味の発展

2.3.1 発展の 4 つの段階

Blakemore (1987) によって「手続き的意味」という概念が提案されて以来、その概念の捉え方が少しずつ変化しているのと同時に、応用される分析対象の範囲も拡大されつつある。Carston (2016: 158) は「手続き的意味」がどのように研究に応用されてきたのかを 4 つの段階に分けて説明している。

まず、第 1 段階と Carston が呼ぶのは、Blakemore (1987) が「談話連結語」が持つとされた、手続き的意味を提案した時期である。この段階において、概念的意味は「真理条件的意味 (truth-conditional meaning)」と一致し、手続き的意味は「非真理条件的意味 (non-truth-conditional meaning)」と一致していると考えられており、手続き的意味を持つと考えられている表現はごく一部の談話標識（例：*moreover*, *after all*, *so*, *but*, *however*）に限られていた。そして、それら

では、*in other words*, *that is to say* など一部の同格標識 (apposition markers) は概念的意味をコード化していると考えられている。

の表現は命題内容に関わる概念的意味を持たず、命題内容同士の関係を明らかにするための処理についての指示に関わる手続き的意味を持つと考えられていた。言い換えると、この段階では、手続き的意味は推意を得られるまでの、聞き手の推論過程への制約あるいは指示と考えられたのである。さらに、これらの指示は一般的に聞き手が推意を得るためにかかる処理労力を減らして、関連性を高めることに貢献するものであった。

次に、Carston が第 2 段階と呼ぶ時期を、説明を簡単にするため、さらに 2 つの段階に分けて紹介する (表 1 では、段階①と段階②と表示した)。段階①は、手続き的意味が引き続き非真理条件的な表現の分析に応用されていた段階である。この段階では、たとえば、英語の *please*, *huh*, *alas* 及び日本語の「よ」「かな」に代表される「談話辞 (discourse particles)」が分析されている。これらの表現は「命題 (真理条件的) 内容の構成素を提供するのではなく、話し手の命題態度 (propositional attitude) あるいは発話行為 (speech act) の手掛かりとしての役割を果たす」働きをしていると考えられていた。また、これらの表現は、「ある意味で文に付随しているが、文構造に統合されておらず」(Carston 2016: 158)、「統語的に周辺的 (syntactically peripheral)」(Carston 2016: 159) であるという特徴を持っていた。

その後、第 2 段階の段階②では、分析の対象が「統語的に周辺的な」ものから、「統語的に統合されている (syntactically integral)」(Carston 2016: 159) 表現まで広がった。たとえば、Wilson & Sperber (1993) は「統語的要素 (syntactic elements)」である「平叙、命令、疑問を示す法標識と語順」は「話し手の命題的態度あるいは発話行為を決める際に聞き手が行う推論を制約する」ことを論じた。また、動詞のテンス或いはアスペクトを示す「屈折 (inflections)」や「モーダル (modal)」、さらに、たとえば *I*, *she* のような「代名詞 (pronoun)」(Wilson & Sperber 1993)、「指示詞(demonstratives)」(Scott 2011, 2013) なども手続き的意味を持つと論じられるようになった。このように、命題内容自体の表現における手続き的意味の役割も研究者の視野に入ったということがこの段階における大きな特徴である。

さらに言及する価値があるのは、分析の対象が「非真理条件的」なものから、「真理条件的」なものまで広がったことである。Wilson and Sperber (1993) は、真理条件的意味/非真理条件的意味の区別と、概念的意味/手続き的意味の区別とが一致するかという理論的な問題を提起し、代名詞の分析を通して、2 つの意味の区別が対応していないことを論証した。たとえば、代名詞は、それが指している対象を確定するための手続き的意味を持っており、手続きが実行されるに連れて、指示対象が確定され、真理値を持つ概念表示の構成素になるのである。すなわち、代名詞は手続き的であるのと同時に、真理条件に貢献するものなのである。他の指示表現の分析も同様の結論を示唆しているが、この段階の研究は、真理条件的意味/非真理条件的意味の区別と、概念的意味/手続き的意味の区別とは一致していないことを論証したという点で、理

論の発展に寄与している[8]。

これに続いて、第 3 段階では、手続き的意味の応用は「2 つの異なる方向」に発展した。1 つは、手続き的意味の「表出表現 (expressive devices)」の分析への応用である。たとえば、「間投詞 (interjections)」、「罵り言葉 (expletives)、「韻律 (prosody)」、「伝達的な顔表情 (inherently communicative facial gestures)」などが応用の対象となっている (Wharton 2003, 2009; Wilson & Wharton 2006; Blakemore 2011)。この段階では、手続き的意味を明確な言語的コードから、他のタイプのコードにまで応用しているという点が第 1 段階、第 2 段階とは異なっている。この段階の研究 (特に Wharton) で提案された「活性化 (activation)」あるいは「起動 (triggering)」という概念が本研究の重要な概念であり、2.4 節において詳細に説明する。

もう 1 つの方向に発展した段階、すなわち、第 4 段階では、Wilson (2011) などが、すべての概念的表現も、そのアドホック概念の構築のプロセスを起動する手続きをコード化しているという考えが提案された。この提案は、語彙語用論の研究に新たな視点を提供するものであると考えられている。

下の表は Carston (2016: 158-159) に基づいてまとめたものである。

Stage	Representatives	Candidates	Characteristics
Stage 1	Blakemore (1987)	discourse connectives e.g., *moreover*, *after all*, *so*, *but*, *however*	non-truth-conditional
Stage 2 ①	Not specified in Carston (2016)	so-called discourse particles e.g., *please*, *huh*, *alas* in English *yo*, *kana* in Japanese	syntactically peripheral ↓ syntactically integral
Stage 2 ②	Wilson & Sperber (1993) Escandell Vidal et al. (2011) Scott (2011, 2013)	word order verb phrase grammar e.g., inflections marking tense, aspect, modal verbs pronouns e.g., *I*, *she* demonstratives	non-truth-conditional ↓ truth-conditional

[8] Wilson (2016) も参照されている。

<table>
<tr><td>Stage 3</td><td>Wharton (2003, 2009)
Wilson & Wharton (2006)
Blakemore (2011)</td><td>interjections e.g., ouch, oops
expletives e.g., damn, that bastered Bloggs
prosody
facial gestures e.g., smiles, frowns</td><td>clearly linguistic
↓
other kinds of codes</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td rowspan="2">broader construal, provides a unitary characterization at the cost of losing the sharp distinction between conceptual meaning and procedural meaning</td></tr>
<tr><td>Stage 4</td><td>Wilson (2011)</td><td>concept-expressing word</td></tr>
</table>

2.3.2　手続き的意味の捉え方

2.3.1 節では、Carston (2016) は、手続き的意味を持つ表現のカテゴリーとその特徴という観点から、手続き意味の史的変遷を 4 つの段階に分けて論じたことを説明した。本節では、視点を変え、手続き的意味そのものの捉え方の特徴に焦点を当てて説明する。Carston (2016) による議論の一部も援用しつつ、大きく 2 種類の手続き的意味に分けて、手続き的意味の研究史を見直し、第 4 章の「なんか」の分析の概念的基礎を説明する。

2.3.2.1　「制約」に基づく手続き的意味の概念

関連性理論では、発話の論理形式から復元されたものは「表意」、純粋に推論によって構築された解釈は「推意」と呼ばれる[9]。表意は、さらに「基礎表意 (basic-level explicature)」と「高次表意 (higher-level explicature)」に分けられる。2.2.1 ですでに述べたように、Blakemore (1987, 2000, 2002) で提案された手続き的意味は、本来推意の構築に制約を課すものだと考えられている。次の (4)-(6) の例を用いて説明する。

(4) a. Tom can open Bill's safe.　b. He knows the combination.

(5) a. Tom can open Bill's safe.　b. *So* he knows the combination.

(6) a. Tom can open Bill's safe.　b. *After all* he knows the combination.

(Blakemore 2000: 476)

[9] 本稿では、「implicature」「explicature」の訳語に「推意」と「表意」を使用している。今井・西山 (2012) のように、「暗意」「明意」と訳す研究もある。

(4)の 2 つの発話の関係については少なくとも 2 つの解釈が考えられる。1 つは、(4b)の発話が表している命題「Bill は番号の組合せを知っている」は (4a)の「Tom は Bill の金庫を開けられる」の結論であるという解釈である。もう 1 つは、逆に、(4b)の「Bill は番号の組合せを知っている」は(4a)の「Tom は Bill の金庫を開けられる」の前提であるという解釈である。いずれも純粋に推論によって構築された推意として得られる。しかし、(5)と(6)に見られるように *so* や *after all* のような談話標識を入れると、(4a)と(4b)の 2 つの発話の関係についての解釈の仮説の範囲が絞られるようになる。すなわち、*so* と *after all* は、それぞれ、"Process 'he knows the combination' as a conclusion"、"Process 'he knows the combination' as a premise" のように聞き手の解釈に制約を課しているため、得られる推意がどちらか 1 つに制限されるようになるのである (内田 2011: 97−98)。

また、上でも述べたように、現在では、手続き的意味は推意と表意の両方の構築に制約を課すことができるという考え方に一般化されている。次の例を見てみよう。

(7) Peter: Will you pay back the money by Tuesday?

Mary: I will pay it back by then.

(8) Mary will pay back the money by Tuesday.

(9) a. Mary is promising to pay back the money by Tuesday.

b. Mary believes she will pay back the money by Tuesday.

(Wilson & Sperber 2004: 623)

(7)における Mary の発話に注目しよう。その発話の代名詞や指示詞は、それが持つ手続き的意味によって、聞き手 Peter の推論が制限され、具体的な指示対象を指し示す名詞で置き換えられ、(8)のような基礎表意 (Mary will pay back the money by Tuesday) が構築される。また、語順やイントネーションなどが持つ手続き的意味が、聞き手の推論を制限し、(9a, b)に見られるように、「約束している」または「信じている」のような発話行為や信念等を反映する高次表意が構築される。

ここまで見たように、推意の構築にも、表意の構築にも、手続き的意味は、「意図された解釈を導き出すために探す必要のある仮説の範囲を狭めて、理解における推論の過程に制約を課す」という役割を持っている (Wilson and Sperber 1993, Carston 2016)。このように聞き手の発話の理解における推論を制約するものと特徴づけられた手続き的意味をここでは「制約に基づく手続き的意味」と呼ぶ。

2.3.2.2 「活性化」に基づく手続き的意味の概念

一方、Wharton (2003, 2009) は手続き的意味を用いた間投詞の分析において、「制約」の代わりに、「活性化」の概念を用いて手続き的意味を特徴づけた。そこで、前節で紹介した制約に基づく手続き的意味と区別して、これを「活性化に基づく手続き的意味」と呼ぶ。この観点で捉えた手続き的意味は推論的理解に限らず、発話解釈のプロセスをより広い視点で考えており、推論的理解以外の認知プロセスも視野に入れている。さらに、推論的理解の際に立てる解釈の仮説の範囲を絞るプロセスではなく、推論的理解を含めたある種の認知プロセスの引き金を引くプロセスとして特徴づけられている。次の節では、まず Wharton の枠組みを説明する。

2.4 「活性化」の概念を用いた Wharton の枠組み

2.4.1 間投詞の手続き的意味

間投詞の分析にはこれまで長く Ameka (1992)、Wierzbicka (1992)、Wilkins (1992) などによる「概念主義的な (conceptualist)」アプローチと Goffman (1981) の「機能主義的な (functionalist)」アプローチの 2 つがあった[10]。たとえば、Wierzbicka は、概念主義者の 1 人であり、Wharton (2009: 78) は、(10)に示されたような Wilkins (1992) による *ow* の分析を紹介して論じた。

(10) *'ow!'*

I suddenly feel a pain (in part of my body) right now that I wouldn't have expected to feel.
I say '[au]!' because I want to show that I am feeling pain right now [and because I know that this is how speakers of English can show (other speakers of English) that they are in pain (in a situation like the situation here)]

Wharton (2009) は、(10)のような概念主義的なアプローチが適切ではないことを示す 6 つの側面を指摘した。まず、①意味の「分解分析 (decompositionalist accounts)」自体に問題があるということである。次に、2 つ目から 6 つ目の側面は間投詞自体の特徴に関わるものである。すなわち、②実際に間投詞によって伝達される内容は不明瞭 (vague) である場合がある、③高度な分脈依存という性質がある、④「部分的に自然 (partly natural) である」という性質があ

[10] Wharton (2003, 2009) は、Goffman のアプローチに明確な名称を与えていないが、本稿では、「機能主義的な」アプローチと呼ぶ。

る、⑤概念的対応表現と同義できないこと、⑥非真理条件的であることの 6 つである[11]。特に、5 つ目と 6 つ目の側面は間投詞が概念をコード化していないことを直接示している。たとえば、Wharton (2009) は次の *Ow* と *Ouch* の例を挙げている。

(11) I feel pain, I feel pain.

(12) *Ow*, I feel pain.

(Wharton 2009: 79)

(13) I feel pain, the anaesthetic isn't working.

(14) *Ouch*, the anaesthetic isn't working.

(Wharton 2009: 80)

(11) (12)の例のように、(11)では概念的な重複が見られるのに対して、(12)には概念的な重複が見られない。また、(13)において、話し手は 2 つの主張を行なっており、*I feel pain* と *The anaesthetic isn't working* 両方が真である時かつその時に限り、(13)が真である。それに対して、(14)において、話し手は 1 つの主張しか行なっていない、*The anaesthetic isn't working* が真である時かつその時に限り、(14)が真である。Wharton によると、これらの特徴は、(10)のような概念的構造の提案が不適切であることを示唆しているのである。

概念主義的な分析と異なり、Goffman (1981) は、言語的内容 (linguistic content) ではなく、社会伝達的役割 (socio-communicative roles) の観点から間投詞を分析した。たとえば、*ouch* の主な機能は、「痛みの閾値に到達している、あるいは到達しそうなことを他人に警告する」ことである(Wharton 2009: 81-82)。また、Wharton (2009: 84) は、Goffman は *ouch* のような「言語的生産性がない (not productive linguistically)」間投詞を「言語周辺的なもの (peripheral to language proper)」と捉えていると述べている。Wharton (2009: 84) は、「間投詞は何を伝達するか」という問題について、Goffman (1981) はほとんどの場合うまく説明していると評価しているのと同時に、「間投詞はどのように伝達するか」という問題について論じていないことを指摘した。

これまでの間投詞の研究を踏まえて、Wharton (2003, 2009) は、間投詞が「同義の真理条件的対応表現を持たない」ことや、「言語的生産性がないため、合成的意味論の規則を受けない」ことに基づいて、概念主義者が行なった「翻訳的な (translational)」説明とは異なった、「非翻訳的 (non-translational)」な、つまり手続き的意味による間投詞の分析を行った。さらに、間投詞の手続き的意味は、聞き手の理解の一部になる高次表意の構築に貢献すると考えられる場合

[11] Wharton (2003: 43-49)も参照されたい。

と考えられない場合があり、後者は「制約」では説明が難しいことを指摘し、「活性化」に基づく手続き的意味の概念を提案した。

まず、間投詞が高次表意の構築に貢献する場合を考えてみよう。たとえば、(15)では、*wow* によって、話し手の命題態度に関する聞き手の推論が制限され、(16)に示したように「(聞き手の) 私がここにいることを喜んでいる」という高次表意が構築されると説明することができる。

(15) Wow! You're here.

(16) The speaker is delighted that I am here.

(Wharton 2009: 86)

しかし、(17) (18)における間投詞は、高次表意に貢献するものとは考え難いと Wharton (2009: 87) は主張する。Wharton によると(17) (18)では、「伝達される態度は命題に対する態度ではなく、対象物に対する態度であり、*wow* はアイスクリームまたはその味に対して、*yuk* は口内洗浄液あるいはその味に向けられている」のである。さらに、(19)では、*yuk* は発話として自立していて、その後になにも発話されていない。そのため、*yuk* は聞き手の推論に制約をかけ、高次表意の構築に貢献すると説明することは難しいのである。

(17) *Wow*! This ice cream is delicious.

(18) *Yuk*! This mouthwash is foul.

(Wharton 2009: 86)

(19) Child: (taking foul-tasting medicine) *Yuk*!

(Wharton 2009: 87)

言い換えると、これまで見た談話標識には、命題が後続されているため、談話標識は、その前後の 2 つの命題の関係について聞き手が行う推論や、ある種の命題態度や発話行為に埋め込まれた高次表意の構築における聞き手の推論を制限する「指示」をコード化していると考えられていた。ところが、それらの典型的な談話標識とは異なり、間投詞は、独立して使用される場合や、一見命題が続くように見えるが、実際には命題ではなく、(対象物に対する)「ある個人の心的状態を示す (潜在的に) 不明瞭な指標」となっている場合などがあるのである (Wharton 2009: 128-129)。Wharton (2009: 129) は、また、これまでの Blakemore の手続き的意味は、言語的表現のみの分析に応用されていたのに対して、間投詞は、「せいぜい言語周辺的な」地位しか持っていないことを指摘している。そのため、Wharton (2009: 64-65) は、代わり

に多様な手続き的表現に適用できるより広い観点から手続き的意味を捉えるべきであると主張し、推論過程への制約や指示としての手続き的意味ではなく、「(たとえば概念的表示や計算あるいは期待の) 活性化のレベルの管理」としての手続き的意味の概念を提案した。この捉え方では、間投詞は態度を表す記述を活性化すると考えられている。たとえば、*wow* は、「喜び、驚き、興奮などを連想させる様々な態度を表す記述を活性化する可能性があり」、また、*yuk* の場合は、活性化されうる態度は「嫌悪感あるいは反感の 1 つである」のである (Wharton 2009: 90)。

Wharton (2009: 65) はまた、間投詞のほか、代名詞や法標識、談話標識などの手続き的意味の説明も「活性化」を用いて一般化できると論じた。Wharton によると、代名詞は「ある一定の範囲の指示対象の候補」を活性化し、法標識は「特定の範囲の命題態度の記述」を活性化し、また、談話標識は特定の「推論の手続き」あるいは「認知効果の期待」を活性化すると考えられるのである。さらに、2.4.3 で紹介するように、この手続き的意味の捉え方は、非言語的表現の分析にも応用できる。

2.4.2 表出表現への拡張

間投詞に対して「活性化」に基づいた手続き的意味が Wharton によって提案されてから、間投詞以外の様々な表現の手続き的意味の記述にも「活性化」という概念が使用され始めた。とくに、間投詞を含めたより広い範囲の感情的側面を表す言語表現—いわゆる表出表現 (expressives) —にまで、応用の範囲が拡張された。すなわち、「一次間投詞」と呼ばれる Wharton が主に分析した間投詞を含め、「二次間投詞」と呼ばれる罵り言葉 (expletives) や、さらに非言語的な韻律 (prosody) 、伝達的な顔の表情 (inherently communicative facial gestures) に至るまで、手続き的意味による分析対象の範囲が拡張した[12]。なお、本節では、言語的表出表現のみを紹介し、次の 2.4.3 において非言語的な研究対象について紹介する。

言語的表出表現の 1 つの例として、*ouch* が従来の研究で多く取り上げられている。Kaplan (1999) は *I feel pain* と *Ouch* は同義ではなく、その区別は、*I feel pain* は記述的意味 (descriptive meaning) を持つのに対して *Ouch* は表出的意味 (expressive meaning) を持つと主張した。Potts (2007) も表出的意味の「記述し難さ (descriptively ineffability)」という性質について論じた。これらの先行研究を受け、Wharton (2016) は Wharton (2003) による間投詞の分析を表出表現に当てはめ、表出表現には 3 つの特徴があることを指摘している。第一に、「非真理条件性 (non-truth-conditionality)」を持ち、「命題に依存しない」こと、第二に、意味を説明する際に母

[12] Ameka (1992) は間投詞を一次間投詞 (primary interjections) と二次間投詞 (secondary interjections) に分類した。

語話者が感じる「記述し難さ (descriptive ineffability)」があること、第三に、「部分的に自然的で部分的にコード化されている (partly natural and partly coded) という「非言語的性質を持ち」、「直接感情を伝達する (convey emotion directly)」ことの 3 つである。このような特徴を持つため、「活性化」に基づいた手続き的意味は表出表現一般に応用できると Wharton は主張したのである[13]。Blakemore (2011, 2015)も、「活性化」の捉え方を取り入れて、「表出表現は話し手の感情的状態 (emotional states) の復元のための手続きを活性化する」と述べた。しかし、正確にこれらの感情的状態を表象に復元する手続きを記述するにはまだ考慮しなければならない点があることも Wharton (2016) は指摘している。

2.4.3 非言語的表現への拡張

2.4.3.1 顔の表情

Wharton (2003, 2009, 2012, 2016) は Hauser (1996) が用いた動物の間の情報伝達に応用された「兆候 (sign)」と「信号 (signal)」という動物行動学的な区別を人間の情報伝達の分析に応用した。Wharton (2016: 26) は Hauser (1996)、Seeley (1989) に言及し、兆候[14]は「手がかりを提供することで情報を持つ」のに対して、信号とみなされる行為は「自然選択によって形成された、情報を伝達する」ものであると述べている。Wharton はさらに、Brandon (2005)が論じた「適応的機能 (adaptaive funcion)」に言及し、信号は伝達的機能を持つと述べている。Wharton は、兆候と信号の違いを「震え (shivering)」と「微笑み (smile)」を使って説明している。震えの機能は「筋肉の急速な動きによって、熱を作り出す」ことである。それが観察者に手がかりを提供し、震えている人が寒いと感じているであろうという解釈が観察者に構築されるかもしれないが、その情報の伝達は震えの機能ではないため、一種の兆候である。一方、微笑みは、「進化の過程の中で選択され、そして洗練されてきた」ものであり(Ekman 1999: 51)、伝達の機能を持っている信号である。

Wharton は、この動物行動学の研究を基にして、人間のコミュニケーションにおける自然的な側面も考慮に入れて、人の前で示された顔の表情は話し手の意味を理解するための機能があり、コード化された信号であると述べた。さらに、Wharton (2016: 27) は、「もしある自然的な行為がコード化された信号であれば、私たちはそれが特化された、おそらく専用の神経組織によって解釈されると予測できる」と述べ、実際にこの予測は証明されていると主張している。

---

13 すべての表出表現は手続き的意味をコード化しているわけではない。たとえば、Blakemore (2015) は中傷する表現(slur)の反例を挙げている。

14 Wharton (2009: 79)では Hauser が挙げている次の例を紹介している。森のサルはチンパンジーを避けるためにチンパンジーの巣の存在を利用するかもしれない。また、特定の種の動物は、ライオンやニシキヘビなどの動物が土壌に残した痕跡と捕食者(危険)との繋がりを学習するかもしない。しかしながら、チンパンジーの巣もライオンやニシキヘビなどが残した痕跡もかれらの存在という情報を伝達する機能を持つわけではないのである。

たとえば、「人間以外の霊長類と人間は、顔を認識するため及び顔の表情を処理するための神経メカニズムを持つ」(Gazzaniga and Smiley 1991)ことを主張した研究や、また、「人間の赤ちゃんは感情を表す基本的な顔の表情を区別できる」(Field et al., 1982; Phillips et al., 1990; Nelson and De Haan 1996)ことを主張した研究が挙げられている。

さらに、Wharton (20009: 123)は、これらの論拠を示した上で、顔の表情は何をコード化しているかという問題を論じている。また、間投詞と同様に、顔の表情に対しても、概念主義的なアプローチがあることを指摘し、Wierzbicka が挙げた分析を紹介している。

(20) raising of the eyebrows

I know something now

I want to know more (about this)

I'm thinking now

間投詞の場合と同様に、Wharton はいくつかの問題点を指摘している。特に、厳格な概念構造は完全に「デジタル (digital)」な性格を持ち、自然的な表情とそれが伝達する情報との「アナログ的な対応関係 (analogicity)」を特徴付けられないと述べている (Wharton 2009: 125)[15]。

この議論を踏まえて、Wharton (2009) は手続き的意味を用いた、顔の表情の分析を提案している。顔の表情の分析を見る前に、まず、例(15)と(16)を振り返ってみよう。(15)に対して、聞き手は(16)に示されたような高次表意を構築することができる。

(15) *Wow*! You're here.

(16) The speaker is delighted that I am here.

Wharton (2009) は、間投詞と類似した、(21) (22)のような顔の表情の例を挙げている。

(21) Jack: (smiling happily, in a pleased tone of voice) John has arrived.

(22) Jack is happy [that John has arrived].

(Wharton 2009:129)

(21)の Jack の発話の聞き手は、Jack の表情 (この例では韻律も伴う) によって、(22)に示され

[15] Sebeok (1972) はコード化のタイプを digital coding と analogue coding に分類している。Wharton (2009: 121)は analogue code (Charles S. Peirce の indices と類似している(Wharton 2009: 121))の概念は自然なコード (natural codes) の分析に有用であることを指摘した。

たような高次表意が「非翻訳的に活性化される (activated non-translationally)」のである。つまり、顔の表情は、間投詞と同様に、(広い意味の)手続き的意味を持ち、聞き手の高次表意の構築に貢献すると考えられる。Wharton (2009: 130) はこの分析の論拠として次の 3 つの特徴を挙げている。すなわち、顔の表情は、「発話の真理条件的内容に貢献しない」、個々の「表情はより大きい句 (larger 'phrases') を合成しない」、また、伝達する内容は「不明瞭であり文脈に依存する」という点で間投詞と類似している。顔の表情は、この点で間投詞と類似しているのである。この手続き的な分析は、表情と伝達する情報との「アナログ的な対応関係」も捉えられている。

2.4.3.2 韻律

次に、手続き的意味を用いた韻律の分析を見てみよう。Wharton (2012: 568)は、「韻律の解釈についての研究は豊富な知見を提供したが、広く認められた語用論の理論に基づく研究はほとんどない」と指摘した上で、関連性理論における韻律要素の位置付けを提案した。Wharton & Wilson (2006)、Wharton (2012) によると、韻律には自然的な側面と言語的な側面があり[16]、自然的な韻律も震えや微笑と同様に、自然的な兆候と自然的な信号に二分することができる。Wharton & Wilson (2006) は次のように述べている。

> 例えば、話し手の心的あるいは身体的状態が発話の韻律的特徴に影響するかもしれない。（この韻律的特徴は）適切な経験や背景的知識を持っている聞き手に、話し手が酔っているか落ち着いているか、気分が悪いか元気か、疲れているかキビキビしているか、躊躇しているか自信を持っているかなどを推論によって解釈することを可能にする。震えと同様に、これらの韻律的特徴は、話し手の心的あるいは身体的状態に関する情報を持っているが、しかしそれはその韻律の機能ではない。つまり、それらはコードの解読 (decoding) ではなく推論によって解釈される自然的な兆候なのである。一方で、感情的な声のトーンは、感情的な顔の表情と同様に、自然的な信号であり、本質的に決められたコードによって解釈されるのである。
>
> (For instance, a speaker's mental or physical state may affect the prosodic properties of her utterance, enabling a hearer with the appropriate experience or background knowledge to infer whether she is drunk or sober, sick or healthy, tired or alert, hesitant or assured. As with shivering, these prosodic properties carry information about the speaker's mental or physical state, but it is not their function to do so: they are natural signs, interpreted by inference rather

[16] 言語的 (非自然的) な韻律の例として Wharton & Wilson (2006: 1561) は 、たとえば、名詞の *permit* と動詞の *permit* に見られる語彙的強勢の違いに言及している。

than decoding. On the other hand, affective tones of voice, like affective facial expressions, may well be natural signals, interpreted by innately determined codes.)

(Wharton & Wilson 2006: 1562, 翻訳は筆者による)

このように、Wharton & Wilson (2006)、Wharton (2009, 2012) は、微笑みや自発的な表情のような自然的信号は手続き的意味をコード化しているという提案をさらに発展させ、適応の範囲を感情的な声のトーンに拡張することができることを主張した。

本研究では、第5章で論じるが、「なんか」の韻律を Wharton (2012) で提案された図1の natural signal (自然的な信号) として位置付け、それが「なんか」が持つ手続き的意味をメタレベルで調節する機能をコード化していることを提案する。

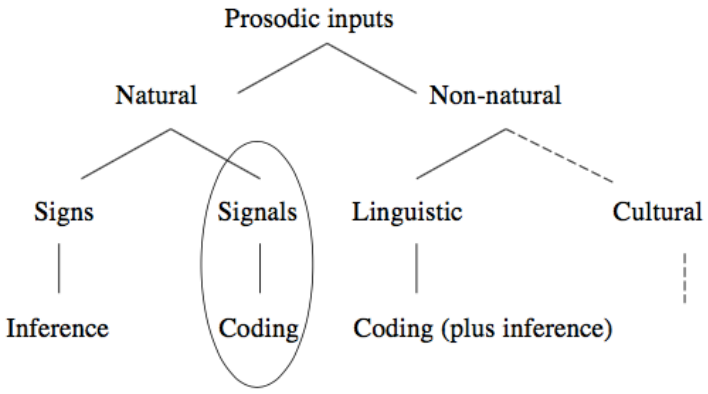

図 1 (Wharton 2012: 574, 囲みは筆者による)

2.5 広範囲モジュール性

前節まで、手続き的意味の捉え方が「制約」から「活性化」に変わることによって、その応用の範囲が拡張されたことを紹介した。なお、ここでは詳しく論じないが、「制約」に基づく手続き的意味のアプローチと「活性化」に基づく手続き的意味のアプローチは相互排他的な関係にはないことを強調しておきたい。

第 5 章において詳細に論じるが、「活性化」の概念は、人間の認知についての「広範囲モジュール性 (massive modularity)」の仮説と組み合わせることによって、より広い範囲の言語的ないし非言語的表現を手続き的意味で分析することを可能にするだけではなく、手続き的意味を持つ表現同士の共起、言語的表現と非言語的表現の重なりなどを説明するメカニズムを明確にすることも可能にする。本節では、まず、この認知の広範囲モジュール性の概念を紹介する。

人間の心をモジュール (module) という概念を使って説明する試みは、Fodor (1983) によっ

て最初に体系的に行われた。Fodor (1983) によると、人間の認知体系（心/脳）は「入力体系 (input system)」と「中心的体系 (central system)」に分けられている、入力体系はモジュール的であり、「領域固有性 (domain specificity)」「義務的操作性 (mandatory operation)」「操作過程の迅速性 (fast processing)」「情報遮蔽性 (informational encapsulation)」をはじめとした性質を持っているが、中心的体系は総合的な働きを行い、モジュール性を持たない。その後、Cosmides and Tooby (1992, 2000) や Sperber (1994) などは Fodor が主張した「領域一般な中央処理 (domain-general central processing)」に反対し、心/脳のはすべては「スイス・アーミーナイフ」のようにモジュール性を持つという「広範囲モジュール性」の仮説を提案、発展させた[17]。

Wilson (2011, 2012, 2016) は、この広範囲モジュール性の仮説と呼ばれる、人間の心/脳は特定の役割や機能に特化したモジュールからできているという進化心理学の仮説を取り入れて、手続き的意味を持つ表現がモジュールを活性化することを主張し、活性化に基づく手続き的意味の概念をさらに発展させた[18]。その際、これまで考えられてきた「推論的理解 (inferential comprehension)」(Sperber & Wilson 2002) だけを活性化するのではなく、「読心 (mindreading)」(Baron-Cohen 1995)や、「感情の読み取り (emotion reading)」(Wharton 2003, 2009)、「社会的認知 (social cognition)」(Malle 2004; Fiske & Taylor 2008)、「構文解析及び発話産出 (parsing and speech production)」(Levelt 1993)などに関わる様々なモジュール或いはその下位モジュールを活性化する可能性を考えることが重要であると主張した。例えば、間投詞 (*wow, yuk*) や感情を表すイントネーションなどは、感情を読むモジュールを活性化する手続き的意味を持つと考えられている。

また、Blakemore (1897) を始めとした先行研究で分析された多くの談話標識は、モジュールの活性化の観点から見直すと、推論的理解のモジュールを活性化するものであったと考えられる[19]。推論的理解のモジュールのなかには、さらに命題の関係についてどのように処理すべきかを指示する具体的な手続きがあり、それぞれの談話標識によって、対応している手続きが活性化されると考えられる。

たとえば、Unger (2012: 47-48) は、談話標識 *so* について、活性化を用いて下のように説明している。

---

17 広範囲モジュール性の仮説は、人間の心/脳の柔軟性(flexibility)と矛盾しているという批判もされている。この批判及びそれに対する反論は、たとえば、Barrett, Dunbar, &Lycett (2002) *Human Evolutionary Psychology* (chapter 10)や、Sperber (1994, 2005)を参照されたい。

18 厳密に言うと、Wilson (2011)は手続き的表現はモジュールが持つ領域固有の手続き(domain-specific procedures)を活性化すると提案している。また、Unger (2012)は、手続き的表現は複数の発見的手続き(heuristic procedures)の中の特定の手続きの活性化レベルを高めることの引き金になると述べている。一方、Sperber(2005)は、モジュールが独自の手続きやデータベースを持つ可能性があり、さらに学習によって、データベースの拡大や下位モジュールが加わる可能性も考えられることを示唆している。本研究では、モジュールの内部構造については今後の課題とし、手続き的表現はモジュールそのものを活性化すると仮定する。

19 Blakmore(2015)もこの観点を受け入れている。

(23) a. Jane's students play the violin very well.

b. She's an excellent teacher.

Procedure A: Assume U (=23b, WY) is a premise. Find out other assumptions, see whether they can be used as premises, and compute conclusions.

Procedure B: Assume U (=23b, WY) is a conclusion. Find other assumptions that can be used as premises in an argument supporting U as a conclusion.

(Unger 2012: 47-48)[20]

(23a,b)の発話を解釈する聞き手は、(23b)は、(23a)を含んだ前提から得た結論なのか、それとも(23a)を説明するための前提なのかを計算する必要がある。聞き手が(23b)を処理する際には、上述の手続き A、つまり「(23b)を前提であると仮定し、他の想定を探して、それらの想定も前提であるかどうかを考える」と手続き B、つまり「(23b)を結論であると仮定し、(23b)は結論であることを支持する、他の前提になりうる想定を探す」が潜在的に候補とされる。そして、「これらの手続きの中の 1 つから生じた認知効果が聞き手の関連性の期待を満たした時点で処理が止まる」のである。Unger によると、各手続きがそれ自体の活性化のレベルを持っており、*so* のような談話標識が出現すれば、それが手続き B の活性化レベルを「昇格」し、手続き A の活性化レベルを「降格」させる標識になる。言い換えると、*so* という談話標識は、2 つの命題（あるいは想定）の間の関係の処理に担当する推論的モジュールを活性化させ、その中で待機している複数の具体的な手続きの卓越性の入れ代わりを引き起こす。この例においては、Procedure A が最も高度に活性化されていると考えられる。このように見ると、この例における、Blakemore 当初が提案した手続き的意味に類似した Procedure A と Procedure B は、推論的理解のモジュールの活性化の具体的な現れと解釈できる。これは、モジュールの活性化の観点から考えると、Blakemore (1987) に代表される制約に基づく手続き的意味は、その対象とする適用範囲が推論的理解モジュールに限られていたことを示唆している[21]。

2.6 まとめ

本章では、関連性理論の枠組み及びこの枠組みの中で提案され、発展した「手続き的意味」の概念を紹介した。「手続き的意味」の捉え方や応用される対象の範囲が変化しつつあるとい

[20] Unger (2012) では、「Procedure A」「Procedure B」を例文の説明をする本文の中で挙げているが、ここでは説明を簡単にするため、例文と一緒に引用している。

[21] Wharton (2016) は Sperber (personal communication)に言及し、Blakemore が当初提案した手続き的意味は、「本当はメタ手続きである可能性があり、たまたま先に発見されただけかもしれない」と述べている。

う理論的背景について、本章では、Carston (2016) の説明を紹介した後で、その概説とは少し異なる観点から、「手続き的意味」の 2 つの特徴付け（「制約」か「活性化」か）に基づいて、手続き的意味の研究を大きく 2 つのアプローチに分けて説明した。さらに、本研究が採用する「活性化」のアプローチを提案した Wharton の枠組みを紹介し、間投詞だけではなく、談話標識、表出表現、ないし非言語的表現の分析への手続き的意味の応用を概観した。その後、広範囲モジュール性の仮説を紹介し、これまでの談話標識が主に「推論的理解モジュール」を活性化する手続き的意味を持つものであったことを説明した。第 5 章において詳しく述べるが、推論的理解のモジュールのほか、本研究の分析対象である「なんか」と「怎么说」は Sperber et al. (2010) 他によって提案された「認識的警戒モジュール (epistemic vigilance module)」に関わっていることを提案する。さらに「共感のモジュール」を活性化する談話標識の分析を提案する。さらに、これらの 3 つのモジュールの活性化には優先順位があることを主張する。その上で、日本語の「なんか」の事例研究から、「活性化」に基づく手続き的意味の概念は「制約」に基づく手続き的意味より経験的に優れていることを示す。最後に、「活性化」に基づく手続き的意味を用いた中国語の「怎么说」の分析を試みる。

第 3 章 「なんか」の先行研究

3.1 はじめに

本章では、これまでの「なんか」の先行研究を概観する。

本研究が注目するのは「談話標識」としての「なんか」であり、聞き手はどのようなメカニズムで「なんか」及び「なんか」を含む発話を解釈するのかという問題意識を持ち、関連性理論の枠組みで「なんか」の手続き的意味の分析を提案する。しかしながら、問題意識も理論的枠組みも異なる先行研究では、「なんか」は、多様な解釈ができ、談話にもたらす効果も多様であることが示されている。そこで、これまで、談話標識の「なんか」が持つ多様な機能や談話に与える多様な効果がどのように明らかにされてきたかを確認する。それと同時に、先行研究の問題点を指摘する。

本章の構成は次の通りである。まず、3.2 節では、談話標識の「なんか」の多様な機能について紹介する。次に、3.3 節では、これらの機能に関わる「なんか」の意味変化や、文法レベルの研究を紹介する。次に、3.4 節では、認知的な観点からの説明を紹介する。最後に 3.5 節では、先行研究の問題点を指摘する。なお、本章は、楊 (2017a) の一部に基づいて、加筆・修正させたものである。

3.2「なんか」の多様な機能

「なんか」は、日常会話における使用が多様で、その機能も多岐にわたることが広く認められている。先行研究では、この側面に焦点を当てて、分類や談話分析・会話分析の手法を使用することによって、実際のコミュニケーションにおける「なんか」の豊富な用法と機能を観察し、記述した。

まず、鈴木 (2000) は、自然会話に現れた「なんか」の機能を、「意味論的機能」、「語用論的機能」、「談話調節的機能」の 3 つに分類した。その中で、語用論的機能と談話調節的機能は本研究で談話標識としての「なんか」と呼ぶものの機能に対応すると考えられる。鈴木 (2000: 66) は、語用論的機能を「発話者の意図、発話者と発話内容の関わり方など、言語外の要素を反映し、メタメッセージを伝える語の働き」と定義し、談話調節機能を「コミュニケーションを円滑に進めるための語の働き」と定義している。後者については、「言いたいことが頭に浮かんでいるにもかかわらず適切な言葉がすぐに出てこない時などにみられる、つなぎの言葉としての機能である」とも述べている。

鈴木 (2000) は「語用論的機能」と「談話調節機能」という大きな分類を行なっているが、この分類の下位類として位置付けられるような、より具体的な「なんか」の機能も他の研究で

指摘されている。鈴木 (2000) が論じている「語用論的機能」に対応すると考えられる機能として、たとえば、「婉曲」や「責任回避」などの機能が先行研究では多く言及されており、また、鈴木 (2000) の「談話調節機能」に関連すると考えられるものは、「フィラー」や「つなぎ言葉」という範疇に加えて (川上 1992、山根 2002)、会話に見られる「発話権の仮取得」や「話題の変更」などの機能・効果が挙げられる (鈴木 2000、内田 2001、平本 2011、森 2012)。以下ではこれらの機能について簡単に説明する。

3.2.1 婉曲

「なんか」の語用論的機能の 1 つとして、「婉曲」や「和らげ」、「聞き手配慮」などの記述が先行研究では多く言及されている。本節では、この一連の機能・効果をまとめて「婉曲」と呼ぶことにする。鈴木 (2000: 70)[22]は、語用論的機能を持つ「なんか」と「っていう感じ」や「みたいな」などの「婉曲表現」との呼応・共起を観察した他、「なんか」自体が「婉曲」機能を持つこともできると述べている。川上 (1992) は、次の例を示して、「なんか」は「婉曲」の表現効果があると述べている[23]。

(1) (徹)「なんか、そういう、なんか病人の排泄したものを片付けるようなお仕事だったんですって？」『徹』

(川上 1992: 78, 下線は川上による)

川上 (1992)によると、聞き手の気分を害する可能性のある場合、「なんか」を使用することで、「直接的な言い回しを避ける」ことができ、婉曲の効果があるのである。また、鈴木 (2000) が観察した「相手と食い違う意見」や「否定的な内容の意見」を暗示する「なんか」も川上 (1992) のこの分析と一致している。

3.2.2 責任回避

「なんか」は、引用する場合や、伝聞表現や過去表現と共起する場合、「責任回避」の機能を持つと考えられる。鈴木 (2000) が分析した例を見てみよう。

(2) 話題：C と同じ学部に所属する D の友人

---

22 語用論的機能を働く「なんか」として、「伝聞表現」や「婉曲表現」や「過去表現」との呼応・共起や、「相手と食い違う意見」や「否定的な内容の意見」を暗示する「なんか」が観察された。

23 川上 (1992) は具体的な談話資料を通して「なんか」の使用には「婉曲」「責任回避」「注意喚起」「雰囲気共有」「間つなぎ」などの表現効果があると述べている。川上 (1992) によると、例(1)の出典は『徹子の部屋』(1991 年 10 月 2 日、朝日放送)である。「(徹)」は黒柳徹子を意味する。

→291D: とかなんか、僕の友達のね、

292C: そう、 うん

→293D: 人科の人とか話聞いてると、

→294 : なんか最近、学校とかもなんか、

→295 : ほとんど行ってないらしんだけど、

→296 : 出なくていい、なんか授業が少ないって聞いたんだけど、

→297 : なんか週、なんかもう、今もう週休 4 日だとかいうようなやつ。

→298C: {笑:ははははは}

(鈴木 2000: 68-69, 下線は鈴木による)

この例では、下線部に示されたように、「なんか」は伝聞表現と呼応している。鈴木 (2000) によれば、これらの「なんか」によって、「話し手 D がその発話内容に対してやや離れた立場を取っていること、すなわち、発話内容に対する話し手のあいまいさ、自信のなさ、責任転嫁などがメタメッセージとして相手に伝えられる」と考えられるのである。

過去表現と共起する場合も、同様に、「今語っている内容は過去に体験した出来事であり、実際とは異なってしまっている可能性がるというメタメッセージ」(鈴木 2000) が伝達され、責任回避の機能を持つと考えられる。

杉崎 (2018)[24]は、明確に「責任回避」について論じていないが、責任回避と類似した機能を持つ、「話し手が耳にした第三者の発話」「発話内容の不確かさに対する躊躇の表現」のデータを示している。

3.2.3 発話権に関わる機能

次に鈴木 (2000) が、「なんか」の談話調節機能と呼ぶ機能を見てみよう。これは、「発話権を確保したり維持したりする機能」、すなわち「つなぎの言葉 (filler) としての機能」であると特徴づけられている。ここでは、例として「発話権の維持」を取り上げ説明する。(3)の例を見てみよう。

(3) 話題：N の研究テーマ

[24] 杉崎 (2018) は会話コーパスのデータを使用し、自己開示場面における「なんか」の使用に焦点を当てている。杉崎(2018)によると、「なんか」は、話し手が「新情報」を示す際に使用され、①「話し手の心内発話」、②「話し手が耳にした第三者の発話」、③「体験した事柄の働きや様子を表すオノマトペ」、④「発話内容の不確かさに対する躊躇の表現」といった 4 種類の表現と共起しながら、「即興的な場面」において「語りを先導しつつ」、話し手の「躊躇」や「不確かさ」などの「話し手の認識を示す」という働きを担うと述べられている。

556N: で、研究テーマってね、ジャズの方やから、

557T: はー

558N: もう延長みたいなものになっちゃてるからな。

559T: えー、すごい、

560: ジャズなのか、な、何やるの？

561N: そう

→562: なんか、うーん、ジャズの、そ、何やろな、日本の、ジャズ？

563T: うん

→564N: うん、んで、なんかちょっと、昔の、昭和初期ぐらいのこと？

565T: うん

(鈴木 2000: 75-76, 下線は鈴木による)

この例では、「なんか」によって話し手は「発話権を維持し、より適切な言葉を探す余裕を作り出している」と考えられる。

また、会話の発話のターンの交替における、「発話権の仮取得」の機能も論じられている。平本 (2011) は、典型的な会話分析の手法を用いて分析を行った。発話ターン開始部の「なんか」に焦点を当て、「なんか」を伴う発話と他者の発話が同時に開始する際に、「なんか」で始まるターンが「継続」していたか「脱落」していたかを観察した。「話題の境界後の重複」や「確認要求の後の重複」などの環境において、「特定の次話者が選択されていない」状況に、「なんか」以外のターン開始要素を持つターンと比べ、「なんか」により開始されたターンは脱落しやすい傾向にあることが確認されている。特に、話題の境界後に生じる「脱落」のケースが最も多いことも示されている (平本 2011: 204)。(4)は、「話題の境界後の重複」の 1 例である。

(4)【友達に受けた料理】

1 C: うん[:.h h h [h 焼きナスと同じような原理=

2 B: [ああ::[:

3 A: [°うん°

4 C: =°だもん°[°それね°

5 A: [そんな感じですね=

6 C: =[°うん

7 B: [へい::: (.)おいしそう

8　　(.)

9　A:　°めっちゃうまい°(.)うん

10　　(0.7)

11　B: →[なんか

12　A:　　[それ友達めっちゃ受けてん

13　B:　ほ::

14　　(.)

15　A: そう(0.2)夜に(0.2)出したやつが

(平本 2011: 203)

9 行目は、「話題が終了し得る位置」であり、0.7 秒の沈黙後、B による「なんか」と A の発話が同時に始まり、B の発話が脱落したことが観察されている[25]。 平本(2011)はこれらの観察を、Sacks (1992)、Jefferson (1983) に従って、「話者性」の「強度」(「重複への耐性」)という観点から分析を行なった。平本によると、「なんか」は「弱い」話者性を提示し、「会話中の間を最小化しつつも、その発話が重複した場合には、『なんか』を利用したものが脱落することにより重複も最小化することができる」のである。すなわち、「なんか」を含む発話の話し手は、発話権を持っているが、発話が重複した場合に発話権を譲るのである。この意味で、「発話権の仮取得」の機能とも呼ばれており、会話における「最小限の間と最小限の重複」の達成に貢献していると考えられる。

3.2.4 話題に関わる機能

森 (2012) は特に発話の「重複」に焦点を当てていないが、「なんか」の話題の完結し得る場所や沈黙の後の使用は、上で挙げられた平本 (2011) のデータと共通している。たとえば、(5)では、「なんか」はトピックが完結可能である場所に出現している。森 (2012) によれば、「なんか」はトピックの推移をマークしているのである。

(5)

1　A: あ 正倉院まだ貼ってる.((正倉院のチラシを見ている))

[25] 平本 (2011) から引用された(4)の例に用いられている記号とその意味は次の通りである。「°文字°」は「弱い音調で発されている発話」、「(数字)」は「コンマ 1 秒単位での沈黙の長さ」、「(.)」は「短い沈黙」、「[ ]」は「重複の始まりと終わり」、「:」は「直前の音の引き延ばし(個数により相対的長さを表す)」、「> <」は「加速」、「< >」は「減速」を意味する。後述の森川 (2012) の(5)の例も同じである。

2　B: 貼ってる も[う終わってるし] ((正倉院のチラシを見ている))

3　A:　　[もう終わった]よ. ((正倉院のチラシを見ている))

4　B: >もう 12 月だしね<

5　A: ね::<° 早いな:° >

6　B: ° うん°

7→ A: ((B に向き直って))>なんかさ:ホテルのバイトさ:

8　B: [うん]

9　A: =[じゅう]に月になったら暇になるとか言ってんのに=

10　B: [うん]

11　A: =[まだ]暇じゃないんだって. <

12　B:　あ　そうなの？

13　A:　((うなずく))

14　B:　(1.5)

(森 2012: 32-33)

森 (2012) によって新しい話題や新しい連鎖を開始する機能が指摘されているほか、話題に関わる類似した機能は他の研究でも挙げられている。たとえば、内田 (2001)では、「話題開始」、「話題の発展」、「発話内容の具体化」の機能として指摘されている[26]。

3.3「意味論的機能」からの由来

前節で見たように、コミュニケーションの中における多様な「なんか」の使用が示しているように、多様な機能があることは明らかであるが、一方で、これらの機能は何に由来するのかという問題が生じる。この問題について、「なんか」の本来の意味と結びつけて説明を行った研究がある。3.2 節で紹介したように、鈴木 (2000)の分類には、「意味論的機能」が含まれており、鈴木 (2000: 66)はそれを「発話の命題内容に直接にかかわる、語の言語内での働き」と定義し、(6)に示されたような「疑問詞・代名詞」としての「なんか」と(7)に示されたような「助詞」としての「なんか」を挙げている。

(6) 話題：人間科学部の建物の汚さ

368U : 阪大病院に入院してた人が、なんか、

26　内田 (2001) では、前置き表現の「なんか」の機能として「引用」「話題対象への評価」「話題開始」「話題の発展」「発話内容の具体化」「次の部分へのつなぎ」の 6 つをあげている。

→369　: うちの学部の人の、高校の同級生かなんかで、

370　: でお見舞いに行ったら、人科の方見て、

→371　: あの建物って、こー精神病棟の隔離棟かなんか?って言われて、

372X :　　{笑:あははっははは}

(7) 話題：卒業論文のテーマ

→079J : 私なんかまだ卒論のテーマも決まってない{笑い}んですけど、

080U : あーそうーなんだー

081J :そう、でも院試の一書類とか全部卒論のテーマとか

082　: 書かないといけないんですよね。{笑い}

(鈴木 2000: 67, 下線は鈴木による)

鈴木 (2000) があげた「疑問詞・代名詞」と「助詞」としての「なんか」を、内田 (2001) は、それぞれ「代名詞」と「副助詞」と呼び、「なんか」の意味変化を考察した。内田 (2001) は、Chafe (1987) による「concept」の概念や Halliday (1994) による「information unit」の概念に言及し、「『なんか』＋new concept」という構造は、「(1)何かその後ろに新しく言いたいことがある」という側面と「(2)話題になっている事柄のうち、それまでの話の流れからは予測できない事柄を際立たせる」という側面の 2 つの側面を示していることを指摘した。その上で、Traugott (1982) に言及し、内田 (2001: 7)は、1 つ目の側面に関わる前置き表現の「なんか」は、「不明確な事柄を後ろに従える」ため、代名詞の「なんか」と「メタファー的関係」を持ち、2 つ目の側面に関わる前置き表現の「なんか」は、「部分」を「取り立て」るため、副助詞の「なんか」と「メトニミー関係」を持つと分析した。さらに、このように、談話標識の「なんか」は、「代名詞からのメタファーと副助詞からのメトニミーを経て、直後の発話全体を不明確なものとして際立たせたり、直後の不明確な部分に対する自らの態度や判断などを暗に示す表現に文法化」されたものだと内田は主張した。

また、「不定表現」の「なにか」についての研究も談話標識の「なんか」の研究と関連しているように思われる。

森川 (1991) は、「なにか」の研究を国語学・日本語学における不定表現の研究の中に位置付けて分析した[27]。森川 (1991) は、不定表現「なにか」の不定対象には、「もの」と「こと」

[27] 森川 (1991: 145) は不定表現を次のように定義した。不定表現とは、「ある時点において、話し手にとって、不明・未知であるか、またはそれ自身が不定・未定の状態で存在しているように見える対象を、そのような在り方のままに叙述する言語表現」である。尾上 (1983) による「不定語」の研究に言及しながら、「なに」「だれ」「どう」などのような数学の未知数 x に通じる不定語に疑問助詞「か」が組み合わさった「x−か」という形式は、「話し手の認識内の対象に対する「疑い」の気持ちを端的に表す

という系列と、「認知レベル (同定)」と「言語表現レベル (確定)」という系列の 2 つに分けられると述べている。まず、「なんか」の不定対象は、文の項を担うか、述語句全体に関わるかによって、「もの」に関わる場合と、「こと」に関わる場合とに分けられる。次に、話し手は言語表現化する過程において、「対象を充分認知できない・1 つに同定できない」のか、それとも「対象に対応することばが分からない」のかによって、(話し手の) 認知レベルの不定と、(話し手の) 言語表現化レベルの不定に分けられると述べている。

森川 (1991) を踏まえて、川上 (1991) は、「なんか」の不定対象についての分析をより精緻化した。川上 (1991: 109) は、こと (事態) の認知と言語表現において不定があるという可能性の他に、話し手がその事態をどのように意味づけ、受け入れるかという、話し手と事態との「関係付けレベル」に不定があるという可能性があることを指摘した。この考察に基づいて、川上は、森川の「認知レベル」と「言語表現レベル」という 2 つ目の系列に新たに「関係付けレベル」での不定という類を加えた。川上の分類では、このように、「なんか」の不定対象は、次のようにⅠ「もの」やⅡ「こと」という系列に加えて、A「認知レベル」、B「言語表現化レベル」、C「関係付けレベル」という 3 つのレベルの系列とも関わると考えられている。

Ⅰ [A]「もの」が充分把握できない。

Ⅰ [B] 把握した「もの」に対応する適切な言語表現化ができない。

Ⅱ [A]「こと」(事態) が充分把握できない。

Ⅱ [B] 把握した「こと」(事態) に対応する適切な言語表現化ができない。

Ⅱ [C] イ 事態の背後にある意味・理由・意図などが分からない。

ロ 言語表現化はしたものの、事態の存在が受け入れ難い。

(川上 1991: 119)

川上は、上記の 5 つの類に対応する不定の例として(8) - (12)を示している。

(8) だれかが<u>何かおいしいもの</u>を持ってきてくれました。

(9) 心の中を<u>何かしきりと突くもの</u>があった。

(10) ジョバンニは、<u>なにか</u>たいへんさびしい<u>ような</u>かなしい<u>ような気がして</u>、

(11) 「ちがうよ。<u>なんか</u>今日は寝つかれなくてさ。〜」

(12) <u>何か</u>指先が白い[28]。

形式であると考えられ」、また、この形式には、「不明・未知のものに対する特定・明確化志向がある」と述べた。

[28] なお、各レベルの不定を示す例は絶対的なものではない。たとえば、(12)は、川上 (1991: 108) による

(川上 1991: 103, 108, 下線は川上による)

この不定表現の「なんか」と関係づけて、上で紹介した「なんか」の機能の一部は、「認知」「言語表現」「関係付け」という 3 つのレベルの不定に由来していると考えられる。たとえば、「次に言うことは、私はよくわからないのですが」という認知レベルの不定や、「どういうわけなのか」という関係づけレベルの不定を示すことで、「自分の責任をさらりとかわす」ことができ、「婉曲」や「責任回避」の機能・効果が生じられる (川上 1992:78-79)。また、「言語表現レベルの不定」により、「注意喚起」「雰囲気の共有」という効果が生じられる。「次の言葉が出てこない」場合や、「話の内容をどのように構成していいか分からない」場合に、「やや詠嘆的に長いポーズをとることにより、聞き手にこれから始まる発話内容を予想させることになる」のである。また、「一言では言いにくい思惑や感情の揺れ」についての吟味を示しながら、「聞き手をそれとなく会話に引きずり込んでいく」という「雰囲気の共有」を演出できる。

川上 (1991) によって精緻化された「なんか」が不定の対象とするレベルは、人間の言語表現化の過程における異なる心的状態の存在を示唆しており、後述のように、本研究の手続き的意味を用いた分析の基礎となる観察を提供している。

3.4 認知的観点からの研究

上で紹介したような、「なんか」の本来の意味と結びつけながら、「なんか」の談話機能を説明する研究がある一方で、認知的な観点から「現代人の言語心理を浮き彫りにする」研究もある。

田窪・金水 (1997) は、談話管理モデルの観点から、言語表現を、「情報データ自体に関わるもの」と、「話し手の心的操作に関わるもの」に大きく分けている。さらに、「あれ」、「へえ」、「うんと」、「ほら」、「なんか」などといった「感動詞・応答詞」は後者に当てはまると主張し、これらを「心的操作標識」と呼んでいる。また、田窪・金水はこれらの心的操作標識を「入出力制御系」と「言い淀み系」に分けている。「なんか」は言い淀み系に分類され、「具体的な指示機能を失って」、「大体こんな感じ」といった心的状態に対応する形式であると述べている。

大工原 (2010) は、定延 (2002) に従い、「認知者と環境とのインタラクション」が言語表現にもたらす影響を考慮し、「能動的な認知観」に基づき、図 1 に示されたように話し手の「認知過程」のモデルを提案した。

と「血色の悪さ」を適切に表す表現が見つからず、とりあえず「白い」と言語化した場合は、Ⅱ[B]に対応する。しかし、たとえば、「白い」ということが「何を意味しているのか分からない」という「意味付けの不定」や、「どう考えても白いはずがない」というような「受理の不定」などは、それぞれⅡ[C]のイ、ロに対応する。

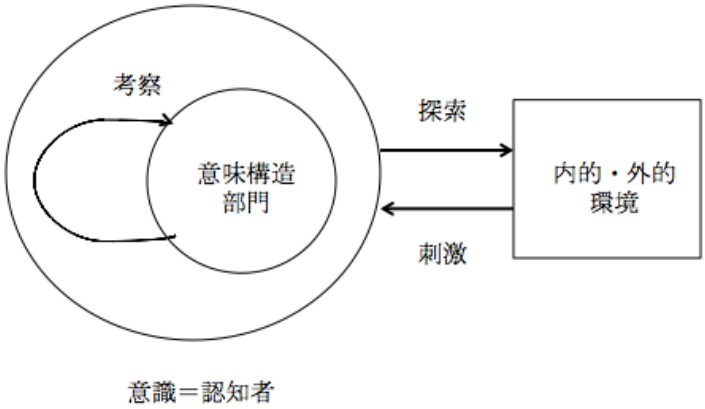

図 1

(大工原 2010: 112)

その上で、「なんか」は話し手が「今語られる命題情報は、探索によって得られたものだ」ということを表すエビデンシャルであると提案した[29]。すなわち、図(1)に示されたように、話し手は「環境から受動的・一方的に情報を受け取るのではなく、環境とのインタラクション(働きかけ合い)の中で能動的に情報を作り出す」という「探索」の過程が不可欠であると主張した。

3.5 先行研究の問題点

「なんか」の先行研究は、日常会話の中で頻繁に使用される談話標識の「なんか」の多様な機能を細かく観察し記述した。その上で、その観察が「なんか」の本来の文法上の性質や、意味変化や、話し手 (認知者) の認知過程と関わっていることを示唆している。しかし先行研究には、次のような 2 つの理論的な問題がある。

まず、第 1 に、先行研究の観察の多くは現象の記述に留まっており、現象の背後に潜むメカニズムについての説明が不十分である。たとえば、川上 (1992) は、談話資料にある「なんか」の使用例をあげて、それぞれどのレベルの不定が示されるかについて、直感的な判断に基づく分析しか示されていない。その直感的な判断の背後にある一般的な原理が不明確であるという問題点がある。

第 2 に、第 1 の問題とも関係するが、先行研究は基本的に話し手の立場を取り、話し手の観点から「なんか」が持つ様々な機能が観察され、分析されている。しかし、コミュニケーショ

[29] 大工原 (2010: 111) は、「エビデンシャルとは、『話し手がいかにして命題情報を得たか』を特定する言語形式であり、現代日本語 (共通語)では、『～そうだ』『～らしい』などの文末表現がその典型である」と述べている。

ンでは、聞き手の解釈も重要な部分を構成している。先行研究では、「なんか」の使用がどのようなメカニズムで聞き手の解釈に影響を与えているのかが十分に分析されていない。

そこで、本論文では、関連性理論の枠組みで、Blakemore (1987) によって提案され、Wharton (2003, 2009) などによって発展されつつある手続き的意味の概念を用いて、聞き手の発話解釈のメカニズムの一部を分析し、明らかにすることによって先行研究で観察された「なんか」の使用と機能の特徴を統一に説明することを試みる。さらに、この過程で、先行研究の経験的問題についても明らかにする。

第 4 章　手続き的意味による談話標識「なんか」の分析—制約の観点から

本章では、楊 (2017a) で提案した「制約」という概念に基づく手続き的意味による談話標識「なんか」の分析を検討し、「なんか」にはこの分析では説明できない特徴があることを示す。分析する前に、まず、4.1 節では、「なんか」が談話標識と考えられる性質を持つことを確認する。次に、4.2 節では、楊 (2017a) に沿って、「制約」に基づく手続き的意味を用いた「なんか」の分析を説明する。4.3 節では、「なんか」と類似した性質を持つ「どうも」の分析も概観し、「なんか」と「どうも」の違いを手続き的意味を用いて説明する。最後に、4.4 節では、「制約」に基づいた手続き的意味の限界を示す。なお、本章は、楊 (2015)、楊 (2017a) を加筆・修正させたものである。

4.1　談話話標識「なんか」の性質

4.1.1 非真理条件性

第 1 章で紹介したように、談話標識と考えられる表現の 1 つの特徴として、その表現は発話が表す命題の内容に貢献せず、非真理条件的である、という点が挙げられる (Schourup 1999)。関連性理論の枠組みでは、表現の真理条件性の確認において、対象表現を含む文を条件節に埋め込み、この表現が条件節に収まるかどうかを見るテストが使用されている。たとえば、*but* の真理条件性をテストするため、Ifantidou (1993) は次のように分析している。

(1) Mary is here but Sue isn't.

(2) If Mary is here but Sue isn't, we can't vote.

(Ifantidou 1993: 74)

Ifantidou (1993) によれば、条件節に埋め込まれた(2)に対して、考えるべき問題は、私たちが投票できないのは、a「Mary がいる」、b「Sue がいない」の 2 つのことが真であるためなのか、それとも a「Mary がいる」、b「Sue がいない」、c「Mary がいることと Sue がいないことが対照になっている」の 3 つが真であるためなのかということである。明らかに、私たちは投票ができないのは「Mary がいる」と「Sue がいない」のためであり、両者が対照になっていることのためではない。つまり、*but* は条件節に収まらず、非真理条件的であることになる。

このテストは日本語にも応用されている。たとえば、武内 (2015: 79) は、(3)における「しょせん」の真理条件性を調べている。武内 (2015: 80) は、(3)が条件節に埋め込まれている(4)に対して、「一生懸命練習しても無駄であるのは、『大会に出場できない』からなのか、『しょ

せん大会に出場できない』からなのか」という問いを検討し、「答えは(5b)ではなく＜しょせん＞を除いた(5a)である」と述べている[30]。したがって、「しょせん」は条件節の外にあり、すなわち、命題内容の構築に関わらず、非真理条件的であることになる。

(3) しょせん、僕たちは大会に出場できないんだ。
(4) もし、しょせん、僕たちは大会に出場できないのなら、一生懸命練習しても無駄だ。
(5) a. 僕たちは大会に出場できない。
b. しょせん、僕たちは大会に出場できない。

(武内 2015: 79-80)

以下では、同じ条件テストを使用し、「なんか」が発話の真理条件に関与するかどうかを調べてみる。

(6) なんか、その店いつも混んでるね。
(7) もし、なんか、その店いつも混んでるなら、別の店にしよう。
(8) a. その店いつも混んでる。
b. なんか、その店いつも混んでる。

「なんか」が条件節に埋め込まれた(7)において、別の店にしようとする理由は、(8a)「その店はいつも混んでいる」ためなのか、それとも(8b)「なんか、その店はいつも混んでいる」ためなのか、という問いに対して、明らかに答えは (8a)である。したがって、「なんか」は条件節に収まらず、命題内容の構築に関わらず、真理条件的ではないことを示している。本研究が分析の対象とする談話標識の「なんか」は、まず、上に示したような、条件テストを通っており、非真理条件性を持つ「なんか」である。

4.1.2 非概念性

第 2 章で述べたように、「真理条件的」と「非真理条件的」の区別は、「概念的」と「手続き的」の区別とは一致せず、すなわち、非真理条件的な表現であっても概念を持つ可能性がある。そのため、関連性理論の枠組みではある表現について、手続き的意味による分析を行う際に、その表現が非概念的であることを検証する必要がある。Wilson & Sperber (1993) をはじめ、これまでの研究は直感やテストなどを併用しながら、ある表現がコード化しているものが概念的

[30] 直接引用の中の例文の番号は本稿に合わせて修正している。

なのか手続き的なのかを判断する方法を提案してきた。Iten (2000: 138-142) のまとめによると、大きく次の 3 つの側面から判断することができる。すなわち、「意識へのよび出し可能性 (cognition)」「真理判断可能性 (truth-evaluability)」「合成性 (compositionality)」の 3 つである[31]。

1 つ目は、概念的意味と手続き的意味は、意識へのよび出し可能性において違いがあることである。Iten (2000: 138) によると、英語の母語話者に *tree*、 *freedom*、*because* などの語の意味を聞くと、「どこまで納得がいくかどうかは別にしても、すぐに言い換えた語で返答されるはずである」。それに対して、手続き的表現は「推論的段階に課される非表示的な制約であるので、そもそもよび出し可能だとしても、われわれの意識に容易によび出し可能であると想定する理由がない」のである。そこで、英語の母語話者に *but*、*so*、*although* の語の意味を尋ねてもすぐに答えが返ってこない傾向がある。また、*but* と *however*、*although* と *nevertheless* が同義かを母語話者に聞くと、「相互交換可能性を検討せずには通常決められない」のである。このように、手続き的意味を持つ表現の説明が困難で、意味よりむしろ使い方を説明する傾向があるようである。

日本語の「なんか」についても、同様なことが言える。たとえば、日本語母語話者に、「犬」や「走る」などの語の意味を聞くと、ある種の言い換えた語で答えが得られる。一方、「なんか」の意味を聞くと、それほど容易に意識に意味が想起されて言い換えができるわけではない。さらに、「なんか」と「どうも」は、小池 (2006)、大工原 (2010) で比較の対象になっているが、2 つの表現が同義かどうかを判断するのは容易ではない。これらの現象は、「なんか」の意味は、意識することが難しいことを示している。しかし、Iten (2000: 138)も指摘しているように、意識によび出されうるかどうかという側面から、ある表現が概念的意味を持つかどうかを判断するのは、直感的な判断であり、十分に説得的とは言えない。下の 2 つ他の側面からの検討と合わせて判断を下す必要がある。

2 つ目は、真理判断可能性である。概念的意味に対して、「そうではない (That's not true)」で異議を唱えることができる。たとえば、(9)にある *tree* という語は概念をコード化しており、(10)に示されたように、その真偽に対して異議を唱えることができる。

(9) The cat is in a tree.

(10) That's not true: the cat is on the mat.

(Iten 2000: 139-140)

---

31 本節における概念的・手続き的意味の検証に使用する 3 つのテストに関する議論は Iten (2000)より引用。日本語訳は、Iten (2005) (著), 武内, 黒川, 山田(訳)『認知語用論の意味論』から引用している。

(9)にある *tree* は、もともと命題内容の構成素であり真理条件に関わっているため、真偽を問えるのは当然であるが、「発話の真理条件的内容」に貢献しない表現に対しても、真偽を問える場合があり、その場合は、当該の表現は概念的意味を持つと判定される。たとえば、(11)と(12)の例を見てみよう。

(11) Sadly, I can't go to the party.

(12) That's not true: you are not at all sad.

(Iten 2000: 140)

一般的に、話し手が聞き手のパーティーに行けない場合に限り(11)は真であり、話し手がこのことに悲しいと思うかどうかは関係がない。それでも、*sadly* に対して(12)に示されたように反論することができる。言い換えると、*sadly* は、非真理条件的であるが、「発話によって伝達される表示の構成素に貢献している」のである。

Iten (2000: 140) は、概念的表現とは異なり、「手続き的表現はいかなる表示もコード化しないので、真にも偽にもなり得ない」と述べている。たとえば、(13)の *after all* に対して、(14)に示されたように異議を唱えることはできない。

(13) Joan loves Bach. After all, she is very discerning.

(14) That's not true: you're not using she's very discerning as a premise.

or: That's not true: loving Bach doesn't follow from being discerning.

(Iten 2000: 140)

このテストは、第 2 章で紹介した間投詞にも当てはまる。たとえば、(15) の *ouch* に対して、(16)に示されたように、真偽を問うことができない。これは *ouch* が手続き的意味をコード化していることを示している。

(15) Ouch! That hit me!

(16)* You're lying! You're not in pain.

(Wharton 2016: 25)

日本語の「なんか」も同じテストで検証してみよう。たとえば、(17) が示しているように、

「正直」に対しては、異議を唱えることができるため、概念的な性質を持つと考えられる。それに対して、「なんか」は (18) B のように言うことができない。すなわち、「なんか」は否定の対象になる概念を持たず、手続き的意味をコード化していると考えられる。

(17) A: 正直、彼女は苦手だね。

B: いいや、君は正直に言ってない。

(18) A: なんか、彼女は苦手だね。

B: *いいや、君ははっきり分からないわけではない。

3 つ目は、合成性である。概念的意味をコード化している表現は、他の概念的表現との結びつきによってより複雑で、大きな概念的表示を合成することができる。たとえば、Iten (2000: 141) によると、BLUE と EYES の 2 つの概念が結びつき、BLUE EYES というより大きな概念的表示が形成される。一方、手続き的意味はこのような合成性を持たない。たとえば、Iten は次のような Rouchota (1998) から引用した例を用いてこの点について論じている。

(19) Jane has a year off. So she's going to finish her book too.

(Rouchota 1998: 37)

(19)における *so* と *too* は、両方とも手続き的意味をコード化しているが、これらの手続き的意味は、Iten によると、「結合して、『より大きな』もしくはより複合的な手続きを形成するのではなく、同時であれ連続的であれ、個別に適用するように思える」のである。

日本語の場合も同様に、たとえば(20)において、「ただし」と「なんか」は 1 つの発話に共起しているが、2 つの表現が合成されてより大きな手続きを形成するのではなく、個別に適用されるのである。

(20)（会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した）

田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。ただし、なんか、彼は真面目すぎる。

また、上述の 3 点の他、第 2 章で紹介した、Wharton が挙げていた間投詞の非概念的な性質を支える非重複性も 1 つの有効なテストとして考えられる。たとえば、(21)では、概念的な重複が見られるのに対して、(22)では、*ouch* は表出的であり、*I'm in pain* は記述的である。2 つの部分には、概念的な重複が見られない。

(21) I feel pain, I feel pain.

(22) *Ow*, I feel pain.

(Wharton 2009: 79)

同様のテストは「なんか」についても考えられる。(23)に見られるように、「なんか」とほぼ同じ意味を持つ概念的表現を 2 度繰り返すと、概念的な重複が起こるのに対して、(24)のように、そのうち 1 つを「なんか」に変えると意味の重複は起こらない。すなわち、「なんか」は表出的な性質を持ち、「よく分からない」は記述的な性質を持っており、両者の間に概念的な重複は見られないのである。すなわち、このテストは、「なんか」は非概念的であるということを示している。

(23) よく分からない、よく分からない。

(24) なんか、よく分からない。

まとめると、「なんか」の意味は意識へのよび出し可能性が低く、真理判断は不可能であり、合成性を持たず、同じ意味を持つ概念的表現との間に概念的重複性がないという 4 つの特徴を持っている。これらの特徴は、「なんか」は非概念的であり、手続き的意味をコード化していることを示している[32]。

次節では、「なんか」はどのような手続的意味をコード化しているのかという問題について考える。

4.2「なんか」と高次表意の制約

本節では、Blakemore (1987) で提案された「制約」に基づく手続的意味を用いた談話標識「なんか」の分析を示す[33]。第 2 章で紹介したように、手続的意味は表意の構築の制約としても働くということが知られている。この考え方に従って、楊 (2017a) は談話標識の「なんか」は、聞き手が高次表意を構築する推論に制約を課すものだと提案した。その分析を検討する前に、もう一度、聞き手による高次表意の構築について確認しておこう。

---

[32] Carston (2016: 159-161) は、手続き的意味の判定に応用できる次の 5 つの特徴をあげている。すなわち、①「内省的到達不可 (Introspective inaccesibility)」、②「非合成性 (Non-compositionality)」、③「剛性 (Rigidity)」、④「非字義的使用不可 (Not susceptible to nonliteral use)」、⑤「多義的ではない (Not polysemous)」、という 5 つの特徴である。なお、Carston (2016: 161) は、これらの特徴は、ある表現にコード化された意味が概念的なのか手続き的なのかを完璧に検証することができず、当該表現が概念的あるいは手続き的意味を持つ傾向を示すものであることも指摘している。

[33] 本節は、楊 (2017a) を元に修正・発展させたものである。

関連性理論の枠組みでは、高次表意は、発話行為、命題態度などを反映する具体的に言語化された発話の上位節であると考えられている。第 2 章では、英語の例を紹介したが、ここでは、日本語の例も見てみよう。西山 (1995: 32, 34, 35) は下のような山田太郎と東京の友人の対話の例を挙げている[34]。

(25) 友人：昨日の地震で、君のところは大丈夫だったか？

山田太郎：わたくしの会社が昨日つぶれた。

(26) 山田太郎の勤務している会社が一九九五年一月一七日、午前六時前、倒壊した。

(27) a.山田太郎は、(26)の事実を告げている。

b.山田太郎は、(26)が真であると心から信じている。

c.山田太郎は、(26)の事実をひどく悲しみ、落胆している。

東京の友人による質問に対して、山田太郎が応答した例(25)について、西山 (1995: 35) は次のように説明している。山田太郎の発話に対して東京の友人は(26)の基礎表意を把握することに留まらない。すなわち、「例えば、山田太郎が声をふるわせながら、泣き声で答えた場合、東京の友人は、山田太郎の発話の解釈として、(26)ばかりではなく、(26)を一部に埋め込んだ次のような命題(27 a-c)のような解釈をするのが自然である」と考えられるのである。さらに、西山 (1995: 36) は、「(27a)は、いわゆる発話の力についての言明であり、(27b) (27c)は表出命題にたいする話し手の心的態度を表している。(中略) 聞き手である東京の友人は、山田太郎の声の調子や言語外の多様なコンテクスト情報、さらに論理的推論を駆使してこれらの高次表意を復元するわけである」と述べている。

高次表意の伝達において、日本語と英語の比較もされており、日本語では高次表意を明示的に示す傾向があることが報告されている。内田 (2004, 2013) によると、たとえば、話し手の判断を伝える「のだ」や、希望を表す「たい」と「たがっている」の区別などは英語では特に必ずしも明示される必要がない。さらに、日本語では多様な助詞が高次表意の構築に貢献することが特徴的である。次の例に見られるように、(28)で表す意味を、(29a-d)に示されたように、違った文末助詞を付けることで、「告知」「警告」「確認」「予想」などの異なる高次表意がより明確な方向で構築されるのである。

(28) He’s coming toward us.

---

[34] 西山 (1995)では、例文は会話形式の例文としてまとめて示されていないが、本稿ではこれらの例文を(25) - (27)としてまとめて示した。また、後続する説明において、西山 (1995)による直接引用の部分は、例文番号だけが本稿に合わせて修正してある。

(29) a.こっちへ来るよ。(告知)

b.こっちへ来るぞ。(警告)

c.こっちへ来るね。(確認)

d.こっちへ来るな。(予想)

(内田 2013: 95-96)

第 2 章で紹介した英語の例でも(25) - (29)の日本語の例でも示されているように、一つの発話は複数の表意を持つことができ、その構築に推論が関わっている。手続き的意味はこの表意の構築に制約を課すことができる。楊 (2017a) では、談話標識の「なんか」は聞き手が高次表意を構築する推論に制約を課す(30)のような手続き的意味を持つという分析を提案した。

(30) 話し手には発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があると解釈せよ。

また、「どこかのレベル」は、森川 (1991)、川上 (1991) によって提案された 3 つの不定のレベルがあるが、この 3 つのレベルは談話に使用された「なんか」を十分に説明できると言えず(大工原 2010)、楊 (2017a) は「さらに様々なレベルでの不定が存在しうる」(川上 1991) という示唆に基づき、新たに「伝達レベル」を加えた。つまり、発話が表す命題自体に関わる「認知レベル」、「関係付けレベル」、及び、命題が伝達される過程に関わる「言語表現化レベル」と「伝達レベル」の 4 つを仮定した。その上で、それぞれ「なんか」が使用されている場合と使用されていない場合を比較分析し、「なんか」の使用によって話し手の命題態度が明示的に示されることで、聞き手が不必要な処理労力を使わずにより正しい解釈を得られるようになるため、その分だけ関連性を高めることに貢献していると論じた。たとえば、まず、認知レベルに不確定性のある場合に関して、例(31) - (33)を見てみよう[35]。

(31) A: でも、いい人なんでしょう、その人。

B: あ、柿崎先輩？うん、いい人そうだったなあ。

(32) A: でも、いい人なんでしょう、その人。

B: あ、柿崎先輩？うん、なんか、いい人そうだったなあ。

(33) a. B は柿崎先輩はいい人そうだったと信じている。

b. B は柿崎先輩はいい人そうだったと説得している 。

c. B は柿崎先輩はいい人そうだったとアピールしている 。

[35] 例文(32)はドラマ『オレンジディズ (第 7 話)』より。(31)は(32)より改変した。

d. B は柿崎先輩はいい人そうだったことを懐かしがっている。

e. B は柿崎先輩はいい人そうだったことに (認知レベルに) 不確定性がある。

...

(31)が示しているように、B の発話に「なんか」がない場合には、聞き手は、たとえば、(33a-e)で示したような心的態度や発話行為を表す高次表意のどれかを構築する可能性がある。しかし「なんか」が加わることで、(33a-d)の解釈ではなく、(33e)に示したように、聞き手である A は、話し手である B が当該事態に関して不確定性があるということを示す高次表意を構築するように制約が課されるだろう。特に、B が過去のことを思い出しながら発話しているという文脈では、B の記憶が十分はっきりしているわけではなく、命題自体に対して認知レベルに不確定性があると解釈することで、聞き手の関連性への期待が満たされやすいと考えられる。すなわち、話し手は柿崎先輩のことをはっきり覚えているわけではないということを示唆する、伝達する命題の認知レベルに不確定性があることを示す高次表意を聞き手は構築するだろう。

次に、関係付けレベルに不確定性があることを示している「なんか」の例を見てみよう。

(34) (課長と一緒に会議室に入って)

課長:この部屋いつも寒いね。

(35) (課長と一緒に会議室に入って)

課長：なんか、この部屋いつも寒いね。

(36) a. 課長はこの部屋がいつも寒いと告げている。

b. 課長はこの部屋がいつも寒いと信じている。

c. 課長はこの部屋がいつも寒いということに不満を持っている。

d. 課長はこの部屋がいつも寒いことを怒っている。

e. 課長はこの部屋がいつも寒いことを聞き手に注意している。

f. 課長はこの部屋がいつも寒いことに (関係付けレベルに) 不確定性がある。

...

(34)の例では、聞き手は課長の発話に対して、たとえば、この部屋がいつも寒いという命題内容の上位に、(36a-f)で示したように、言い切っているような告知や信念、あるいは不満、怒り、さらに聞き手への注意などを示す複数の高次表意の候補が考えられる。しかし、(35)では、「なんか」があるので、課長は「この部屋がいつも寒いね」という発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があるということを示す高次表意が構築されるように聞き手に制約が課

されるだろう。この例では、部屋がいつも寒いことははっきり知覚できるという想定に基づいて、命題そのものに不確定性があるのではなく、その背後の理由、つまり、なぜこの部屋がいつも寒いかという理由付けに不確定性があると解釈することで関連性への期待が満たされる可能性が高いと考えられる。すなわち、聞き手は、課長の発話には (関係付けレベルに) 不確定性が含まれるということを示す高次表意を構築するように推論が制限されるのである。「なんか」がない場合には、聞き手は発話が持つ複数の高次表意の候補を考慮する必要があるが、「なんか」があることで、推論が制限されて、聞き手の処理労力が軽減され、その分だけ関連性が高まると考えられる。

次に、「なんか」が言語表現化レベルに不確定性があることを示す例を見てみよう。

(37) (海外で生活することについての感想を聞かれて)

最初は、安定感がなかった。

(38) (海外で生活することについての感想を聞かれて)

最初は、なんか、安定感がなかった。

(39) a. 話し手は最初は安定感がなかったと言い切っている。

b. 話し手は最初は安定感がなかったと信じている。

c. 話し手は最初は安定感がなかったことを悲しがっている。

d. 話し手は最初は安定感がなかったということに (言語表現化レベルに) 不確定性がある。

...

「なんか」を含まない(37)では、聞き手は安定感がなかったという命題の上位に、(39)に示したような様々な発話行為や命題態度を表す高次表意を構築するかもしれない。たとえば、話し手の断言や信念、あるいは悲しみなどの発話行為や命題態度を反映した高次表意が挙げられる。それに対して、(38)では、「なんか」があることで、話し手には「最初は、安定感がなかった」という発話が伝達される過程のどこかのレベルに不確定性があることを示す高次表意を構築するように聞き手の推論に制約が課される。特に、この例では、話し手は自分の心境とその背後の理由がよく分かっているはずであるという想定に基づいて、認知レベルや関係付けレベルに不確定性があるというより、正確な言葉が見つからず、命題を言語表現化するレベルに不確定性があるという解釈によって聞き手の関連性への期待が満たされやすい。すなわち、「なんか」があると、話し手は(39a-c)よりは、(39d)が示しているような、「安定感」という言語表現の選択 (言語表現化レベル) に不確定性があることを示す高次表意が構築されるのである。

最後に、伝達レベルにおいても不確定性がある場合を見てみよう。

(40) 花子: 飛鳥ちゃん、ごめん...

飛鳥: え？なんで？

→花子: 明日の演奏会、一緒に行けなくなって...

飛鳥: えー、そうか...

花子: そう...急に用事ができちゃって...

(41)→花子: なんか、明日の演奏会、一緒に行けなくなって...

(42) a. 花子は明日飛鳥さんと一緒に演奏会に行けなくなったことを確信している。

b. 花子は明日飛鳥さんと一緒に演奏会に行けなくなったことを告げている。

c. 花子は明日飛鳥さんと一緒に演奏会に行けなくなったことを悲しがっている。

d. 花子は明日飛鳥さんと一緒に演奏会に行けなくなったことを悔しがっている。

e. 花子は明日飛鳥さんと一緒に演奏会に行けなくなったことに (伝達レベルに) 不確定性がある。

...

(40)に示されたように、花子は次の日に急用ができて、約束した通り、飛鳥さんと一緒に憧れの音楽家の演奏会に行けなくなったとする。「なんか」を含まない花子の発話(40)に対して、たとえば、(42a-d)で示したような確信や告知、さらに悲しみや悔しさなどを含む高次表意が構築される可能性がある。一方、(41)のように、「なんか」があることで、不確定性があるという解釈が得られる。この例では、そもそも花子は日々忙しいため、時には予定を変更させざるをえない場合があっても不思議ではなく、受容できなくもない。また、この状況を表す表現を選んで言語で表現するのは特に難しいことではない。これらの想定に基づいて、聞き手の飛鳥は、花子が「明日一緒に演奏会に行けなくなった」という命題を伝達するというレベルに不確定性があるという高次表意を構築することで関連性への期待が満たされると考えられる。つまり、花子は自分の都合で、飛鳥さんが念願の演奏会に 1 人で行くか他に一緒に行く人を探すかというような状況にさせることになり、この情報を伝えることの影響を考え、率直に伝達しても良いかどうかがよく分からないという、伝達に関して不確定性があるという態度を示す高次表意が構築されるのである。

最後に、「なんか」は聞き手の発話解釈において高次表意の構築に制約を課しているという手続き的分析は、「使役・命令・禁止」などの発話行為を表す文に「なんか」が出現できないという川上 (1991: 110) の観察を自然に説明できる。たとえば、(43) (44)は「なんか」の使用

が不自然な例である。

(43) *何かすわれ！

(44) *何かテレビを付けるな！

川上 (1991: 110) はこのような「なんか」の共起制限に対して、「強い意志を表すような作用的な意味の面には共起しない」という説明を試みているが、記述的な説明に留まっている。本稿の提案では認知的な観点から原理的な説明を行うことができる。つまり、(43) (44)は、文形式により、聞き手は発話解釈する際に、話し手は座るように命令している、テレビを付けることを禁じるという発話行為を含む高次表意を構築する。一般的に、命令を下したり行為を禁じたりすることを表す発話は不確定性を含まない行動の指示である。もし「なんか」を使用すると、同時に話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという心的態度を含む高次表意が構築され、命令や禁止を含む高次表意とは両立しない推論を行うように聞き手は制約を課されることになる。上の例では、このように、高次表意の構築に矛盾が生じて、聞き手は順調に高次表意を構築することができないのである。即ち、余分な処理労力をかけているにも関わらず認知環境の改善ができず、人間の認知原理と伝達原理に違反しているため、(43) (44)は求められている自然な発話にならないと説明できるのである。

4.3「どうも」との比較

ここまでは、「なんか」の手続き的意味に注目してきた。手続き的表現の 1 つの特徴として、類似した手続き的表現同士の区別は母語話者でも簡単に説明できないということを、4.1 節で述べた。実際に、先行研究では、「なんか」と類似した意味・機能を持っている表現として、「どうも」が取り上げられて比較されていた。本節では、「なんか」と「どうも」の比較に焦点を当てて、手続き的意味の観点から説明を加える。

第 2 章で紹介したように、大工原 (2010) は「能動的な認知観」に基づき、「なんか」をエビデンシャルとして分析している。それと同時に、「『なんか』と『どうも』は生起環境が類似しており、エビデンシャルとしての『なんか』の性格を浮き彫りにするには、『どうも』と対照するのが有効である」と述べている。大工原 (2010: 112) では、「なんか」は「『環境の様子を調べて、＜命題情報＞を得た』のようにパラフレーズができる」と述べている。また、同じモデルのもとで、大工原 (2010: 114) は、「どうも」もエビデンシャルの一種であり、「今語られる命題情報は、考察によって得られたものだ」ということを示し、「おおむね、『環境の様子から考えて、＜命題情報＞と判断する』のようにパラフレーズできる」と述べている。

また、小池 (2006) は「どうも」を「モダリティ副詞」と呼び、その分析において、「なんか」との比較を行っている[36]。小池 (2006) は、「どうも」と「なんか」の区別は「直感性」にあることを指摘した。(45)の例を見てみよう。

(45) ＜写真を見せられて、即座に印象を聞かれて. . . ＞

a. この人はナンカ冷たい感じがしますね。

b. この人はナンダカ冷たい感じがしますね。

c. この人はナントナク冷たい感じがしますね。

d.?この人はドウモ冷たい感じがしますね。

(小池 2006: 11, 下線は小池による)

小池 (2006: 11) によると、このような、「即座に感想や判断を求められた」状況で、「ナンカ」「ナンダカ」「ナントナク」より、「ドウモ」の使用の方がより不自然である。「前者の三副詞は＜直感（に基づく判断）＞」に使用できるのに対して、「『ドウモ』が＜過程を経た判断＞（すなわち「直感ではない判断」もしくは「時間的なプロセスを経た判断」）のニュアンスを有しているため」、(45d)は不自然な印象を受けるのである。

なお、これらの分析は主に話し手の視点を取っている。聞き手の立場から、発話の解釈において、どのような違いがあるのかについて、先行研究ではほとんど論じられていない。たとえば、(46)、(47)が示すように、「なんか」と「どうも」がエビデンシャルであるとしてもモダリティであるとしても、いずれも話し手の発話産出のプロセスの特徴を示している。では、2 つの発話を受ける聞き手の、解釈のプロセスにはどのような違いがあるのであろうか。

(46) なんか、最近胃の調子が悪い。

(47) どうも、最近胃の調子が悪い。

以下では、武内 (2015) による「どうも」の手続き的意味の分析に基づいて、「なんか」と「どうも」の比較を聞き手の立場から行う。まず、「どうも」を含む次の文を見てみよう。

(48) どうも彼のこと好きになれそうもない。

(武内 2015: 96)

---

36 小池 (2006: 2) は、モダリティは、「話し手・書き手の立場から定められる、命題 (言表事態、叙述内容などともいう) に対する主観的な判断・態度を表すカテゴリー (文法範疇)」であると定義している。

武内 (2015: 93, 95) は、「どうも P」において、話し手は聞き手に対して、「P の内容と一致する想定」を補充し、そこから「P から引き出される推意を相手に分かちもってほしい、さらに受け入れてほしいという話し手の思い」が伝えられると述べている。(48)では、「どうも」を使用することによって、彼を好きになれない理由については特定できないが、その背後にある考えられる理由を聞き手が推論して、P を受け入れてほしいということを話し手は暗黙に伝えているのである。武内 (2015: 96-97) によると、聞き手は、たとえば、「彼はまじめだし、家もいいし、私のこと気にいってくれていると思うのだが、優柔不断で、趣味や夢が一致しないといった結婚相手として言うに言われぬ物足りなさ」もあるといった「推論的想定群からくる結論として P を解釈するようし向けられ」、「好きになれない」という思いを話し手とともに受け入れるように促されるのである。「『どうも』がなければ、『どうして?』と問うことができるのであるが、一方『どうも』の使用によって発話の解釈に聞き手は多大の責任をとらされることになる」のである (武内 2015: 97)。

武内の「どうも」の分析に基づいて、「どうも」と「なんか」を比較してみてみよう。

(49)どうも、花子は彼氏できたみたい。

(50) なんか、花子は彼氏できたみたい。

(49)と(50)の発話は、「みたい」が現れたためどちらも不確定性のある発話であると考えられるが、この 2 つの表現の間にある微妙な違いは説明するのが難しい。しかし、手続き的意味を用いて分析すると、2 つの表現の違いは発話解釈における推論の過程の違いとして明確に説明することができる。

(49)では、話し手は(50)と同様に花子に彼氏ができた証拠を示していないが、聞き手は自ら想定を補充しつつ、たとえば花子は最近可愛い服を着ているし、お化粧も頑張っているといった想定を補充し、話し手の情報を「共感・受容」する方向に解釈する。この場合に補充された想定はいずれも言語コードの解読に基づいたものではなく、単純に推論による想定の構築であるため、推意の構築における推論への制約が手続き的意味としてコード化されていると考えられる。それに対して(50)では、聞き手は発話を解釈する際、高次表意を構築する過程で話し手にはどこかに不定があるという方向に推論する。「なんか」があることによって、話し手は確実な情報を提供したわけではないことが示されているので、聞き手は情報を信じ込まないように対応しようとする。

同様に、(51) (52)の例も見てみよう。

(51) 医者：どうなされましたか。

患者：どうも、胃の調子が悪いんですが。

(52) 医者：どうなされましたか。

患者：なんか、胃の調子が悪いんですが。

(51)では、医者は情報の共感・受容に向けて推論を行うと考えられよう。例えば、「胃の具合が悪い」ということの理由 (たとえば前回出した薬は副作用が強いかもしれない) を聞き手 (医者) は自ら補充しつつ、そこから話し手 (患者) の意図した解釈 (たとえば薬を変えてほしい) に関して共感・受容することに至る。対照的に、(52)では、聞き手 (医者) は発話解釈をする際に、患者には (認知レベルや関係づけレベルの) 不確定性があることを識別し、患者が提供している情報が必ずしも確実なものと思われないような方向に高次表意が導かれる。従って、提供された情報を信じ込まず、積極的に他の症状も探しつつ診断を行う。

さらに、手続き的意味を用いた「なんか」と「どうも」の分析は、「どうも」と置き換えにくい「なんか」のデータに関して、その理由も同様に説明でき、この事実は本稿の分析を支持するものと考えられる。(53)と(54)の例を見てみよう。

(53)　どうも、ご馳走さまでした。

(54)??なんか、ご馳走さまでした。

(53)では、話し手が感謝の気持ちを表している。聞き手は、話し手が感謝を表す理由を自ら補充しつつ、この気持ちの伝達を受容する (武内 2015: 95)。対照的に、(54)では、友人の家でご馳走になったにも関わらず、お礼の伝達の態度に不確定性があると解釈され、非常に失礼な印象を与えてしまう。

(55) どうも、ヤンウェンチーです。

(56) ?なんか、ヤンウェンチーです。

また、(55)ではこれから私のことをよろしくお願いしますという気持ちを受け止めてほしいということが伝わる。対照的に(56)は、自分の名前を紹介するようないつでもすぐ言えるはずの場面である。「なんか」を付けると、「ヤンウェンチーである」という命題に関わるどこかのレベルに不確定性があることが聞き手に識別され、高次表意の構築に反映されてしまう。その

ため、正しい情報及び共感・受容を求める場面で不確定性のある高次表意が伝達され、聞き手は対応に困ることになるのである。

4.4「制約」に基づく分析の限界

上で見た制約に基づいた「なんか」の分析は、聞き手の立場から、「なんか」を含む発話を解釈する際の一種の可能なメカニズムとして考えられる。すなわち、「なんか」は高次表意の構築に制約を課す手続き的意味を持ち、「なんか」を含む発話の聞き手は、話し手は 4 つのレベルのどこかに不確定性があると解釈するように推論が制限されるのである。また、武内 (2015) に基づいて、「どうも」は、「なんか」と同様に、推論に制約を課す手続き的意味を持っているが、「P の内容と一致する想定」を補充し、それを受容するように推論が制限されるという点で「なんか」とは制約の性質が異なっているというように、「なんか」と「どうも」の区別も聞き手の発話解釈の観点から説明できることを示した。この意味では、手続き的意味を用いた分析では、それ以前の分析よりこの 2 つの談話標識の共通性と違いについてより統一的な説明を提供している。

しかし、この制約に基づく分析は、「なんか」の使用に見られる次の 5 つの特徴を説明することができない。

第 1 に、これまでの「なんか」の手続き的意味の分析に使用した例はほとんど(57)のような、「なんか」の後にある程度整然とした命題が続く例である。

(57)なんか、いい人そうだったな。

しかし、第2章で紹介したWharton (2009) の指摘のように、間投詞が使用される発話 (たとえば(58)-(61)) は、2.4.1節で説明したように、(58)のように後続する命題に対する高次表意が構築される場合ばかりではない。(59) - (60)のような、後に命題が続くにも関わらず、間投詞が命題ではなく対象物に向けて感情を表している場合も、(61)のような、後ろに命題が続かない場合もある。これらの例では、間投詞は命題そのものに対する態度を表しているとは言えない。Wharton (2003, 2009) が主張しているように、高次表意への制約という手続き的意味の分析は、(59)-(61)のような間投詞の特徴を適切に説明することができないのである。

(58) *Wow*! You're here.

(59) *Wow*! This ice cream is delicious.

(60) *Yuk*! This mouthwash is foul.

(61) Child: (taking foul-tasting medicine) *Yuk*!

(Wharton 2009: 86-87)

制約に基づく「なんか」の手続き的意味の分析についても同様の問題があることが指摘できる。厳密に言うと、4.2.1 節で提案された 4 つの不確定性のレベルは、すべて命題に確実に関与しているわけではない。4 つのレベルの不確定性は、命題全体にも、命題の一部にも向けられる。特に、言語表現レベルに不定がある場合、この問題が最もはっきり見られる。言語表現に不確定性があるというのは、その不確定性は通常命題全体に関与しているわけではなく、ある特定の言語表現に関与しているのである。間投詞は命題ではなく、対象物に対する感情を表出することができるのと同様に、この場合の「なんか」は命題の一部の表示のみに関する不確定性を表しているのである。そのゆえ、「なんか」は厳密にいうと、命題のメタレベルでの高次表意の構築のみに貢献するものではないのである。また、「なんか」の後ろにそもそも命題が続かない場合も考えられる。たとえば(62)の例は、話し手は途中から発話を中止したために、(61)と完全に同様ではないが、「なんか」に続く命題がないため、(57)の命題が続く「なんか」と同様の説明ができない。言い換えれば、(62)においては、話し手は「いや、なんでもない」を用いて、本来「なんか」の直後に続けようとした発話を中止したため、不確定性を反映した心的態度に埋め込める命題表示がなくなっているのである。そのため、高次表意の構築をすることができないのである。

(62)なんか. . . いや、なんでもない。

さらに、特にこのような後続する発話がない場合では、どのレベルに不定があるかを判断することが難しい。話し手はそもそもある特定のレベルの不定を表すのではなく、Wharton (2009)が論じていたような漠然とした伝達を行っている可能性がある。この伝達の不明瞭さを、制約に基づく手続き的意味のアプローチでは、うまく説明できない。

第 2 に、上で「なんか」の非合成性を検証するために(20)の例(ここでは(63)として再掲)を挙げた。この例に示したように、「なんか」は「ただし」のような手続き的意味を持つ他の談話標識と並べて使用される場合があるが、先行研究ではこのような「なんか」の使用を取り上げて論じておらず、「なんか」と「ただし」の非合成性にたいする原理的な説明も行っていない。

(63) (会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した)

田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。ただし、なんか、彼は真面目すぎる。

この 2 つの談話標識の共起の問題はさらに次の 2 つの問題を生じさせている。ここでは、これらを第 3、第 4 の問題と呼ぶ。

第 3 に、(64a) と(64b)に示したように、2 つの談話標識の順序が制限される場合があるが、この制限を、制約に基づいた手続き的意味を使って原理的に説明することは難しい。

(64) (会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した)

a. 田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。ただし、なんか彼は真面目すぎる。

b.??田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。なんか、ただし彼は真面目すぎる。

第 4 に、(64)と対照的に、(65)に示したように、2 つの談話標識が共起する時、その順序が自由な場合もある。なぜ 2 つの談話標識にこのような対照的な違いが生じるかについて、制約に基づいた手続き的意味を使って統一的に説明することは難しい[37]。

(65) a.どうも、なんか、彼は真面目すぎる。

b.なんか、どうも、彼は真面目すぎる。

第 5 に、これまでの制約に基づいた「なんか」の手続き的意味の分析では、「なんか」が特別な顔の表情などが伴わない、中立な韻律で発音された場合に理想化されて行われている。すなわち、「なんか」を発話すると同時に伴う他の自然的 (非言語的) な手続き的表現の影響を考慮していない。第 2 章で紹介したように、手続き的意味の研究の第 1, 2 段階では、研究の対象は言語的表現に限られているからである。Wharton (2003, 2009)は、「活性化」に基づく手続き的意味の概念を提案することによって、初めて自然的な側面の分析を手続き的意味の研究の中に位置付けた。このように、手続き的意味を用いて「なんか」の言語的側面と韻律のような自然的側面の両方を統一的に説明することは、制約に基づく手続き的意味では難しいのである。

これらの問題点を考慮に入れて、次章では、「活性化」に基づいた「なんか」の手続き的意味の分析を提案する。

---

37 英語の談話表標識の研究においても、Fraser (2015: 48)が指摘したように、個々の談話標識の研究は行われてきたが、その組み合わせについてはほとんど論じられていないのである。Fraser (2015) は、談話標識の組み合わせの現象を正面から取り上げているが、「組み合わせられる談話標識同士と組み合わせられない談話標識同士があることに対して、まだ満足のいく説明がない」と述べている。

第 5 章　手続き的意味による談話標識「なんか」の分析—活性化の観点から

第2章では、活性化に基づく手続き的意味の概念についてその歴史的な発展の経緯を含めて説明した。本章では、この新しい手続き的意味の概念に基づいて、制約に基づく手続き的意味を用いた「なんか」の分析の問題がどのように説明されるかを示す。

まず、5.1節では、活性化に基づく手続き的意味の概念をもう一度簡単に概観する。その上で、表出表現は感情の読み取りモジュールを活性化する手続き的意味を持つのに対して、「なんか」は認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案する。次に、5.2節から5.4節では、この新しい分析のもとで、第4章で述べた制約に基づく「なんか」の5つの問題がどのように解決されるかを示す。5.2節では、この「活性化」に基づいた手続き的意味の提案で、「なんか」に後続する命題の省略や、「なんか」による不明瞭な伝達を含めた、より多くの使用が説明できることを示す。次に、5.3節では、「ただし」と「どうも」についても、同様に活性化の観点から手続き的意味を提案した上で、手続き的意味の非合成性の説明を試みる。また、活性化の優先順位仮説を提案し、この仮説は、共起する2つの談話標識の順序に見られる制限を自然に説明することを示す。それから、5.4節では、「なんか」に伴う韻律に焦点を当てて、「なんか」に伴う韻律は認識的警戒の活性化の度合を調整する手続き的意味を持つことを提案する。最後に、5.5節はまとめである。

5.1 表出表現と「なんか」

第2章で紹介したように、Wharton (2003, 2009) は、間投詞の分析にも適用できる、「活性化」という概念で手続き的意味を捉え直すことを主張し、さらに、この活性化に基づく手続き的意味の適用範囲を間投詞から言語的及び非言語的表出表現にも一般化した。本章では、談話標識の「なんか」は、表出表現と似た性質を持ち、表出表現と同様に、人間の心・脳にある特定のモジュールを活性化することを主張する。

第 2 章で紹介したように、Wharton (2016: 21) によると、表出表現の性質として、「非真理条件的である (non-truth-conditionality)」、「記述し難い (descriptively ineffable)」、「直接的に感情を伝達する (convey emotion directly)」という 3 つの主要な特徴が考えられる。「なんか」の分析を提案する前に、表出表現の 3 つの特徴に照らして、「なんか」の特徴を確認する。

まず、1 つ目の非真理条件性に関しては、4.1 で論じたように、談話標識の「なんか」は、条件節に入らないため、非真理条件性を持つことが確認されている。次に、2 つ目の表出表現の記述し難さは、文脈によって解釈が変わる可能性があることを指しているのではなく、表出表現が非概念的な性質を持っていることに由来する性質である (Blakemore 2011: 3538)。4.1 で

は、4 つのテストを行った結果、談話標識の「なんか」は非概念性を持つことが確認されている。これは、表出表現の 2 つ目の「記述し難さ」という性質と同じものと考えることができる。このように、談話標識の「なんか」は表出表現と 2 つの特徴を共有している。しかしながら、表出表現が一般的に持つ 3 つ目の性質、すなわち、「直接に感情を伝達する」という性質に関しては、談話標識の「なんか」は事情が少し異なり、部分的にのみ当てはまる。まず、共通するのは、「直接に伝える」という部分である。Wharton が挙げた次の 2 つの例を見てみよう。

(1) Damn! That's really annoying.

(2) I'm cross. That's really annoying.

(Wharton 2016: 21)

Wharton によると、2 つの例とも、話し手の感情の状態に関する情報に貢献する表現を含んでいる。しかし、(1)の *Damn* によって、感情（たとえば怒っている）が「直接的に反映されている (expressed directly)」のに対して、(2)の *I'm cross* によっては、その感情の状態が「記述されている (described)」のである。同じ観点で「なんか」の場合も見てみよう。

(3) なんか、この提案だったら直感に合わないような気がして....

(4) なぜかよく分からないが、この提案だったら直感に合わないような気がして...

「なんか」とそれと似た意味を持つ「なぜかよく分からないが」と比べてみると、(3)の「なんか」は、話し手は、たとえば「例の提案は直感に合わないように感じるが、その理由ははっきり分からない」という、関係づけレベルに不確定性があると感じているという心的状態にあることを示唆している。しかし、その心的状態を記述するのではなく、それを直接に表出している。対照的に、(4)の「なぜかよく分からないが」はその状態を記述しているのである。

一方、「なんか」は表出表現と同様に直接に心的状態を伝達するのだが、この伝達される心的状態は、「どこかのレベルに不確定性がある」という状態であるため、表出表現と違って、話し手の「感情の状態 (emotional state)」を伝えるのではなく、話し手の「認識の状態 (epistemic state)」を伝える表現だと考えられる。

ここまで見たように、Wharton がまとめた表出表現の 3 つの特徴から見ると、談話標識の「なんか」は表出表現と同じように、非真理条件的であり、非概念的な (記述し難い) 性質を持ち、心的状態を直接的に伝達するものである。しかし、感情の状態ではなく、認識の状態を直接的に伝達しているという点で表出表現とは異なっている。話し手の発話する際の認識の状態は、

コミュニケーションの相手である聞き手の発話の解釈や情報の受容に少なからぬ影響を与えるものであると思われる。

5.2「なんか」と認識的警戒の活性化

人間のコミュニケーションは、他の特徴もあるが、Wilson (2011) によると、話し手が発話を産出するとき、聞き手に①「発話の意味を理解してもらうこと」と、②「それを信じてもらうこと」という「2 つの異なる目標」を持っている。それに対応して、聞き手は、①「話し手の意味を理解すること」と、②「それを信じるかどうかを決定する」という「2 つのタスク」を行う。すなわち、発話を理解することと受容することとは独立しており、この聞き手の 1 つ目のタスクの遂行は、「語用論的能力」と関わり、2 つ目のタスクは、「認識的警戒の能力」に関わっていると考えられている (Sperber et al. 2010, Wilson 2011)。Sperber et al. (2010) によれば、人間はコミュニケーションの中でのリスクを避けるために、進化の過程で認識的警戒を備えるようになり、必要な場合にそのコミュニケーションに関わっている幾つかの要因をチェックする可能性があると考えられる。たとえば、「情報源 (source)」としての話し手の「能力 (competence)」と「善意度 (benevolence)」、また、情報の「内容 (content)」に関わる「論理的一貫性 (logical consistency)」と「経験的統一性 (empirical coherence)」がチェックする項目として考えられる。

実際に、発達心理学の分野では、子供の認識的警戒能力に関する研究事例が報告されている。たとえば、Matsui et al. (2006)は、他の表現も調べているが、異なる確信度を表す文末助詞 (certainty partices)「よ」と「かな」についての子供の認識を調べた。この研究では、2 つの異なる対象表現を含む矛盾した発話（たとえば、「おもちゃの車があるのは赤い箱だよ/ 青い箱かな」）を子供に聞かせ、その後に隠されたものの入った箱を選択させるという課題（隠されたものは赤と青のどちらの箱にあるか）を 3 歳から 6 歳までの子供に与えた。3 歳の日本語母語話者の子供は、「よ」「かな」のような文末助詞をもとに話し手の確信度（認識的状態）を見抜くことができることが報告された。さらに、Matsui et al. (2016) では、上述の研究を発展させ、子供に語彙習得の課題を与え、話し手は情報に自信あるかどうかを判断するだけではなく、その判断を後続の活動（新奇な語彙を習得すること）に応用するかどうかも調べた。3 歳の子供は「これは○○（だ）よ」という発話で教えられた語彙を学習したのに対して、「これは○○かな」という発話で教えられた語彙は学習しなかったという結果が報告された。

本研究では、談話標識の「なんか」も聞き手の認識的警戒に関わると考え、認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つことを提案し、「なんか」の手続き的意味を(5)のように定式化する。

(5)「なんか」の手続き的意味：聞き手の認識的警戒モジュールを活性化し、話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという認識状態に気づかせる。

なお、制約に基づく手続き的意味と比べてみると、この活性化に基づく手続き的意味は、より漠然としており、不明瞭な印象を受けるかもしれない。しかし、Wharton による間投詞または非言語的表現の分析にも、活性化されたと思われる感情は不明瞭であるという問題が残こっている[38]。たとえば、*yuk* によって聞き手の感情の読み取りのモジュールが活性化され、より顕在的になったのは軽い反感なのか、我慢できないほどの嫌悪感なのか、また、その感情は、対象物の味に向けているのか、匂いに向けているのか、はっきり規定していない。このような「弱くて不明瞭な」側面は、Wharton (2009: 43-44) によれば、明示的コミュニケーションに常にある側面であり、たとえば「印象 (impressions)」、「感情 (emotions)」、「態度 (attitudes)」、「感覚 (feelings and sensations)」などの伝達が挙げられている。Wharton (2009: 43) は、「人間のコミュニケーションの理論は少なくともこの側面を考慮に入れる努力をするべきである」と述べている。関連性理論は、コミュニケーションでは、話し手は聞き手の思考を直接修正するのではなく、認知環境を修正すると考えている。この修正は、思考の同一性 (identity) ではなく、思考の類似性 (similarity) を引き起こすのである。Sperber & Wilson (1998) は、これを複数の人が一緒に歩くことに喩えて説明した。思考の類似性 (similarity) は、散歩のように、同じ方向で大体一致した歩調で進むことであり、必ずしも軍隊のような揃った歩調を求めるわけではない (Sperber & Wilson1998, Wharton 2009: 58)。認知環境が修正された結果、「聞き手が現時点で気づいている事実や想定だけではなく、聞き手にとって、彼の認知能力や物理的環境に基づいて、これから気付くようになりうるすべての事実や想定も含めて」、それが「顕在的 (manifest)」にあるいはより顕在的になることである。ある顕在的な発話解釈の想定は、より卓越 (salient)していればいるほど、心的に表示されやすいが、不明瞭なコミュニケーションでは、通常意図されているのは、「広範囲にわたる想定の顕在性のわずかな増加」である。関連性理論はこのようなコミュニケーションを「弱い伝達 (weak communication)」と呼び、結果として生じた推意を「弱い推意 (weak implicature)」と呼んでいる。

Wharton (2009) は、弱い伝達の例として(6)のような非言語的表現による伝達の事例をあげている。

---

38 ここでいう「不明瞭 (vague)」は、「多義 (polysemy)」や「同音異義 (homonymy)」などに由来する「曖昧 (ambiguous)」とは区別される。「曖昧性」と「不明瞭性」の区別に関しては、たとえば、今井＆西山 (2012) を参照されたい。

(6) JackとLilyはある小さなギリシャの島に到着し、フェリーから降りて上陸する。港湾を見渡し、JackはLilyに向かって、微笑みながら、目に見えて全身をリラックスさせながら、この数カ月の旅の疲れが取れた様子でため息をついた。それから、彼は、はっきりとわかるように、再び港湾を振り返って見ることで、Lilyにも見るように促す。Lilyは港湾を見つめる。(Jack and Lily have arrived by ferry at a small Greek island. They disembark. Having scanned the quayside, he smiles at her and sighs as his whole body visibly relaxes, the tensions of the journey (indeed, the past few months) leaving him. Then he looks back ostensively to the quayside again, urging her to look too. She gazes along the quayside.)

(Wharton 2009: 44-45, 翻訳と下線は筆者による)

Wharton (2009: 45) によると、この状況では、Jackは、たとえば、「水の端にある店」、「風で乾かしているタコ」、「網の匂いを嗅いでいる猫」、「カストロのメイン広場の向こうに生えているブーゲンビリア」、「明るい光」などのどれか1つ、またはいくつかにLilyに注意を向けるというよりは、むしろ全体の印象をLilyと共有しようとしている。LilyはJackのこの非言語的伝達に対して、「どういう意味？」と聞くのではなく、それを漠然とした印象として受け取るのである。

また、このような弱い伝達を引き起こすのは非言語的表現の使用に限らない。言語的表現の使用も同様に、弱い伝達をもたらすことができ、たとえば、詩的効果がその一例として挙げられる。東森＆吉村 (2003: 52-54) の解釈によれば、「推意には、様々な強さがある」が、ある発話から、仮定できる一連の推意は、どれかが明らかに強い関連性を持つのではないため、聞き手は、その中から選択するのではなく、「広範囲にわたる確定度の低い一連の弱い推意が伝達されることによって、関連性が達成される場合がある」のである。この想定群全体によって関連性が達成される場合には、詩的効果が生じるのである。

「なんか」という言語的表現に対しても、次節でも説明するように、聞き手は確実に解釈をするよりは、むしろ「印象」を受けることが期待され、つまり「弱い伝達 (weak communication)」が期待される場合があると考えられる。

5.3「なんか」の不明瞭性

本節から、5.4 節まで、このモジュールの活性化という観点から提案した「なんか」の手続き的意味が、どのようにこれまでの残された問題を説明するのかを見てみよう。前節で挙げた(54) (59)の例をもう一度考えよう (ここでは(7) (8)として再掲)。

(7) なんか、いい人そうだったな。

(8) なんか. . . いや、なんでもない。

上の2つの例のどちらでも、聞き手は「なんか」によって認識的警戒が活性化され、話し手が発話の時点で不確定性を含む心的状態にあることに気づくことができる。

上の(7)のように発話が後続する場合には、その不確定性が発話に表された命題に関わっていると聞き手は解釈することができると考えられる。それに対して、(8)の例は、話し手は途中で話すことを止めて、「いや、なんでもない」を使って発話を完結させているが、聞き手は、発話が続いた場合と同様に話し手には、不確定性があることに気づくことができる。言い換えると、モジュールの活性化は命題に依存しないため、命題が示されていない(8)においても、(7)の場合と同様に、「なんか」は聞き手の認識的警戒を活性化し、不確定性のある話し手の心的状態に気づかせる働きをしていると説明できる。

さらに、聞き手は認識的警戒が活性化され、話し手に不確定性があることに気づくが、具体的にどのレベルに不定があるかを追求せず、不明瞭で漠然とした印象が残されたまま解釈を終える場合もこの分析で説明できる。たとえば、(8)は弱い伝達の例として考えることができる。話し手は話しを続けそうだったが、結局「なんでもない」という発話で話すことを中止した。しかし、発話に出現した「なんか」によって聞き手は認識的警戒が活性化され、話し手の不確定性のある認識的状態を把握することができる。しかし、どのレベルに不確定性があるのかまでは簡単に同定できない。たとえば記憶が薄れたのが原因で、話そうとしたことに対して、認知レベルで不確定性に気づき、誤った情報の伝達を避けるためにその時点で発話を中止していると解釈することができる。また、話そうとしていたことについて、話し手自身は根拠を持たず、あるいは自分でも受け入れ難いところがある、という関係づけレベルの不確定性があり、発話を中止した、と聞き手は解釈することも可能である。さらに、話そうとしていたことは、言葉で表現しづらいという言語表現レベルの不確定性や、聞き手に直接言いづらいという伝達レベルの不確定性などがあるため、発話を中止したと聞き手は想定することもできる。これらの話し手の認識的状態について立てられる仮説は、特にどれかが明らかに強いわけでもなく、聞き手は特にどれか追求せず、想定群全体で期待した関連性を満たし、漠然とした解釈のまま発話を受容するかもしれない。言い換えると、「なんか」そのものは、ある範囲での不確定性をより顕在化するが、具体的にどのレベルでの不確定性なのかは、「なんか」そのものによって示されるものではなく、聞き手が文脈の想定と合わせて推論をした結果得られた解釈である。明らかにある特定のレベルに不確定性があると解釈できる場合もあるが、特定のレベルに同定できず全体的にぼんやりしている印象を形成する場合もありうる。このように、話し手は漠然

とした不確定性のある印象を伝える可能性があるということも考慮に入れると、活性化に基づいた手続き的意味はより一般的な現象を説明できるという点でより優れている。

ここまで論じてきたように、活性化に基づく分析では、「後続命題の省略」や「弱い伝達」など現象も含んだ「なんか」の使用を説明でき、前節で挙げられた1つ目の特徴は、この分析の帰結として自然に説明される。

5.4「なんか」と他の談話標識との共起

本節では、「なんか」と他の談話標識との共起に関わる問題を考える。具体的には、「ただし」と「どうも」を例として、「なんか」と共起するときの聞き手の発話解釈のプロセスを考える。なぜ、「なんか」と「ただし」との順序は制限的でそれによって発話の容認度が変わるのか。一方でなぜ「なんか」と「どうも」との順序は比較的自由なのか。モジュールの活性化という観点からこれらの問題の統一的な説明を試みる。

5.4.1「ただし」と推論的理解の活性化

内田 (2012) は、英語の *but* の分析を参考にして、日本語の「ただし」の手続き的意味を提案した。まず、Blakmore (2000) の *but* の分析を見てみよう。

(9) She is a linguist, but she is quite intelligent.

(10) a. All linguists are unintelligent.

b. She is not intelligent.

この例では、聞き手は *but* に先行する「She is a linguist」という発話から (10a) 「All linguists are unintelligent」のような文脈想定に基づき、(10b) 「She is not intelligent」という文脈含意を引き出す。しかし、その文脈含意は、*but* に後続する「she is quite intelligent」と矛盾することによって、第 1 節から引き出された(10b)の文脈含意は削除される。

すなわち、but の手続き的意味は「後続節によって(明示的または非明示的に)伝達される命題と、先行節（または先行状況）から派生される命題(推意)が矛盾し、先行節の推意が削除されるように後続節を処理せよ」(東森・吉村 2003: 92) という制約として述べることができる。内田 (2012) は、「ただし」を *but* と同様に、「想定の削除」という認知効果をもたらすが、*but* と異なり、想定を「部分的に削除」する標識であると述べている。内田 (2012) は横林・下村 (1988) の(11)の例文を用いて、下のように説明している。

(11) 目的地まで早く着いた人が勝ちです。ただし、決められた通過点を一つでも通らなかった場合は失格です。

(内田 2012: 196)

先行の発話「目的地まで早く着いた人が勝ちです」ということから一般に「目的地に最も早くついた人なら誰でも勝ちである」ということが含意される。一方、「ただし」以下は、この文脈含意の一部を削除している文である、つまり、特定の条件（すべての通過点を通らないものは失格である）をつけることで、一度先行の文で確立された「誰でも当てはまる」という想定を部分的に削除しているのである。

(内田 2012: 196-197)

さらに、内田 (2012) は(12)の例を示して、「この例では、先行の内容（商店の窓がしまっているが電気がついている）が言語的に明確ではないため、『ただし』を使用することはできない」と述べ、「ただし」の制約には先行する言語的に明示された命題が必要であることを説明している。

(12) ＜商店の窓がしまっているが、電気がついているのをみて＞
でも／＊ただし、店はまだ開いてるじゃない。

(内田 2012: 197)

最後に、このような観察に基づいて、内田 (2012) は、「ただし」の手続き的意味を次のような制約として規定した。

(13) 先行命題から明示的に確立された想定を部分的に削除するように解釈せよ。

(内田 2012: 197)

ここでは、「ただし」についてのこの制約に基づいた手続き的意味について特に検討を加えないが、Blakemore (2000) で提案された *but* の分析と部分的に性質が類似していることは明らかである。具体的な推論の過程を今後明らかにする必要はあるが、2.5 節で述べたように、本研究で採用する Wharton (2003, 2009) と Wilson (2011, 2016) のより広い理論的枠組みから見ると、Blakemore が分析してきた談話連結語は、「推論的コミュニケーション」の領域にある手続きを活性化するものとして特徴づけることができる。このような観点から考えると、上で考察し

た「ただし」の手続き的意味は、この推論的コミュニケーションの領域に属する手続き的意味と特徴付けることができる。そこで、本研究では、Wilson (2011, 2016) が挙げた名称を援用し、「ただし」は「推論的理解」モジュールを活性化する手続き的意味を持つと仮定する[39]。

5.4.2「どうも」と共感の活性化

本研究では、Wilson (2011, 2016) で明確に示された人間の心・脳にある幾つかのモジュールの他に、もう 1 つのモジュール、「共感 (empathy)」のモジュール、があることを仮定する。さらに、「どうも」は共感のモジュールを活性化する手続き的意味を持つことを提案する。

実際に、共感は、動物行動学や進化心理学などの分野で研究されつつある重要なテーマである。de Waal & Preston (2017) では、共感を次にように定義している。

> 観察者が、他者の状態の人格的、神経的及び精神的表示を活性化することによって、他者の状態を理解することから創発するプロセスであり、他者の感情の状態から影響を受けたり、共有したりする能力、他者の状態の理由を推測する能力、他者を識別し、その他者の考え方を取り入れる能力などを含む。
> (Any process that emerges from the fact that observers understand other's states by activating personal, neural and mental representations of that state, including the capacity to be affected by and share the emotional state of another; assess the reasons for the other's state; and identify with the other, adopting his or her perspective.)
>
> (de Waal & Preston2017: 488, 翻訳は筆者による)

共感は多くの哺乳類に見られる能力である。de Waal & Preston (2017:488)は、この能力は、「個体が他者の状態に素早く関連づけることを可能にする」ものであり、「親による養育 (parental care) や、共通の目標に対する協調的な働きには不可欠」なものであると述べている[40]。ネズミ、チンパンジー、猿、イルカなど、多くの動物の共感に基づいた行動がこれまでの研究で挙げられている。また、de Waal & Preston (2017: 501) によると、1歳未満の乳児であっても、苦痛を伴う仲間に顕著な注意と懸念を示すことも報告されている。

---

39 推論 (inference)と論証 (argument)を区別する必要があるが (Wilson 2016)、詳しい議論は今後の課題とする。

40 Preston & de Waal (2002)も参照されたい。なお、研究者によって共感の定義や分類が異なる。たとえば、感情の伝染 (Emotional contagion)、同情 (Sympathy)、感情移入 (Empathy)、認知的共感 (Cognitive empathy)、向社会的行為 (Prosocial behaviors)などが、分類によく使用されている述語として Preston & de Waal (2002)に整理されている。なお、本研究では、「どうも」の手続き的意味に合わせて、「共感」のモジュールを想定し、その分類（下位モジュール）についての検討には立ち入らない。

また、人間はさらに、言語によって共感することができる。たとえば、飯尾 (2006: 68) は、金田一 (1975) や水谷 (1985) に言及し、日本語の終助詞「ね」は「共感」を表すと述べている。

第4章で紹介した武内 (2015) による「どうも」の分析を振り返ってみよう。「どうもP」において、話し手は聞き手に対して、Pと一致するある種の想定を補充させ、そこからPから導出された推意に対する共感、受容するよう方向付けるものとして分析している。この分析に基づいて、ここでは、「どうも」は共感のモジュールを活性化する手続き的意味を持つことを提案する[41]。

5.4.3手続き的意味の非合成性

ここまでは、「なんか」「ただし」「どうも」の 3 つの表現はそれぞれ対応するモジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案した。本節では、上で述べた手続き的意味の「非合成性」はこの分析からの帰結として自然に説明されることを論じる。

まず、「ただし」と「なんか」が共に使われている例(14)を考えてみよう。

(14)（会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した）

a. 田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。

b. ただし、なんか、彼は真面目すぎる。

(15)田中さんの能力と人柄全てがこの仕事に相応しい。

制約に基づく手続き的意味を用いた説明は次のようになる。内田 (2012: 197)によると、「ただし」は「先行命題から明示的に確立された想定を部分的に削除するように解釈せよ」という手続き的意味を持っている。まず、(14)の発話の前半(14a)から一般に(15)のような想定が確立される。しかし、発話の後半(14b)の「ただし」に後続する「彼は真面目すぎる」では、この想定の一部が削除されている。つまり、「能力と人柄の全てについて当てはまる」という想定を部分的に削除しているのである。一方、(14b)が「なんか」を含むことによって、「彼は真面目すぎる」という命題に対して、不確定性のある態度を示した高次表意を構築するように聞き手の推論が制約されることになる。ここでも、「ただし」と「なんか」が持つ手続き的意味は、合成されるのではなく、順に適用されているように思われる。このような、制約に基づく、2

41 「共感のモジュール」は、Wharton (2009) で分析された間投詞や表情などが活性化する「感情の読み取り」のモジュールと同じモジュールであるか、あるいは重なっている部分があると考えることも可能かもしれない。しかしながら、「感情の読み取り」のモジュールを活性化すると思われる表出表現 (刺激)は、基本的に自然なあるいは、非言語的な性質を持っている。それに対して、「どうも」は言語的にコード化された刺激であるため、ここでは 2 つのモジュールは区別されるものと仮定する。

つの表現がそれぞれ実行する手続きを順番に記述する説明は、発話解釈の過程をメカニズムのレベルで説明をしている点で評価できる。しかし、なぜ、手続き的意味が合成されず独立に適用されるのかについては原理的な説明は得られない。

一方で、心的モジュールの「活性化」という概念に基づく手続き的意味を用いた、談話標識の分析では、「なんか」を含めた手続き的意味を持つ談話標識に共通して見られる非合成性という特徴は、談話標識がそれぞれ独立したモジュールを活性化するという性質を持っているという事実から自然に帰結する。

5.4.4 活性化の優先順位の仮説

本節では、上で述べた「制約」の限界としての第 3、第 4 の問題について考える[42]。この 2 つの問題は、「なんか」と他の手続き的表現との共起だけではなく、共起するときの順序も視野に入れた問題である。たとえば、(16)、(17)の例を見てみよう。

(16) (会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した)

a.　田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。ただし、なんか、彼は真面目すぎる。

b.??　田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。なんか、ただし、彼は真面目すぎる。

(17) (会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価した)

a.どうも、なんか、彼は真面目すぎるかも。

b.なんか、どうも、彼は真面目すぎるかも。

上の例に見られる容認可能性の違いについて、本章で提案した分析に基づいて記述的一般化を行うと、次のようになる。

(18) 2 つの談話標識が連続して出現する時

a. 推論的理解モジュールを活性化する談話標識は、認識的警戒モジュールを活性化する談話標識に先行する。

b. 認識的警戒モジュールを活性化する談話標識は共感モジュールを活性化する談話標識に先行することも、後続することもできる。

(Yang & Ueda 2018)

以下では、この記述的一般化は、モジュールが持つ階層性に関する仮説を設けることで説明

[42] 本節は、楊・上田 (2017)、Yang & Ueda (2018)に基づいて修正・発展させたものである。

することが可能であることを示す。

まず、推論的理解は聞き手が通常先に開始する作業であり、かつ複数の命題に関わるより広範囲の言語表現の処理を対象とした包括的なモジュールであると考えられる。それに対して、認識的警戒モジュールも共感のモジュールも推論的理解のモジュールより狭い範囲を対象とし、間違い、矛盾、不確かさ、あるいは共感、同意、賛成などによって活性化される局所的に働くモジュールであると考えられる。

これに関連して、Sperber & Wilson (2002) は、人間の認知の特徴の結果として「注意のボトルネック」があることを指摘している。すなわち、「労力を要する注意過程の能力は有限であり、ある特定の時点でかなり制限された量の情報しか処理できない」ことである[43]。

これらの想定に基づき、推論的理解モジュールと認識的警戒モジュール、共感のモジュールが図に示されたような階層構造を持つと仮定した上で、Yang & Ueda (2018) では、(19)のような活性化の優先順位仮説を提案した。

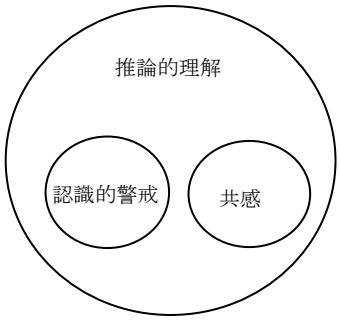

図 1

(19) 活性化の優先順位仮説：

もし 2 つのモジュールが階層関係にあるなら、より包括的なモジュールを先に活性化する方が処理労力がかからない。

(Yang & Ueda 2018)

この仮説を持って、上で論じた「なんか」「ただし」「どうも」の生起の順序に制限がある場合とない場合があるという問題を見てみよう。

---

[43] Sperber & Wilson (2002) は人間の認知は 3 つの重要な特徴を持つと述べている。すなわち、「認知は幅広く多様な環境の特徴に対する持続する観察を取り込んでいる」、「(様々な程度の接近可能性を伴うが)大量な記憶されたデータの永続的な可用性」、及び「労力を要する注意過程の能力は有限であり、ある特定の時点でかなり制限された量の情報しか処理できない」の 3 つである。これらの特徴を持った結果、「注意のボトルネック」が生じる。すなわち、「人間はほんのわずかな一部の環境からの情報にしか注意を払って処理できず、その処理の手伝いにほんのわずかな一部の記憶された情報しか使用できない」(Sperber & Wilson 2002: 14)。

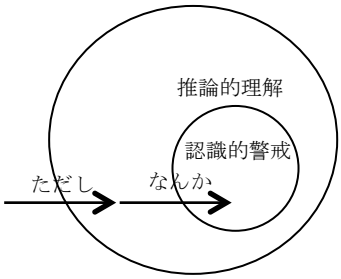

図 2

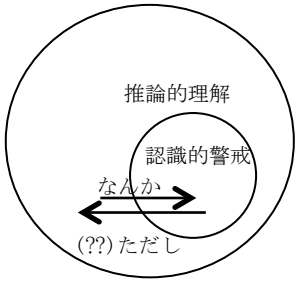

図 3

まず、「ただし、なんか」を含む発話を考えてみる。図2が示したように、まず、「ただし」は推論的理解モジュールを活性化し、次に、「なんか」は認識的警戒モジュールを活性化することになる。この解釈の過程は、活性化がより包括的なモジュールからより局所的なモジュールへと進んでいる。そのため、処理労力の要請が少なく、より自然な発話になる。

反対に、「なんか、ただし」の語順を含む例を考えてみよう。図3に示したように、「なんか」は先に「認識的警戒モジュール」を活性化し、その後、「ただし」は「推論的理解モジュール」を活性化するという順序である。活性化がより広い領域からより狭い領域に焦点化され、局所的な処理を続ける場合と比べて、進行中の局所的な処理を中止し、活性化がまた広い領域に戻ることは処理労力が大きくなるプロセスであると考えられる。すなわち、聞き手は警戒態勢になり、慎重に処理を続けようとした途端、包括的なモジュールを活性化する手続き的表現によって、活性化の焦点を切り替えなければならなくなるために処理労力が増えて、発話が不自然に感じられると考えられる。つまり、「なんか」と「ただし」のような手続き的意味を持つ談話標識との共起に見られる順序の制限は、推論的理解モジュールと認識的警戒モジュールの活性化の順序に関する一般的な原理によって説明される。

しかし、「なんか、どうも」と「どうも、なんか」の順序に関して、図4に示したように、「なんか」が活性化する「認識的警戒モジュール」と、「どうも」が活性化する「共感のモジュール」との間には階層関係はないため、いずれの順序で活性化が行われっても、聞き手が解釈する際、必要とする処理労力はほとんど変わらないため、「なんか」と「どうも」の2種類の順序とも容認できる。

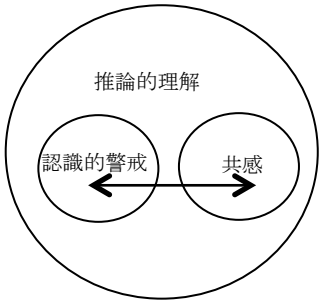

図 4

この仮説はまた、図 5 に示したように、推論的理解のモジュールを活性化する談話標識「ただし」と共感を活性化する談話標識「どうも」の順序についても予測をする。言い換えると、もし提案したモデルが正しければ、「ただし、どうも」は自然な順序であり、逆の順序の「どうも、ただし」は不自然な順序のはずである。実際に、この予測が正しいことは下に示された例によって検証される[44]。

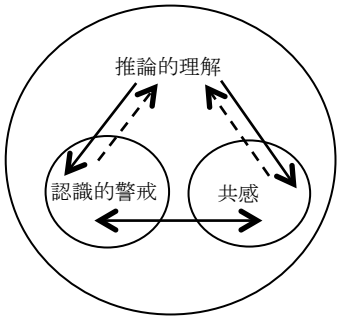

図 5

(20) 東京に行く件、田中さんに頼んでみようか。

a.ただし、どうも、彼は都会より田舎が好きそう。

b.??どうも、ただし、彼は都会より田舎が好きそう。

(20b)では、「どうも」は共感のモジュールを活性化させた直後に、「ただし」は推論的理解のモジュールを活性化させる。聞き手はより局所的なモジュールの活性化を実行する最中に、より包括的なモジュールの活性化に切り替えることは、反対の順序の活性化と比べ、より多くの処理労力を必要とする。従って、発話が不自然に感じられるのである。

このように、3 つ目、4 つ目の問題としての「ただし」と「なんか」及び、「なんか」と「どうも」の共起に見られる順序の問題は、推論的理解モジュールと認識的警戒モジュール、共感のモジュールの活性化の順序に関する一般的な原理によって説明される。さらに、この活性化の順序はモジュールの対象範囲に由来する階層性の違いによると考えられる[45]。

---

44 他にもこのモデルを支持する例が考えられる。たとえば、推論的理解のモジュールと認識的警戒モジュールの活性化の順序に関して、「なのに、なんか」「??なんか、なのに」、「それで、なんか」「??なんか、それで」「しかし、なんか」「??なんか、しかし」などが挙げられる。また、認識的警戒モジュールと共感モジュールの活性化の順序に関して、「なんか、ほら」「ほら、なんか」、「なんか、ねー」「ねー、なんか」などが挙げられる。さらに、推論的理解のモジュールと共感のモジュールを活性化する順序に関して、「なのに、どうも」「??どうも、なのに」、「そこで、どうも」「??どうも、そこで」、「さらに、どうも」「どうも、??さらに」などが挙げられる。

45 モジュールの階層性は「対象範囲の広さ」の他、Sperber (2005)が指摘したように各モジュール間の「エネルギーの分配 (energy allocation)」も関与していると考えられる。Sperber (2005: 66) は、たとえば、「潜

5.5 「なんか」の韻律と認識的警戒の活性化の度合

5.5.1 「なんか」の多様な韻律

日常会話における「なんか」の使用は常にさまざまなパラ言語的（非言語的）要素と関わっている。例えば、「なんか」の長さ、発話される時の強さ、イントネーション、ないし発話に伴う話し手の表情、ジェスチャーなども研究に値する重要な特徴であると考えられる。しかし、前節までの議論は、これらの要素を捨象し、高度に理想化された談話標識の「なんか」の意味・機能に焦点を当てていた。本節では、上で挙げられた要素の 1 つである韻律に関わる問題に焦点を当ててその性質を明らかにすることを試みる[46]。

「なんか」の韻律の多様性について論じた先行研究としては、まず飯尾 (2006) を挙げることができる。飯尾 (2006) は、短大生のグループワークの会話を分析した。Chafe (1980) に従い、“idea unit” の概念をも分析の単位とし、「なんか」の出現位置（節頭、節中、節尾）と韻律（強形、弱形）の相関関係を観察した。その結果は表 1 のように示されている。強形と見なされたのは「なんかぁ」「なんかさぁ」であり、弱形と見なされたのは「なんか」「なか」である。飯尾 (2006) は、談話標識の「なんか」は節頭、節中、節尾に使用することができ、一番多く使用されるのは節中であり、次に節頭、節尾と続くと述べている。ここでは、まず、挙げられた使用例と分析を簡単に紹介する。

「なんか」の使用箇所及び強形弱形による分類

	節頭		節中		節尾		
学生	強	弱	強	弱	強	弱	
A	3	4	4	21	0	2	
B	1	5	0	19	0	1	
C	5	6	0	30	0	1	
D	3	2	0	8	0	2	
合計	29		82		6		/117

表 1

(飯尾 2006: 71)

在的危険信号」のような、「種の歴史の中で高い認知的インパクトを持つ入力を処理することに特化したモジュール」にはより大きなエネルギー資源を分配されるはずであると述べている。このエネルギーの分配の観点も取り入れたより精緻なモデルの説明は今後の課題とする。

46 本節は楊 (2017b) に基づいて、修正・発展させたものである。

まず、たとえば(21)に示されたような節頭の強形の「なんか」は、「発話の順番を獲得するマーカー」として働き、話し手が「他の話者の気を引き付けようとしている」時に使用されると論じられている。

(21) B: 嬉しいときもあるよね。

A: ウン、あるある。

C: なんかさぁ、昨日ヴィトンのバッグもって成金みたいな人が来て...

(飯尾 2006: 71, 下線は飯尾による)

また、(22)にあるような、節頭で使用された弱形の「なんか」については、話し手は「断固とした発話獲得のための意志のようなものはなく、ただ単に前の発言者に意見を補足するという役割で使われている」とされている。

(22) A: こっちから編入ってさあ、友だち作んの大変じゃない？

C: なんかだれもいないしね、はじめは。

(飯尾 2006: 72, 下線は飯尾による[47])

次に、節中の強形の「なんか」は、話し手は「次に言うことを考えながらも、話の場を渡したくない場合に使われている様に思われる」と論じられている。

(23) A: いま渋谷の高校生でさあ、渋谷のなんかさぁあのほら、原色とか着てるのいるじゃん。

(飯尾 2006: 72, 下線は飯尾による)

一方、節中に出現する弱形の「なんか」は、「発話を和らげる(softener)役目」または、「つなぎ語(filler)の役目」と分析されている。たとえば、(24)において、「『なんか』なしではぶっきらぼうで険しい話し方に聞こえるであろう」。その状況を緩和するのに使用されていると考えられる。

(24) A: どっちがいい、どっちがいいとか聞いてなんか結局買わないの、そのあとなんかくやし

47 飯尾 (2006) では、この例は節頭に出現した弱形として挙げられた例であるが、「なんか」と表記されている。本稿では弱形であることを明確に示すため「なんか」と表記する。

かったからファッション雑誌みてたらね...

(飯尾 2006: 73, 下線は飯尾による)

最後に、節尾の「なんか」について、飯尾 (2006) が観察したデータには、強形の「なんか」は出現しなかった。節尾に出現する弱形の「なんか」は、(25)のような例が挙げられて、「発話の最後をすっぱり切ってしまうのではなく、曖昧さを残しながら発話を終えるためである」と論じられている。

(25) A: あの人さあ、星の話なんか全然してなくないなんか…[48]

(飯尾 2006: 74, 下線は飯尾による)

大工原 (2010) は、「なんか」の意味と生起環境について論じた際に、「なんか」のもう一つ別の種類の韻律に触れている。すなわち、「『なん』の部分が極端に高く発音され、高いまま引き伸ばされることがある」のである。またその場合、「文末も引き伸ばされることが多く、腕組み、首かしげ、眉ひそめなどの非言語的行為を伴いやすい」ことが指摘されている。たとえば、(26)の例が挙げられている。

(26) 『なーん'か調子悪いなー[49]。

(大工原 2010: 119, 下線は大工原による)

大工原 (2010) によると、この韻律が伴う「なんか」は、話し手の「いぶかしい気持ち」や「知覚の微妙さ」に結びついている。(話し手の)「認知体験が複数回反復されたこと」を表す。

ここまでは、「なんか」の韻律に触れている先行研究を紹介した。Wharton (2012 : 568) による韻律と意味の研究一般に対して指摘したのと同様に、すでに概観した「なんか」の韻律的特徴を、どのように関連性理論及び手続き的意味を用いた「なんか」の分析の中に位置づけて統一的に分析するのかという問題を検討する必要がある。さらに、「なんか」の強弱を分ける基準は何か、「なんか」の強弱と分布及び機能の相関関係の背後にある理由は何か、などといった経験的問題もある。次の節では、これらの問題も考慮に入れて、「なんか」の韻律の手続き的意味を用いた分析を提案する。

---

[48] 飯尾 (2006) では、この例は節尾に出現した弱形として挙げられた例であるが、「なんか」と表記されている。本稿では(22)と同様に弱形であることを明確に示すため「なんか」と表記する。

[49] 大工原 (2010) は、「なんか」の韻律の極端な音調上昇を「『』で、音調の下降位置を「'」で表している。

5.5.2 「なんか」の韻律の手続き的意味

Wilson & Wharton (2006: 1572) が論じているように、「典型的な発話は言語的信号、自然的信号、自然的兆候などの複合体であり、複雑な形で相互作用し、話し手の意味についての仮説を生み出す」のだと考えられる。この観点は「なんか」にも適用できる。5.3 節までは、「なんか」を韻律と分離し、言語的信号として分析を行なったが、本節では、「なんか」の韻律は、第 2 章で紹介したように、自然的信号として分析することができることを主張する。

まず、Wharton (2009) に挙げられた例を見てみよう。(27)が示しているように、話し手が自発的な声の質と顔の表情で怒りを示しながら、「がっかりした」を発話したとする。

(27) Lily (furiously): I'm disappointed!

(Wharton 2009: 54)

(28) Lily: I'm disappointed!

(Wharton 2009: 141)

この場合、(27)に示したように、Lily はがっかりしただけではなく、「ひどくがっかりした」という意味も自然に理解される。また、話し手が伝えようとする失望感には、異なる程度の失望感があると考えられ、それぞれはまた異なる推意の構築につながる。それに対して、(28)では、発話の韻律が中立的な発音である。この場合に、聞き手の韻律の処理においてかかる労力は最小であるが、得られる解釈の方向づけの手掛かりも少ない。Wharton (2009) によると、中立的な発音から離れた発音であれば、聞き手の処理労力は増えるが、その韻律がもたらした追加的な効果が得られる。そのため、Wharton (2009: 141) が述べているように、「直感的に言うと、韻律の機能は発話の可能な解釈の卓越性 (salience) を調節することによって、聞き手の発話解釈を方向づけることである」と考えられる。

以下では、上記のような観点から「なんか」の韻律を分析する。

楊 (2017b) は、談話標識の「なんか」は認識的警戒を活性化する手続き的意味を持つという主張に基づいて、「なんか」の韻律の手続き的意味について (29)のように特徴づけられることを主張した。

(29)「なんか」の韻律の手続き的意味：（メタレベルで）活性化の度合いを管理・調節せよ[50]。

[50] 飯尾 (2006) の観察は、強形と弱形の違いを決めている要因の 1 つは、モーラの数であることを示唆しているように思われる。基本形の「なんか」は 3 モーラであり、強形と呼ばれた「なーんか」「なんかあ」それとさらにピッチの高低差の含む「なーん'か」は 4 モーラである。また、弱形と呼ばれた「なん

a.強形：聞き手はより深刻なレベル/複数のレベルの不確定性に警戒せよ。

b.弱形：聞き手はそれほど深刻ではないレベル/単一のレベルの不確定性に警戒せよ。

次の 2 つの例を見てみよう[51]。

(30) 杏奈：どうしたの？

大志：いやなんかぁ、ちょっと、あれかなあ、よく分からない...

(31) ロレイン：エビアンと祐哉君の今後、もしも、二人が、付き合うことになります、ってなったら、私二人とも本当に大好きだから、すごい幸せになってほしいなって、思うところもあるけど...なんか、もし付き合って、もしも別れた時があって、そこがギスギスしたらなっていうふうに不安に思う気持ちも、正直ちょっと、ありますね。

(30)は友達同士の杏奈と大志の会話である。困っているように見える大志は、杏奈の質問に答えるのに、強形の「なんかぁ」を使って会話を続けている。後ろの「よく分からない」によってはっきり示されているように、大志自身も、自分がどうしたのかをはっきり認識していなかったことがわかる。ここでは、強形の「なんかぁ」は、話し手は発話を産出する過程の中で、より深刻度の高いレベルか、あるいは、同時に他のいくつかのレベルにおける不確定性があることを示唆していると考えられる。一方、(31)は、ロレインがインタービュされていて、友達のエビアンと祐哉の関係について感想を述べている場面である。「もし付き合って、もしも別れた時があって」という発話の直前に、弱形の「なんか」が使用されている。ここでは、弱形の「なんか」は話し手は友人の 2 人が別れるという想定を言っていいかどうかという、認知レベルより、より深刻度の低い伝達レベルでの不確定性があることを示唆していると考えられる。ここで論じている「なんか」の韻律の強弱と認識的警戒が活性化されるレベルとの対応関係を図 6 として示す。

か」「なか」は 2 モーラである。さらに、強弱が「なんか」の解釈に与える影響は、類像性 (iconicity) に基づく解釈と相関している。なお、本研究は、類像性に基づいた解釈自体も関連性指向の推論に由来していると仮定する。

[51] この 2 つの例の出典は『テラスハウス』である。

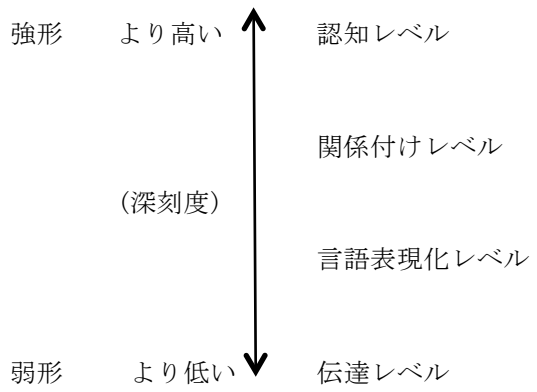

図 6

なお、図 6 で示したレベルは、話し手の意味を解釈する際、聞き手の認識的警戒がどれほど活性化されるかを分析するための尺度であり、必ずしもこの 4 つのレベルのどれかに特定されるという意味ではない。たとえば、同時に複数のレベルで不確定性があるという認識的状態を示す場合や、聞き手はレベルを特定することなく、弱い伝達として受け取る場合も含まれている。

楊 (2017b) では、また、先行研究で示された「なんか」の出現位置とその韻律特徴や、機能との相関関係の背後にある理由も論じた。飯尾 (2006) によると、強形の「なんか」は節頭に出現する頻度が高く、また、多くの場合は発話権の取得・話題変更の機能を持っている。楊 (2017 b) はこの機能は、聞き手は、強形の「なんか」によって、認識的警戒が高度に活性化されやすいという特徴と相関関係があるということを示唆した。この高いレベルの活性化にはより多くの処理労力が消費されるため、聞き手はより大きな認知効果を期待するようになり、後続する発話に対する注意が高まる。この特徴を利用し、話し手はその時点で発話権を自然に獲得したり、新しい話題に変更したりしやすくなるのである。

一方、飯尾 (2006) によると、弱形の「なんか」は節中・節尾に出現する頻度が高く、一般的に発話権の維持・婉曲・和らげなどの機能を持っている。楊 (2017 b) では、弱形の「なんか」がこの機能を持つ一つの可能な理由を提案した。すなわち、弱形の「なんか」を聞いた聞き手は、認識的警戒が過度に活性化されずにすみ、より少ない処理労力を使用し発話を処理するということである。たとえば、深刻度の低いレベルである言語表現化や、伝達レベルに不確定性があっても、聞き手は、その言葉遣いや伝達の方式を過度に深く追究しなかったり、あるいは、個別のレベルの不確定性まで突き止めたりせずに、弱い伝達として受け入れるだろう。話し手はこの点を利用して、(漠然としたイメージのまま) 発話をそのまま進めるか、あるいは想像を聞き手に委ねて発話を終わらせることができると考えられるのである。

5.6 まとめ

本章では、「なんか」について、活性化に基づいた手続き的意味の分析を行ない、この分析では、「制約」の観点では個別的にしか説明できなかった談話標識「なんか」の 5 つの特徴をより一般的な原理に基づいて関連づけて説明できることを示した。

まず、第 1 に、モジュールの活性化は命題に依存しないため、後続命題が省略された「なんか」も、命題の続く「なんか」の使用と同様に分析できる。同時に、モジュールの活性化という分析から、「なんか」による不明瞭な伝達という特徴が自然に帰結することを説明した。第 2 に、2 つの手続き的意味を持つ談話標識の非合成性は、独立したモジュールの活性化を行なっているためであることを説明した。第 3 に、2 つの手続き的意味を持つ談話標識の順序の制限は、活性化されるモジュールの階層性によるものであることを説明した。第 4 に、2 つの手続き的意味を持つ談話標識の順序が自由であることは、活性化されるモジュールが同一の階層にあるという特徴から帰結することを説明した。第 5 に、「なんか」の韻律が持つ手続き的意味は、「なんか」自身の手続き的意味との複合体、すなわち、「自然的信号」と「言語的信号」の複合体を成すものと考えられ、認識的警戒の活性化の度合を管理・調節しているという、「なんか」の韻律の分析を提案し、韻律が語用論の理論的枠組みに位置付けられることを示した。

この分析は心のモジュールの性質や構造の経験的な研究に対して理論的含意を持っている。まず、第 1 に、この分析では、「制約」の観点では個別的にしか説明できなかった談話標識「なんか」の 5 つの特徴をより一般的な原理に基づいて関連づけて説明できるという点で制約より活性化の概念のほうが手続き的意味の特徴づけとして優れていることを示唆しているということである。第 2 に、本分析は、「なんか」の分析に関わる必要最低限の 3 つのモジュールの階層構造のみの考察を行なったが、この分析は、談話標識の分析に基づいてモジュールの階層性についての仮説を経験的に論じることができるということを示しており、Sperber (2005) が示唆していた心のモジュールの経験的研究の 1 つの事例となる可能性を示唆しているということである。

第 6 章　手続き的意味による談話標識「怎么说」の分析

第 3 章では、「なんか」の先行研究をまとめ、第 4 章と第 5 章では、日本語の談話標識「なんか」の手続き的意味の分析を行なった。本章では、「なんか」にほぼ対応した意味と機能を持つ中国語の談話標識「怎么说」が手続き的意味を持つことを主張し、その分析を提案する。6.1 節では、先行研究で記述された「怎么说」の用法や機能を簡単に紹介し、その問題点を指摘する。6.2 節では、「怎么说」が、「なんか」と同様に手続き的意味を持つことを示す証拠があることを論じる。次に、6.3 節では、手続き的意味による分析を行い、「怎么说」は認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つことを提案する。最後に、6.4 節は、まとめである。なお、本章は楊 (2018) の一部に基づいて、修正・発展させたものである。

6.1 談話標識「怎么说」の先行研究

6.1.1「怎么说」の多様な意味・用法

中国語の「怎么说」についての代表的な先行研究である刘 (2013) は「怎么说」の多様な意味・用法を分類した上で、談話標識としての「怎么说」の機能を分析した。

刘 (2013: 41) によると、「怎么」＋「说」から構成された動詞句「怎么说」は、①「話し方を尋ねる」、②「理由を尋ねる」、③「反語文において否定を表す」、④「不特定な指示」、⑤「任意な指示」の 5 つの用法があると述べている[52]。これらの用法に対応して、下の(1) - (5)に示されたような例が挙げられている（訳は筆者による）。

(1) 如果 他们　问　我　为什么 来　这儿　应聘，　我　应该　怎么　　说　　呢？[53]

もし 彼ら 尋ねる 私　なぜ　来る　ここ　応募する 私　すべき　どのように 言う 文末助詞

(もしなぜここに応募しにきたかと聞かれたら、どう言うべきですか？)

(2) 你　　怎么　　说　英语　了？

あなた　なぜ　　話す　英語　　変化を表す助詞

(君はどうして英語で話しているんですか？)

(3) 这　是　　人家　的　家事，　你　　说　他们　自己的　父母　都　　不说，

これ である　他人　の　家事　　あなた　言う　彼ら　自分の　両親　でさえ　言わない

52「怎么说」の分類と名付け方は、先行研究によって異なる。たとえば、郑&蒲 (2009: 36-37) では刘 (2013) の④に相当する用法を「方式集合」を表す「怎么说」と呼んでいる、また、⑤に相当する用法では、通常「不管 (関わらず)」や「无论 (たとえ)」などと一緒に使用し、後続する内容が無条件に確定していることを強める「怎么说」であると述べている。

53 刘 (2013) によると、使用された例文は、北京大学現代漢語コーパス、北京語言大学話し言葉コーパス、映画・ドラマの台詞に出典する。本稿では、刘 (2013) から例文を引用しており、一部改変したものもある。

让　　我　一个　　外人　　怎么说　　啊？

使役　　私　１人の　部外者　どのようにいう　助詞

(人の家のことだし、彼らのご両親すら何も言わないのに、部外者の私はどう言うの？(なんとも言えないじゃない？))

(4) 我　　刚　　学习　英语，所以　这些　用　英语　　怎么说　　怎么写

私　たばかり　学ぶ　英語　そのため　これら で　英語　どのように言う　どのように書く

我　也　　不太　　清楚。

私　も　あまり…ない　よく分かる

(英語を学び始めたばかりで、自分もこれらの英語での言い方や書き方はよく分からない。)

(5) 不管　　你　　怎么说，　　反正　　我　就是　　不同意。

関わらず　あなた　どのように言う　どうせ　私　あくまでも　不同意

(どう言っても、どうせ同意しないから。)

(刘 2013: 41)

同時に、刘 (2013:41) は、上述した用法の他に、(6)に示されたように、日常会話に頻繁に出現する、動詞句ではない談話標識としての「怎么说」があることを指摘した。この「怎么说」には、刘 (2013) は、口語では、助詞の「啊」や「呢」が付加された「怎么说啊」「怎么说呢」などの変異形があると指摘しているが、これらの変異形を刘 (2013) ではすべて基本形「怎么说」と同一の表現とみなして議論している[54]。

(6) 社会　治安　吧，　　怎么说，我　总觉得　　比较　　乱。

社会　治安　間投助詞　怎么说　　私　どうやら　わりに　秩序のない

(社会的治安はね、怎么说、わりに混乱しているように思う。)[55]

(刘 2013: 43 より改変，日本語訳は筆者による)

6.1.2 談話標識「怎么说」の多様な機能

刘 (2013) は談話標識の「怎么说」について、出現位置を分類して、それぞれの具体的な機能を述べている。まず、発話のターンの冒頭に使用される「怎么说」は、応答の始まりを示し、後続する情報の性質（複雑であるかまたは否定的か、微妙（センシティブ）である）を示唆し

54 曹 (2014) は、変異形「怎么说(呢)」を分析している。

55 本稿では、例文にある「怎么说」はほぼ日本語の「なんというか」あるいは「なんか」に対応しているが、日本語訳には翻訳せず、中国語のままにしている。

ている[56]。たとえば、(7)-(9)の例がある。

(7) 医生："你　到底　要　酒　还是　要　命　啊"

医者　あなた　とうとう　要る　お酒　接続　要る　命　文末助詞

(医者： いったいお酒と命、どっちが大事なわけ?)

老杜 ："怎么说呢？ 我　都　想　要，　要　酒　是　为了　度命，

杜さん 怎么说呢　私　すべて したい　要る 要る　酒　である　のために 生き延びる

要　命　是　为了　喝　酒"。

要る　命　である　のために　飲む　酒

(杜さん： 怎么说呢、両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。)

(8) A:　你　真的　不　顾及　我们　朋友　的　情面　吗?

あなた　本当に　否定　配慮する　私たち　友達　の　情実　文末助詞

(A: 本当に私たちの関係を考えてくれないの?)

B: 怎么说呢，我　不想　失去　我们　的　友情，

怎么说呢　私　したくない　失う　私たち　の　友情

但　我　更　不想　违背　做人　的　原则。

しかし　私　更に　したくない　背く　人として　の　原則

(B: 怎么说呢、私たちの友情を失いたくないけど、人の道に背くわけにはいかない。)

(9) A: 你们　现在　关系　到底　进展　到　什么　程度　了?

あなたたち　現在　関係　とうとう　進展する　まで　どんな　程度　文末助詞

(A: あなたたちの関係は今いったいどうなっているの?)

B: 怎么说呢，　我们　同居　了。

怎么说呢　私たち　同棲　文末助詞

(B: 怎么说呢、もう同棲してる。)

(刘 2013: 42-43 より改変，日本語訳は筆者による)

(7)の例では、医者の質問に対して、杜さんは簡単にお酒か命かを選べないという、二者択一ではない複雑な答えを出している。(8)の例では、B の答えは相手が期待している答えではなく、相手にとっては否定的な情報を伝達している。(9)の例では、B の答えは個人的で、言いにくい面があり、微妙またはセンシティブな内容を含んでいる。これらの例における「怎么说」の使用は、応答の始まりを示すのと同時に、後続する情報の性質を前もって示唆することで、

56 刘 (2013) では、3 つの情報の性質は「复杂性」「负面性」「敏感性」と呼ばれている。

話し手の責任を軽減する、または聞き手にもたらす不快感を軽減するといった対人的機能を果たしていると刘 (2013) は示唆している。

次に、刘 (2013) は、発話のターンの中に出現する「怎么说」は、話題を先に進める機能や陳述を先に延ばす機能を持つことを指摘した[57]。

(6) 社会　治安　吧，　怎么说，　我　总觉得　比较　乱。

社会　治安　間投助詞　怎么说　私　どうやら　わりに　秩序のない

(社会的治安はね、怎么说、わりに混乱しているように私は思う。)

(10) 我们　家　呀，　虽然　我　是　在　学校　里　工作　这么　多　年，

私たち 家　間投助詞　接続詞　私　である で　学校　中　仕事　こんなに　多い　年

可是　我　的　孩子　都　是　“文化大革命”　当中　的　这个，　怎么说，

でも　私　の　子供　すべて　である　文化大革命　中　の　ええと　怎么说

被　耽误　的　一代。

受身　立ち遅れ　の　世代

(うちはね、私が学校で長年働いているが、うちの子供たちは皆「文化大革命」のなかで、ええと、怎么说、立ち遅れた世代だ。)

(刘 2013: 43, 45 より改変, 日本語訳は筆者による)

刘 (2013) によると、(6)では、「怎么说」の前に社会的治安という話題を提起した後で、その話題について自分の意見を陳述しているのである。「怎么说」は、先行する節の話題を際立たせるのと同時に、聞き手に後続する陳述を期待するようにさせる。「話題–陳述」という形で、話題を先に進めることが実現されている[58]。一方、(10)では、話し手は話している途中で一時的に適切な表現が見つからず、「怎么说」を使用することで、発話権を維持しながら、陳述を先延ばしにしている。

曹 (2014)も似たような観点から、「怎么说呢」を対象とし、談話における分布及びその機能を記述している。曹 (2014)は、「怎么说呢」は独白体の発話にも対話体の発話にも出現できるが、対話体における出現頻度の方が極めて高いと述べている。また、独白体の発話における「怎么说呢」には、「適切な表現が見つかっていないことを示唆する」機能、「前述の観点についてさらに解釈・説明を加えることを示す」機能、「話題と説明・評論の間に使い、思案していることを示す」機能、「独白的な発話を終える前に使うまとめ」の機能があると述べている。一

57 刘 (2013) では、「话题推进」と「陈述延迟」とされている。

58 刘 (2013) によると、「話題–陳述」の他に、「観点–解釈」、「情報–詳述」、「観点–補充」などの形もあり、いずれの形においても、「怎么说」は話題を先に進める機能を持っている。

方、対話体における「怎么说呢」に関しては、「答えを提示する」機能、「微妙な話題を回避する」機能、「反対意見や否定的評価を婉曲に伝達する」機能、「話し手の躊躇を示しながら発話の継続を維持する」機能を挙げている。

吕 (2015) は「怎么说呢」の使用について、話し手の立場からより認知的な議論を加えている。吕 (2015) は、「怎么说呢」は話し手がメタ認知的にコミュニケーションの過程を監視・調節していることを示す表現の一つであると説明している。すなわち、「怎么说呢」は、話し手が自分自身の情報の伝達や聞き手が情報を受け取る状況などを監視・調節している時の「言語的形跡」であると考えている。たとえば、(11)の例がある。

(11) 还有　她　那　笑，　也　说不上　妩媚，
接続詞　彼女　あの　笑い　並列副詞　とまでは言えない　艶やか
也　说不上　妖娆，　更　说不上　天真烂漫，
並列副詞　とまでは言えない　艶めかしい　更に　とまでは言えない　天真爛漫
怎么说呢，总之　令　我　觉得　放射　出　一种　独特的　美丽，
怎么说呢　とにかく　使役　私　感じる　放射する　方向補語　一種　特有の　美
也　显示　出　性感　的　成分。
も　はっきりと示す　方向補語　セクシーである　の　成分
(彼女の笑顔も、艶やかとも言えない、艶めかしいとも言えない、天真爛漫とはもっと言えない、怎么说呢、とにかく独特な美しさを発散して、セクシーな一面も出しているように感じる。)

(吕 2015: 88, 日本語訳は筆者による)

(11)では、話し手は「彼女の笑顔」について話しているのと同時に、メタレベルで自分の発話と聞き手の理解を監視している。自分の叙述が十分適切ではなく、聞き手に「笑顔」の様子を正確に理解してもらえない可能性があると気づき、「怎么说呢」を使用して時間を稼ぎながら、発話を修正しているのである。

6.1.3　先行研究の問題点

先行研究は「怎么说」が出現する文脈的条件やその使用がもたらす機能を明らかにしているが、「なんか」の先行研究と同様に、次の 2 つの理論的問題がある。第一に、先行研究の説明は、出現場所や機能を分類記述しているが、これらの機能の背後に潜んでいるメカニズムについての説明が不十分である。第二に、先行研究は基本的に話し手の立場を取り、話し手の観点

から「怎么说」を使用する文脈や位置、ないし「怎么说」を使用する時の話し手の認知的活動などについて論じている。しかし、「怎么说」によって引き起こされる聞き手の認知プロセスについては十分に論じられていない。

この 2 つの問題に対して、本研究では、「なんか」の分析と同様に、関連性理論の枠組みで提案された手続き的意味を用いて「怎么说」の分析を行い、聞き手の発話解釈の過程を考えることによって先行研究で観察された「怎么说」の使用と機能の特徴を統一的に関係づけて説明することを試みる。

次節からは、談話標識の「怎么说」が手続き的意味を持つことを示す特徴を確認した上で、「怎么说」は聞き手の認識的警戒を活性化する手続き的意味を持つという分析を提案する。さらに、これが聞き手の認知プロセスの出発点になり、先行研究で記述された「怎么说」の各種の機能はここから推論によって派生的に得られたものであることを示す。

6.2 談話標識「怎么说」の性質

本節では、まず、「怎么说」が、「なんか」と同様に、非真理条件的で、手続き的意味を持つことを示す証拠があることを確認する[59]。

6.2.1 非真理条件性

まず、次の場面での(12)の発話を考えてみよう。(12)は、大学で行われた公開インタービューが終わり、最後にスピーカーが、来場した若者たちに一言メッセージを伝えるように司会者に頼まれた時の発話である。

(12) 主持人: 那　最后　您　还　有　什么　想　对
司会: では　最後に　あなた　まだ　ある　何　したい　に対して
在场　的　年轻　朋友们　说　的　话　吗?
その場にいる　の　若い　仲間内　言う　の　言葉　文末助詞
(司会： では、最後にこの場にいる若者たちに何か伝えたいことがありますか。)
王老师： 怎么说，　年轻人　应该　多　出去　走走，　多　见见世面。
王先生　怎么说　若者　すべき　多く　出かける　歩く　多く　見聞を広める
(王先生: 怎么说、若い人たちはもっと外に出て、見聞を広めるべきだと思う。)

(楊 2016 より修正後引用)

[59] 刘 (2013) は談話標識の「怎么说」の意味は手続き的であることに言及しているが、その証拠を示していない。

第 4 章の 4.1.1 節における「なんか」の非真理条件性を確認するのと同様に、ここでは、まず、「怎么说」の真理条件性を検証するため、条件節に埋め込んでテストを行う。王先生の「怎么说」から始まる発話を「如果 (もし)」から始まる条件節に埋め込み、それに後続する節は、例えば、(13)のような発話だとする。

(13) 那　我　一定　支持　他们　出国　留学　的　想法。
　　では　私　必ず　応援する　彼ら　出国する　留学する　の　考え
　　(それなら私は必ず彼らが海外へ留学しに行くことを応援する。)

すなわち、王先生の発話を条件節に入れた上で、(13)が加わると、(14)に示されたよう文になる。

(14) 如果，怎么说，年轻人应该多出去走走，多见见世面的话，那我一定支持他们出国留学的想法。
　　(もし、怎么说、若い人たちはもっと外に出て、見聞を広めるべきならば、私は必ず彼らが海外へ留学しに行く夢を応援する。)

ここで考えるべきことは、「我一定支持他们出国留学的想法 (私は必ず彼らが海外へ留学しに行く夢を応援する)」ということは、「年轻人应该多出去走走，多见见世面 (若い人たちはもっと外に出て、見聞を広めるべきだと思う)」なのか、それとも「怎么说，年轻人应该多出去走走，多见见世面 (怎么说、若い人たちはもっと外に出て、見聞を広めるべきだと思う)」なのかである。その答えは、前者であり、つまり「怎么说」は条件節に入らいように思われる。すなわち、 (14)の例において、「なんか」と同じように、「怎么说」は真理条件に貢献せず、非真理条件的という性質を持つのである。

6.2.2 非概念性

次に、「怎么说」は概念的であるか手続き的であるかについて考えよう。第 4 章の 4.1.2 節で紹介した 3 つのテスト、すなわち、「意識へのよび出し可能性」「真理判断可能性」「合成性」の 3 つを用いて順に「怎么说」を意味の性質を検証してみよう。

まず、直感的に、「怎么说」は中国語の母語話者の意識にのぼれないというわけではない。先行研究でも示されていたように、「怎么 (どのように)」と「说 (言う)」の 2 つの部分により構成された動詞句としての意味・用法は 5 つ挙げられている。文法化を経て、談話標識として

使用されていても、「说 (言う)」の語彙的な意味がまだ母語話者に意識されるため、「怎么说」全体の意識しやすさをある程度高めているかもしれない。

次に、「怎么说」に対して真理判断可能性を調べる。 (12)の例をもう一度見てみよう (ここでは逐語訳を省略して(15)として再掲)。

(15) 主持人: 那最后您还有什么想对在场的年轻朋友们说的话吗?

(司会： では、最後にこの場にいる若者たちに何か伝えたいことがありますか。)

王老师： 怎么说，年轻人应该多出去走走，多见见世面。

(王先生: 怎么说、若い人たちはもっと外に出て、見聞を広めるべきだと思う。)

この例の王先生の発話対して、「不是怎么说 (怎么说ではない)」を用いて否定することができない、あるいは、「你不是知道怎么说吗? (どのように言うか知っているんじゃない?)」のような非難は受けないのである。すなわち、談話標識の「なんか」と同じように、真偽を問えず、非概念的な性質を持っている。

最後に、「怎么说」の合成性を調べる。ここでは、第 4 章で挙げた「なんか」と「ただし」の連続的な使用例に対応する中国語の例文を見てみよう。会議中、ある面接官がある候補者を次のように評価したとする。

(16)田中先生的能力和人品都很适合这个工作。只是，怎么说，他有点过于认真了。

(田中さんの能力と人柄はこの仕事に相応しい。ただし、なんか、彼は真面目すぎる。)

ここでは、「只是 (ただし)」と「怎么说 (なんか)」の 2 つの表現はより大きくて複雑な手続きを構成するのではなく、順に解釈されているように思われる。類似した表現である、「所以，怎么说 (そこで、なんか)」、「而且，怎么说 (さらに、なんか)」などを用いた例も考えることができる[60]。すなわち、このテストの結果も、「怎么说」は「なんか」と同じように、手続き的意味としての性質を持つことを示している。

従って、1 つ目のテストの結果には若干曖昧さが残っているが、3 つのテストを総合して見ると、「怎么说」は非概念的な性質を持つと考えられる。なお、3 つのテストを全て通った談話標識「なんか」との間に違いがあり、非概念性が「なんか」ほど明確ではないことがわかる。

60「不管怎么说 (どう言っても)」という表現もあるが、これは、「不管 (に関わらず)」と動詞句の「怎么说」の合成から由来しているように思われる。

6.3 「怎么说」の手続き的意味

6.3.1 「怎么说」と高次表意の制約

前節では、「怎么说」は手続き的意味を持つことを示す証拠があることを示した。本節では、「怎么说」はどのような手続き的意味を持っているかについて検討する。

楊 (2016: 185) は関連性理論の枠組みで、制約に基づく手続き的意味による「怎么说」の分析を提案した。そこでは、「怎么说」は聞き手の高次表意の構築に次のような 2 つの制約を課しているということを主張した。1 つ目は、話し手は「怎么说」に先行する話題についての思考が不十分であり、まだ斟酌していると解釈せよという制約である。2 つ目は、話し手は「怎么说」に後続する発話において暫定的にその時点でまとめられた考えを述べていると解釈せよという制約である。上の(7)の例を見てみよう (ここでは逐語訳を省略し(16)として再掲)。

(16) 医生：“你到底要酒还是要命啊”

(医者： いったいお酒と命、どっちが大事なわけ?)

老杜 ：“怎么说呢？我都想要, 要酒是为了度命，要命是为了喝酒”。

(杜さん : 怎么说呢、両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。)

この例において、お酒と命の大事さという話題が医者の質問によって提起されている。制約で特徴づけられた手続き的意味の分析では、「怎么说」の使用によって、医者は、杜さんはこの話題について斟酌していて、暫定的に「両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです」という答えを出しているという高次表意を構築するように推論が制限されると説明される。もし、(17)が示しているように、「怎么说」がなければ、上述の解釈とは異なり、たとえば、(18)に示されたような他の解釈が聞き手 (医者) によって構築されるかもしれない。

(17) 我都想要, 要酒是为了度命，要命是为了喝酒”。

(両方大事です、お酒は生きて行くためで、命はお酒を飲むためです。)

(18) a.話し手は(17)が表す命題を確信している

b.話し手は(17)が表す命題を強く主張している

c.話し手(17)が表す命題で医者に反発している

…

すなわち、話し手はお酒と命の大事さについて、両方が大事であることとその理由を確信して

いるか、強く主張しているか、医者に反発しているという解釈のどれかを聞き手である医者が構築する可能性がある。さらに、その解釈の結果として、たとえば、医者の面目がつぶれることになるかもしれない。しかし、「怎么说」が加わると、(18)に示したものではなく、①先行する話題について斟酌している、及び②暫定的に後続する情報を述べているという 2 つの点で高次表意の構築が制限される。そこで、聞き手はさらに、斟酌する理由について推論を展開することができる。例えば、二者択一ではない複雑な答えが続くかもしれないと予測し、前もって心の準備ができる。また、暫定的に答えを述べているため、患者の強い主張や医者に対する反発という解釈が成立しなくなる。そこで、聞き手は面目をつぶされたと思うことはなくなり、聞き手への配慮という対人的機能が派生的に得られると考えることができる。

6.3.2 「怎么说」と認識的警戒の活性化

6.3.1 節で見たように、「怎么说」は聞き手の高次表意の構築に制約をかけるという考え方は、3.3 節で示した 2 つの理論的問題を解消するための提案であるが、この提案自体にもまだ検討の余地がある。まず、第 1 に、高次表意は基本的に、命題が話し手の態度や発話行為に埋め込められることで構築される。しかし、この「怎么说」の手続き的意味の提案は、形式上、従来の高次表意の構築に貢献する手続き的意味とは異なっており、前後 2 つの部分への制約を規定している。先行する話題についてまだ斟酌しているという制約は、厳密に言うと、高次表意の構築に直接関与しているわけではないのである。第 2 に、実際に、「怎么说」の使用を観察すると、「なんか」と同様に、必ずしもその後ろに命題が続くとは限らない。たとえば、(19)では、「怎么说」に後続する発話が省略されている。「怎么说」は高次表意の構築に制約をかけているという分析は、後ろに命題が省略されている(19)のような例をうまく説明できないのである。

(19) A: 最近　工作　还　顺利　吗？
　　最近　仕事　まだ　順調　文末助詞
　(A: 最近仕事順調？)
　B: 怎么说，. . . 算了，　还是　不　说　了。
　　怎么说　やめにする　やはり　否定　言う　文末助詞
　(B: 怎么说、. . . いいや、この話やめよう。)

(楊 2018: 102 より引用)

仕事の調子を聞かれて、B は「怎么说」を発話して、続いて何かを言おうとしていたが、最終

的には何も言わずに、この話題をやめることにしたとする。本来「怎么说」に後続するはずであった発話が沈黙になったため、命題は伝えられていない。すなわち、基本的な論理形式がなく、基礎表意も高次表意も構築できないため、「怎么说」は聞き手の高次表意の構築に貢献する手続き的意味を持つと分析することは難しい。これらの問題を考慮し、楊 (2018)では、代わりに「怎么说」は、高次表意の構築を課す手続き的意味ではなく、(20)に示したように、聞き手の認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案した。

(20)「怎么说」の手続き的意味：話題が言語的に確立されているという場合に、聞き手の認識的警戒モジュールを活性化し、話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという認識状態に気づかせる。

(楊 2018: 103 より修正後引用)

(6)の例をもう一度見てみよう (ここでは逐語訳を省略し(21)として再掲)。

(21) 社会治安吧，怎么说，我总觉得比较乱。
(社会的治安はね、怎么说、混乱していると思う。)

(21)では、社会的治安という話題が言語的に確立されている。この条件の下で「怎么说」によって聞き手の認識的警戒モジュールが活性化され、聞き手は話し手の不確定性のある認識的状態に気づく。この例では、「社会的治安が混乱している」という命題が続いていて、さらに「覚得 (思う)」という表現とも共起しているため、話し手は現地の社会的治安に対する認識のレベルに不確定性があるという解釈を構築することで聞き手は関連性への期待が満たされる。さらに、この不確定性に気づいたため、後続する情報の性質を予測することもできる。たとえば、聞き手は、否定的な情報が続くかもしれないという推論をして、心の準備がある程度できるかもしれない。したがって、発話の聞き手へのインパクトや聞き手にもたらす不快感がその分だけ軽減される。すなわち聞き手配慮の機能が派生的に得られると考えられる。また、聞き手は不確定性のある認識状態の下で情報を伝達していると気づいているので、どれぐらいそれを真剣に受け止めるかは聞き手自身が責任を持って決めることになるため、その分だけ話し手の責任が軽減されることになる。つまり話し手の責任軽減の機能が得られると考えられる。

次に、言語表現レベルに不確定性がある場合もある。(10)の例をもう一度見てみよう (ここでは逐語訳を省略し(22)として再掲)。

(22) 我们家呀，虽然我是在学校里工作这么多年，可是我的孩子都是“文化大革命”当中的这个，怎么说，被耽误的一代。

(うちはね、私が学校で長年働いているが、でもうちの子供たちは皆「文化大革命」のなかで、この、怎么说、立ち遅れた世代だ。)

(22)では、話し手は自分の家族の状況を紹介しており、さらに、発話の中で、「文化大革命」という話題が確立されている。この場合、「怎么说」によって、聞き手は、認識的警戒モジュールが活性化され、不確定性があるという話し手の認識の状態に気づく。この例では、話し手は、「文化大革命」の時代的背景において、子供達に「立ち遅れた世代」という名称を付けても良いかどうかという言語表現化レベルに不確定性があると解釈することで関連性への期待が満たされる。聞き手は話し手の不確定性に気づいたところから、さらに推論を展開させることができる。たとえば、聞き手は、話し手は現時点においてうまく表現できないかもしれないが、もう少し待てばそれなりの適切な表現が見つかるかもしれないと予測し、話し手が発話するのを待つ可能性が高い。その結果、話し手は発話権を維持することができるという「怎么说」の談話的機能が派生的に得られると考えられる。それと同時に、不確定性を伴う表現であることを見抜いたため、聞き手は情報を深く信じ込まずに、軽く受け止める姿勢を取ることも考えられる。

最後に、伝達レベルに不確定性がある場合の例として、(8)の例を見てみよう(ここでは逐語訳を省略し(23)として再掲)。

(23) A: 你真的不顾及我们朋友的情面吗？

B: 怎么说呢，我不想失去我们的友情，但我更不想违背做人的原则。

(A: 本当に私たちの関係を考えてくれないの？)

(B: 怎么说呢、私たちの友情を失いたくないけど、人の道に背くわけにはいかない。)

(23)では、友人関係を配慮するかどうかという話題が先行する発話において明確に確立されている。そこで、話し手 B が「怎么说呢」を発話することで、聞き手 A は、認識的警戒モジュールが活性化され、話し手は発話のどこかに不確定性があると気づくのである。ここでは、2 人の関係を配慮できないという聞き手 A に期待された答えではないため、話し手 B は伝達レベルに不確定性があるという解釈が構築されやすい。聞き手は話し手の不確定性があるという認識の状態に気づいた時点から、推論を展開し、否定的な答えが続くかもしれないと予測したりして、前もって心の準備ができる。また、話し手が強い主張をした場合や聞き手に対する反

発がある場合ほど聞き手の面目はつぶされないため、聞き手への配慮という対人的機能が派生的に得られると考えることができる。

上で述べた 3 つの例は、「怎么说」に命題が続き、命題が提供している情報や、他の共起する表現などと合わせて、不確定性をより特定的なレベルに絞ることができることを示している。さらに、高次表意を構築することもできる。

では、次に、後続する命題が省略された場合を見てみよう。上の(19)の例をもう一度見てみよう(ここでは逐語訳を省略し(24)として再掲)。

(24) A: 最近工作还顺利吗？

(A: 最近仕事順調？)

B: 怎么说. . . 算了, 还是不说了。

(B: 怎么说、... いいや、この話やめよう。)

(24)では、もし話し手 B の発話に「怎么说」がなければ、聞き手 A は、話し手 B の認識の状態に特に気が付かず、発話のとおりに仕事の話をしたくないと受け取るかもしれない。それに対して、仕事の現状という話題が言語的に確立されたという条件の下で、「怎么说」があることで、聞き手は処理をそのまま続けるわけではなく、一旦認識的警戒モジュールが活性化され、話し手がその時点で不確定性のあるという認識の状態に気づく。この例では、聞き手は、たとえば、話し手は、仕事の状況は複雑で、簡単に順調、あるいは不調と言い切れず、なんと言うべきかがはっきり分からないという言語表現化レベルに不確定性があり、最終的にこの発話を諦めることにした、という解釈を構築することができる。あるいは、話し手は仕事の状況が順調ではなく、会社の体制や職場の人間関係などに関する不満が溜まっているが、しかし、それを言うと聞き手の気分も悪くする可能性があり、言うべきかどうかという伝達レベルに不確定性があり、最終的にこの発話を諦めることにした、という解釈も構築できる。この 2 つの解釈は高次表意ではなく、推意である。また、特にどれかが強いと言えず、聞き手は両方とも弱い推意として構築し関連性への期待を満たすことができる。聞き手は、また、これらの解釈に基づいて、さらに推論を続ける可能性がある。たとえば、話し手は本当に仕事の話を全くしたくないのか、話したいけど言い難いことがあるのか、問い詰めたら教えてくれるのかなど、より深い推論が続くかもしれない。

このように、「怎么说」は必ずしも高次表意の構築に貢献するとは限らないため、本研究では、「認識的警戒モジュールを活性化し、話し手にはどこかのレベルに不確定性があるという心的状態へ気づかせる」という手続き的意味を提案した。高次表意の構築は、聞き手は話し手

の不定の心的態度に気づいた上での次の段階での解釈と考えられる。したがって、「怎么说」は、聞き手に、「話し手にはどこかのレベルに不確定性がある」と気づかせ、高次表意の構築に貢献する可能性があるが、必ずしも高次表意を構築するわけではない。言い換えると、「怎么说」は、後続する命題の有無に関わらず、聞き手の認識的警戒を活性化させ、不確定性のある話し手の心的状態に気づかせるのである。命題が続く場合のみ、この気づきが話し手の命題態度の読み取りに影響を与え、高次表意の構築に貢献する。また、先行研究で示された「怎么说」の多様な機能は、聞き手が話し手の不確定性のある認識の状態に気づいた後で、さらに推論をすることによって派生的に得られたものなのである。

6.4 まとめ

本章では、日常会話の中で頻繁に使用される談話標識の「なんか」の分析に基づいて中国語の「怎么说」の意味・機能について、「活性化」に基づく手続き的意味による分析を行った。「怎么说」は、「なんか」と同様に、非真理条件的であるのと同時に、認識的警戒モジュールを活性化し、話し手の不確定性のある心的状態への気づきを聞き手に与えるという手続き的意味を持つことを示した。また、この不確定性への気づきが聞き手の認知的プロセスの出発点であり、その上で、さらに推論を展開させたり、命題が後続する場合に高次表意を構築したりして、先行研究で記述された各種の機能が派生的に得られると考えられる。

一方で、「怎么说」は母語話者の意識にのぼるのが「なんか」ほど難しくないことは、「怎么说」は「なんか」と比べ、手続き的意味の性質が弱いことを示している。また、「怎么说」は先行する話題が言語的に確立されることが必要であるという点でも「なんか」とは異なっている。

第 7 章　まとめと今後の課題

7.1 まとめ

本研究では、関連性理論の枠組みで提案された「手続き的意味」の概念を用いて、日本語の談話標識「なんか」を分析した。これまでの研究は基本的に話し手の観点から、「なんか」の多様な用法や機能などを説明してきた。本研究はコミュニケーションのもう一方の担い手である聞き手の観点から、「なんか」を分析した。Wharton (2003, 2009), Wilson (2011, 2016), Sperber et al. (2010) に従い、「なんか」は「認識的警戒モジュール」を活性化する手続き的意味を持つことを提案した。従来の研究で記述されてきた「なんか」の様々な機能、あるいは聞き手が発話解釈において感じられる様々な効果は、この手続き的意味を基礎として、そこから「関連性指向」の推論によって派生的に得られるものであることを主張した。さらに、活性化に基づいた手続き的意味のアプローチを「なんか」にほぼ対応している中国語の談話標識「怎么说」の分析に応用した。

これまでの手続き的表現の分析は、基本的に Blakemore (1987) に従って、「制約」に基づく手続き的意味のアプローチを採用していきた。Wharton (2003, 2009) によって、「活性化」の概念が提案されて以来、分析できる対象の範囲が大幅に広がっているが、「活性化」に基づく手続き的意味のアプローチを用いた分析事例はまだ多くない。本研究では、「活性化」に基づく手続き的意味を用いて、日本語の「なんか」と中国語の「怎么说」を分析し、両言語における事例研究を提供することができた。また、「なんか」の分析において、伝統的な「制約」に基づく手続き的意味のアプローチでは統一的に説明できなかった 5 つの特徴は、「活性化」に基づく手続き的意味で統一的に説明することができることを示した。すなわち、従来の「制約」に基づく手続き的意味のアプローチより、「活性化」に基づく手続き的意味のアプローチの方が経験的に優れていることを示した。さらに、手続き的意味の研究への寄与のほか、談話標識の研究の分野でこれまでほとんど分析されていなかった「共起」の現象を、「手続き的意味」の観点から説明することを試みた。これまでの談話標識の研究は主に単独で用いられた談話標識の使用にしか焦点が当てられていなかったが、本研究は、2 つの談話標識の共起に見られる特徴の分析に対する手続き的意味を用いた新たらしいアプローチを提案した。

以下では、章ごとに本研究の内容を簡単に要約する。

まず、第 1 章では、Schourup (1999)、Lohmann & Koops (2016)、廣瀬 (2012)、松尾・廣瀬・西川 (2015) などに基づいて、談話標識の概念とこれまでの研究のアプローチを簡単に紹介した。その上で、本研究は、日本語の「なんか」と中国語の「怎么说」を分析対象とし、関連性理論の枠組みで、「手続き的意味」という概念を用いて分析を行うことを説明した。さらに、

関連性理論の中でも、特に、Wharton (2003, 2009)、Wilson (2011, 2016) によって提案、発展させられた「モジュールの活性化」に基づく手続き的意味を用いて分析を行うという本研究の立場を説明した。

第 2 章では、関連性理論の枠組みを概観した。まず、関連性理論の 2 つの原理及び関連性理論の発話解釈の手順の考え方を簡単に紹介した後で、Blakemore (1987) によって提案された「手続き的意味」の概念を紹介した。次に、Carston (2016) に基づいて、「手続き的意味」の研究の史的変遷を概観した。その後、特に「制約」に基づく手続き的意味から、Wharton (2003, 2009) によって提案された「活性化」に基づく手続き的意味への発展を説明し、「活性化」に基づく手続き的意味を用いた間投詞、言語的及び非言語的表出表現の分析を概観した。最後に、Whilson (2011, 2016) に発展させられた、広範囲モジュール性の仮説を取り入れた手続き的意味の研究の新しい展望を紹介した。

第 3 章では、「なんか」の先行研究を概観した。まず、日常会話で頻繁に使用される「なんか」の談話標識としての多様な機能についての研究を概観した。鈴木 (2000) が導入した「語用論的機能」と「談話調節機能」への分類に基づいて、「婉曲」「責任回避」「発話権に関わる機能」「話題に関わる機能」を簡単に説明した。その後、内田 (2001) の「なんか」の意味変化の研究や、森川 (1991)、川上 (1991, 1992) の不定表現としての「なんか」の研究を紹介した。また、田窪・金水 (1997)、大工原 (2010) による発話の産出過程に焦点を当てた認知的な試みを取り上げて紹介した。最後に、残された課題として、これまでの研究で観察された「なんか」の多様な談話的機能や対人的機能を支えるメカニズムが十分に論じられていないことと、聞き手の立場からの体系的な考察が行われていないことの、2 つの理論的課題があることを示した。

第 4 章では、関連性理論の枠組みで提案された基準を用いて、「なんか」が非真理条件性と非概念性という性質を持つことを示した。その上、従来の「制約」に基づく「手続き的意味」による「なんか」の分析を提案した。この「制約」に基づく手続き的意味を用いた分析では、説明することができない「なんか」の 5 つの特徴があることを指摘した。すなわち、①後続命題の省略と不明瞭性、②共起する談話標識との非合成性、③共起する談話標識との順序の制限、④共起する談話標識との順序の自由、⑤韻律との複合という特徴である。

第 5 章では、まず、「なんか」と表出表現との類似性を示し、Wharton による、手続き的意味を用いた表出表現の分析と同様に、活性化に基づく手続き的意味を用いた「なんか」の分析ができることを示した。一方、Wharton が分析した表出表現は「感情の読み取りモジュール」を活性化するのに対して、Sperber, et al. (2010) 他によって提案された「認識的警戒」の概念に基づき、「なんか」は「認識的警戒モジュール」を活性化する手続的意味を持つことを提案し

た。また、この手続き的意味の分析では、第 4 章で述べた「なんか」の 5 つの特徴を統一的に説明することができることを示した。最後に、この「なんか」の分析は、手続き的意味の理論に日本語の談話標識の事例研究を提供するのみならず、「制約」より「活性化」に基づく手続き的意味の概念の方が経験的に優れていることを示した。

第 6 章では、「なんか」にほぼ対応している中国語の談話標識「怎么说」に対して、同様に手続き的意味の分析を提案した。まず、「怎么说」の先行研究を概観した後で、これまでに記述された「怎么说」の用法や機能が統一的に説明されておらず、かつ聞き手の立場からはほとんど分析されていないという 2 つの問題を指摘した。次に、「怎么说」には、非真理条件的で、非概念的な性質があることを示した。その後で、「怎么说」は、認識的警戒モジュールを活性化する手続き的意味を持つという分析を提案した。さらに、「なんか」と「怎么说」は、認識的警戒を活性化し、話し手の不確定性のある認識的状態への気づきを与える手続き的意味を持っているという共通性を持ちながら、一方で、「怎么说」は、母語話者にとっては意識にのぼることはそれほど難しくない、すなわち、「なんか」と比べ、手続き的意味の性質が比較的に弱いこと、「怎么说」には先行する言語的に確立された話題が必要となることという、「なんか」とは異なる 2 つの特徴があることを指摘した。

7.2 今後の課題

7.2.1 モジュールの階層構造の精緻化

本研究では、「なんか」と他の談話標識との共起の現象を説明するために、広範囲モジュール性の仮説に基づいて、「推論的理解モジュール」と「認識的警戒モジュール」「共感のモジュール」の間に階層構造があることを仮定し、階層構造に基づく活性化の優先順位仮説を提案した。しかしながら、この仮説は、本研究の研究対象に関わる必要最低限の 3 つのモジュールに限られており、また、モジュール内部の手続きや他のモジュールとの関係については論じていない。たとえば、本研究では、「どうも」が対応する「共感のモジュール」を Wharton が分析した間投詞が対応する「感情の読み取りモジュール」とは別のモジュールであると仮定しているが、心理学や人間行動学などの分野の知見に基づいて、両者の関係をさらに明確にする必要がある。また、他のモジュールとの関係も視野に入れてより精緻で、説明力のあるモデルを今後構築する必要がある。

7.2.2「なんか」と「怎么说」の比較

本研究では、談話標識の「なんか」と「怎么说」の手続き的意味には 2 つの相違点があることを指摘したが、その違いはどこに由来するのかについては論じていない。直感的に、「怎么

说」は手続き的意味を持つ談話標識であるのと同時に、動詞句の「怎么说」から、概念的な影響も引き継いでいるように思われ、文法化とも関わりのある問題であるように思われるが、この点については論じていない。また、本研究では、「なんか」の手続き的意味の分析において、「なんか」だけではなく、他の談話標識との共起や、自然的な韻律との複合なども含めて分析を行った。同じ方向に沿って、「怎么说」の事例研究もさらに発展させることができるように思われる。文法化の過程や、談話標識の共起、韻律との複合などを含めた、2 つの談話標識のより詳しい分析と比較は今後の課題とする。

参考文献

Ameka, F., 1992. Interjections: The universal yet neglected part of speech. *Journal of Pragmatics.* 18. 2-3, 101-118.

Baron-Cohen, S., 1995. *Mindblindness*. Cambridge, MA: MIT Press.

Barrett, L., Dunbar, R. I. M., Lycett, J. 2002. *Human Evolutionary Psychology*. Princeton University Press.

Blakemore, D., 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Basil: Blackwell.

Blakemore, D., 1996. Are apposition markers discourse markers? *Journal of Linguistics.* 32, 325-347.

Blakemore, D., 2000. Indicators and procedures: nevertheless and but. *Journal of Linguistics.* 36, 463-486.

Blakemore, D., 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

Blakemore, D., 2011. On the descriptive ineffability of expressive meaning. *Journal of Pragmatics*. 43. 14, 3537-3550.

Blakemore, D., 2015. Slurs and expletives: A case against a general account of expressive meaning. *Language Sciences.* 52, 22-35.

Brandon, R., 2005. The Theory of Biological Function and Adaptation. Online Conference on Adaptation and Representation.

曹秀玲, 2014. 从问到非问：话语标记的一个来源--以“怎么说呢”为例, 山西大学学报(哲学社会科学版). 37.4, 60-67.

Carston, R., 2016. *The heterogeneity of procedural meaning*. Lingua. 175, 154-166.

Chafe, W.,1987. Cognitive constraints on information flow. In: Russell S. Tomlin (Ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins, 21-51.

Cosmides, L. and Tooby, J. H., 1992. Cognitive adaptations for social exchange. In: Barkow, J.H., Cosmides, L., Tooby, J.H. (Eds.), *The Adapted Mind*. Oxford: Oxford University Press. 163-228.

Cosmides, L. and Tooby, J. H., 2000. The cognitive neuroscience of social reasoning. In: Gazzaniga, M.S., (Ed.) *The New Cognitive Neurosciences*. Cambridge MA: MIT Press. 1259-1270.

大工原勇人, 2010.「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究：フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」博士論文，神戸大学.

de Waal, F. B., Preston, S.D., 2017. Mammalian empathy: Behavioural manifestations and neural basis. *Nature Reviews Neuroscience.* 18. 8, 498-509.

Ekman, P., 1999. Emotional and conversational nonverbal signals. In: Messing, L., Campbell, R., (Eds.), *Gesture, Speech, and Sign*. Oxford: Oxford University Press, 45-57.

Escandell-Vidal, V., Leonetti, M., Ahern, A., (Eds.), 2011. *Procedural Meaning: Problems and Perspectives*. Emerald Group Publishing, Bingley, UK.

Field, T. M., Woodson, R., Greenberg, R., Cohen, D., 1982. Discrimination and imitation of facial expression by neonates. *Science.* 218, 179-181.

Fiske, S. T., Taylor, S. E., 2008. *Social Cognition: From Brains to Culture*. New York: McGraw-Hill.

Fodor, J., 1983. *The modularity of Mind: An Essay on Faculty Psychology*. Cambridge, MA: MIT Press.

Fraser, B., 1990. An approach to discourse markers. *Journal of Pragmatics.* 14, 383-398.

Fraser, B., 1996. Pragmatic markers. *Pragmatics.* 6, 167-190.

Fraser, B., 1999. What are discourse markers? *Journal of Pragmatics.* 31, 931-952.

Fraser, B., 2009. Topic orientation markers. *Journal of Pragmatics.* 41.5, 892-898.

Fraser, B., 2015. The combining of Discourse Markers-A beginning. *Journal of Pragmatics.* 86, 48-53.

Gazzaniga, M. S., Smiley, C. S., 1991. Hemispheric mechanisms controlling voluntary and spontaneous facial expressions. *Journal of Cognitive Neuroscience.* 2, 239-245.

Goffman, E., 1981. *Forms of Talk*. Oxford: Blackwell.

Grice, H. P. 1975/1989. Logic and conversation. In: Cole, P., Morgan, J. L (Eds.), *Syntax and Semantics.* vol. 3*,* 41–58.

Halliday, M. A., 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold (second edition).

Halliday, M. A., Hasan, R., 1976. *Cohesion in English.* London: Longman.

Hauser, M. D., 1996. *The Evolution of Communication*. Cambridge, MA: MIT press.

飛田良文，浅田秀子, 1994.『現代副詞用法辞典』東京堂出版.

東森勲，吉村あき子, 2003.『関連性理論の新展開 ： 認知とコミュニケーション』研究社.

平本毅, 2011.「発話ターン開始部に置かれる『なんか』の話者性の『弱さ』について」『社会言語科学』14. 1, 198-209.

廣瀬浩三, 2012.「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』7, 1-28.

廣瀬浩三, 2014.「英語談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』9, 1-33.

Ifantidou, E., 1993. Sentential adverbs and relevance. *Lingua.* 90, 69-90.

飯尾牧子, 2006.「短大生の話し言葉にみる談話標識『なんか』の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38, 67−77.

今井邦彦, 2015.『言語理論としての語用論：入門から総論まで』開拓社.

今井邦彦, 西山佑司, 2012.『ことばの意味とはなんだろう: 意味論と語用論の役割』岩波書店.

Iten, C., 2000. Non-truth-conditional Meaning, Relevance and Concessives. Doctoral dissertation. University of London.

Iten, C., 2005. *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance: The Case of Concessives*. (武内道子, 黒川尚彦, 山田大介 (訳)『認知語用論の意味論: 真理条件的意味論を越えて』ひつじ書房.)

Jefferson G., 1983. On a failed hypothesis: 'Conjunctionals' as overlap-vulnerable. *Tilburg papers in language and literature.* 28, 1-33.

Kaplan, D., 1999. What is meaning? *Explorations in the theory of Meaning as Use*. MS.

川上恭子, 1991.「『何か』の不定対象と文形式」『園田語文』6, 101-121.

川上恭子, 1992.「談話における『なんか』について」『園田国文』13, 73-82.

金田一晴彦, 1975.『日本人の言語表現』講談社.

小池康, 2006.「モダリティ副詞としてのドウモ:ドウヤラ・ナンカ (ナニカ)・ナンダカ・ナントナクとの関連において」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』21, 1-18.

Levelt, W., 1993. *Speaking: From Intention to Articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.

Levinson, S.C.,1983. *Pragmatics*. New York: Cambridge University Press.

刘丽艳, 2013. 话语斟酌标记“怎么说”及其功能研究. 宁夏大学学报(人文社会科学版). 35. 5, 41-47.

Lohmann, A., Koops, C., 2016. Aspects of discourse marker sequencing. In: Kaltenböck, G., Keizer, E., Lohmann, A. (Eds.), *Outside the Clause: Form and Function of Extra-Clausal Constituents.* John Benjamins Publishing Company, 417-445.

吕为光, 2015. 迟疑功能话语标记“怎么说呢”. 汉语学报. 51. 3, 87-94.

Malle, B., 2004. How the Mind Explains Behavior: Folk Explanations. Meaning and Social Interaction. Cambridge, MA: MIT Press.

Matsui, T., Yamamoto, T., McCagg, P., 2006. On the roll of language in children's early understanding of others as epistemic beings. *Cognitive Development.* 21, 158-173.

Matsui, T., Yamamoto, T., Miura, Y., McCagg, P., 2016. Young children's early sensitivity to linguistic indications of speaker certainty in their selective word learning. *Lingua.* 175, 83-96.

松尾文子, 廣瀬浩三, 西川眞由美, 2015.『英語談話標識用法辞典：43 の基本ディスコース・マーカー』研究社.

水谷信子, 1985.『日英比較：話し言葉の文法』くろしお出版.

森かおる, 2012.「日本語会話における『なんか』の役割：ターン冒頭要素としての働きに注

目して」『英語学英米文学論集（奈良女子大学英米文学会）』38, 25-41.

森川結花, 1991.「不定表現について：『なんか』を中心に」『日本語・日本文化』17, 145-160.

Nelson, C. A., De Haan, M., 1996. Neural correlates of infants' visual responsiveness to facial expressions of emotion. *Developmental Psychobiology* 29.7, 577-595.

西山佑司, 1995.「『言外の意味』を捉える」『言語』24. 4, 30-39.

尾上圭介, 1983.「不定語の語性と用法」渡辺実 (編)『副用語の研究』明治書院.

Phillips, R. D., Wagner, S. H., Fells, C. A., Lynch, M. 1990. Do infants recognize emotion in facial expressions? Categorical and "metaphorical" evidence. *Infant Behavior and Development*, 13.1, 71-84.

Potts, C., 2007. The expressive dimension. *Theoretical Linguistics.* 33. 2, 165-198.

Preston, S., De Waal, F. B., 2002. Empathy: Its ultimate and proximate bases. *Behavioral and Brain Sciences.* 25.1, 1-20.

Rouchota, V., 1998. Connectives, coherence and relevance. In Rouchota, V. Jucker, A. H. (Eds.), *Current Issues in Relevance Theory*, John Benjamins Publishing, 11-57.

Sacks, H., 1992. *Lectures on Conversation.* vol.2. Oxford: Blackwell.

定延利之, 2002. 「インタラクションの文法」に向けて：現代日本語の擬似エビデンシャル」『京都大学言語研究』21, 147-185.

Schiffrin, D., 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schiffrin, D., 2001/2004. Discourse markers: Language, meaning, and context. In: Schiffrin, D., Tannen, D., Hamilton, H. E. (Eds), *The Handbook of Discourse Analysis*, 54-75. Oxford: Blackwell.

Schourup, L., 1985. *Common Discourse Particles in English Conversation*. New York & London: Garland.

Schourup, L., 1999. Discourse markers. *Ligua.* 107, 227-265.

Scott, K., 2011. Beyond reference: Concepts, procedures and referring expressions. In: Escandell-Vidal, V., Leonetti, M., Ahern, A. (Eds.), *Procedural Meaning: Problems and Perspectives*, 183-203.

Scott, K., 2013. This and that: A procedural analysis. *Lingua.* 131, 49-65.

Sebeok, T., 1972. *Perspectives in Zoosemiotics.*The Hague: Mouton.

Seeley, T. D., 1989. The honey-bee colony as a superorganism. *American Scientist.* 77, 546-553.

Sperber, D., 1994. The modularity of thought and the epidemiology of representations. In: Hirschfeld, L. A., Gelman, S. A., (Eds.), *Mapping the Mind: Domain Specificity in Cognition and Culture*, 39-67.

Sperber, D., 2005. Modularity and relevance: How can a massively modular mind be flexible and context-sensitive? In: Carruthers, P., Laurence, S., Stich, S. P., (Eds.), *The Innate Mind: Structure and Content,* 53-68.

Sperber, D., Wilson, D., 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Sperber, D., Wilson, D., 1998. The mapping between the mental and the public lexicon. In: Carruthers, P., Boucher, J. (Eds.), Language and Thought: Interdisciplinary Themes, 184-200.

Sperber, D., Wilson, D., 2002. Pragmatics, modularity and mind-reading. *Mind & Language.* 17. 1-2, 3-23.

Sperber, D., Clément, F., Heintz, C., Mascaro, O., Mercier, H., Origgi, G., Wilson, D., 2010. Epistemic vigilance. *Mind & Language.* 25. 4, 359-393.

杉崎美生, 2018.「自己開示場面における『なんか』の即興性」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』24, 81-92.

鈴木佳奈, 2000.「会話における『なんか』の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』9, 63-78.

武内道子, 2015.『手続き的意味論：談話連結語の意味論と語用論』ひつじ書房.

田窪行則, 金水敏, 1997.「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』. くろしお出版. 257-279

Traugott, E. C., 1982. From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271.

内田らら, 2001.「会話に見られる『なんか』と文法化:『前置き表現』の『なんか』は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学紀要』24. 2, 1-9.

内田論, 2012.「『ただ』と『ただし』について：関連性理論を用いた分析」吉村あきこ，須賀あゆみ，山本尚子.（編）『ことばを見つめて：内田聖二教授退職記念論文集』英宝社. 191-201.

内田聖二，2004.「メタ表象と日本語—たい/たがっている構文を例として」『言語』33. 6, 79-86.

内田聖二，2011.『語用論の射程：語から談話・テクストへ』研究社.

内田聖二，2013.『ことばを読む、心を読む：認知語用論入門』開拓社.

Unger, C., 2012. Epistemic vigilance and the function of procedural indicators in communication and comprehension. In: Wałaszewska, E., Piskorska, A. (Eds.), *Relevance Theory. More than Understanding.* New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 45-73.

Wharton, T., 2003. Interjections, language, and the ‘showing/saying’ continuum, *Pragmatics & Cognition.* 11, 39-91.

Wharton, T., 2009. *Pragmatics and Non-verbal Communication*. Cambridge: Cambridge University

Press.

Wharton, T., 2012. Prosody and meaning: theory and practice. In: Romero-Trillo, J. (Ed.), *Pragmatics and Prosody in English Language Teaching.* Springer Science & Business Media, 97-116.

Wharton, T., 2016. That bloody so-and-so has retired: Expressives revisited. *Lingua.* 175, 20-35.

Wierzbicka, A., 1992. The semantics of interjection. *Journal of Pragmatics* 18. 2-3, 159-192.

Wilkins, D., 1992. Interjections as deictics. *Journal of Pragmatics* 18. 2-3, 119-158.

Wilson, D., 2005. New directions for research on pragmatics and modularity. *Lingua.*1129-1146.

Wilson, D., 2011. The Conceptual-Procedural Distinction: Past, Present and Future. In:Escandell-Vidal, V., Leonetti, M., Ahern, A. (Eds.) *Procedural Meaning: Problems and Perspectives*, Bingley: Emerald Group Publishing, 3-31.

Wilson, D., 2012. Modality and the conceptual-procedural distinction. In: Wałaszewska, E., Piskorska, A., *Relevance Theory: More than Understanding.* New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 24-43.

Wilson, D., 2016. Reassessing the conceptual–procedural distinction. *Lingua* 175: 5-19.

Wilson, D., Sperber, D., 1993. Linguistic form and relevance, *Lingua.* 90, 1-25.

Wilson, D., Sperber, D., 2004. Relevance theory. In: Horn, L., Ward, G. (Eds.), *The Handbook of Pragmatics*, Blackwell, 607-632.

Wilson, D., Wharton, T., 2006. Relevance and prosody. *Journal of Pragmatics.* 38. 10, 1559-1579.

ウィルソン,ディアドリ., ウォートン,ティム., (今井邦彦(編), 井門亮, 岡田聡宏, 松崎由貴, 古牧久典, 新井恭子(訳)), 2009『最新語用論入門 12 章』. 東京: 大修館書店.)

山根智恵, 2002.『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.

楊雯淇, 2015.「関連性理論的アプローチによる日本語談話標識『なんか』の分析」平成 27 年度修士論文

楊雯淇, 2016.「手続き的意味による中国語談話標識『怎么说』の分析」日本言語学会第 153 回大会予稿集, 182-187.

楊雯淇, 2017a.「手続き的意味による日本語談話標識『なんか』の分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24, 57-74.

楊雯淇, 2017b.「談話標識『なんか』の手続き的意味と韻律」日本英語学会第 35 回大会・スチューデントワークショップ「ことばと意味の可能性：手続き的情報と構文」口頭発表.

楊雯淇, 2018.「手続き的意味による中国語談話標識『怎么说』の分析」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』26, 91-107.

楊雯淇, 上田雅信, 2017.「活性化を用いた手続き的意味:日本語の談話標識『なんか』の事例研

究」日本言語学会第 155 回大会予稿集, 234-239.

Yang, W., Ueda, M., 2018. On Procedural Meaning: Cognitive constraint or activation? ―Evidence from an analysis of the Japanese discourse marker *Nanka*―, 2018 Annual Meeting of the Linguistics Association of Great Britain, Oral Presentation.

郑绮, 蒲霏, 2009. “怎么说”的语法化历程. 现代语文(语言研究版). 2009 年第 10 期, 36-38.

横林宙世, 下村彰子, 1998.『接続の表現 (外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6)』荒竹出版, 東京.

用例出典

『オレンジディズ』 (第 7 話)

『テラスハウス』 (ALOHA STATE) NETFLIX 2017 年配信

謝辞

この研究の遂行および論文の執筆にご支援を賜った皆様に心から感謝いたします。

まず、修士課程から指導を引き受けてくださった上田雅信先生に心から感謝を申し上げます。博士課程の後半での論文の読み合わせの代わりにしていただいた、ディスカションを主にしたゼミが一番印象に残っています。ゼミでは、言語学だけではなく、科学哲学、生物学、進化心理学などの分野にまで及ぶ刺激的な話をお伺いすることができて、自然科学の研究の考え方についても教わりました。説明が分かり難い時には、ホワイトボードに図を書きながら説明をしてくださったり、学会発表のリハーサルも兼ねて英語で議論をしてくださったりして、先生のお蔭で、研究も発表も楽しみながら進めることができるようになりました。また、発表の原稿や論文をいつも何度も読んで貴重なコメントをくださったことを心から感謝しております。

上田先生のご退職後に指導を引き受けてくださった飯田真紀先生にも心から感謝申し上げます。飯田先生の論文を拝読する機会もあり、その都度、丁寧な分析が見本になり、勉強させていただきました。また、学会やシンポジウムの発表に誘ってくださったり、終始励ましとサポートをしてくださったりしたことを、心から感謝いたします。また、修士論文、博士論文の審査を担当し、貴重なコメントをくださった大野公裕先生、ティーチングアシスタントをさせていただいた時にいつも研究を気にかけ、有益な助言をくださった奥聡先生、スカイプゼミで刺激と励ましをくださった平田未季先生、北大に関連性理論と手続的意味についての連続講義にいらしてくださった吉村あき子先生、日本英語学会のスチューデントワークショップでの発表と勉強会に誘ってくださった盛田有貴先生を始め、これまで様々な機会にお世話になった学内外の先生方に心から感謝いたします。また、興味深いデータを提供してくださった同じ研究室の村山友里枝さん、日高慶美さん、研究生時代からの同期であり、互いに支え合ってきた許晴さんをはじめ、ご支援をいただいたすべての先輩、同輩、後輩にも心からお礼申し上げます。

最後になりますが、経済面の援助だけではなく、精神的にも支えてくれた父楊京山、母高暁苗のお蔭で、私は安心して勉強することができ、充実した留学生活を送ることができました。心から感謝いたします。

平成 30 年 11 月　楊雯淇